

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集

たこ やま や しき
鳳山屋敷遺跡

2003

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県瀬戸市は名古屋市の北東約 20km に位置し、1300 年のやきものの歴史と伝統を持つ街です。とりわけ、今回調査しました鳳山屋敷遺跡が所在する赤津地方は、赤津焼を代表する 7 種類の釉薬が七釉ななゆうと言われ、国の伝統的工芸品に指定されていますように、昔から窯業生産が盛んな場所で、いたるところに古窯跡が所在しています。

このような歴史と伝統を持つ瀬戸市の南東部で、愛知万博が 2005 年に開催されるのに伴い、周辺道路の整備がすすめられています。今回の調査も県道瀬戸設楽線建設の事前調査として、愛知県より委託を受けて実施しました。調査の結果、奈良時代から明治時代にかけての住居跡を検出し、断絶はあるものの、古代から続く人々の営みの一部が明らかになりました。特に中世の赤津地方で窯業生産が行われていない空白の時代の遺構を検出したことは、当時の窯業生産体制を考える上で貴重な資料になると考えます。

今回これらの成果をまとめ、報告書を刊行することになりました。本書が歴史資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施に当たりまして、地元の方々を初め、関係者及び関係機関のご協力とご指導をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

平成 15 年 8 月

財団法人愛知県教育サービスセンター

理事長 井上 銀治

例 言

1. 本書は愛知県瀬戸市鳳山町に所在する鳳山屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道瀬戸設楽線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は範囲確認調査を平成12年4・5月、13年3月に行った後、本調査を14年1月から3月まで実施した。調査面積は範囲確認調査100㎡、本調査1,600㎡である。
4. 発掘調査の担当者は、平成12年度が、北村和宏（課長補佐兼主査、現愛知県立豊田高等学校教諭）、小澤一弘（専門員、現主査）、魚住英史（調査研究員、現瀬戸市立品野台小学校教諭）、早野浩二（調査研究員）、宇佐見守（調査研究員、現春日井西高等学校）、平成13年度が、服部信博（課長補佐兼主査、現愛知県立一宮興道高等学校教諭）、藤岡幹根（調査研究員、現主査）、宇佐見守である。
5. 調査および本書作成にあたっては、埋蔵文化財運営協議会委員、埋蔵文化財専門委員ならびに次の方々、関係機関のご協力、ご指導を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、瀬戸市教育委員会、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、赤羽一郎、金子健一、城ヶ谷和広、服部郁、藤澤良祐、森泰通、山下峰司（順不同・敬称略）
6. 発掘調査は中島京（発掘調査補助員）を始め、次の方々の参加を得た。
相坂早紀、浅見久江、安藤繁一、井上次代、井上正昭、梅田貢、浦川百々子、江尻美保子、大川内具昭、大河内園子、大園敏夫、太田米子、岡部守、河西寿政、角友恵（愛知県立大学）、加藤孝明、加藤孝子、加藤竹枝、柄沢章三、河合小百合、川井七子、神戸詠子、木村尚子、小林節子、小林秀寿、正村千代子、高木茂夫、高木民子、高橋有子、高橋理恵、土屋敦子、土屋末松、壺井順治、戸田比呂之、富岡正、長江陶子、長江翼、中島通子、中村忠、成田サチ子、西田悦子、野田和義、野牧励、野村忍、長谷川智治（愛知文教大学）、幡野雄三、林年美、林春代、日比野征二、藤井憲司、藤井洋子、堀美智子、水野末子、三宅織部、三宅隆子、宮本智子、宮本勢津子、三輪謙介（愛知学院大学）、三輪正、安田和子、山田邦夫、山田征治、山田のぶよ、横山洋、横山令子、渡辺実（五十音順・敬称略）
7. 遺物整理および本書作成に関わる作業において小嶋そのみ（調査研究補助員）を始め、次の方々の協力を得た。
秋田道子、阿辺山孔子、稲葉芳美、奥本真由美、小倉明子、川名詳子、黒宮美智子、近藤文子、斎場きみ子、坂本ゆみ子、太刀川美和子、滝沢恵子、津田恵子、長江伊都子、中野啓子、深田美智子、真崎千恵子、宮石千津子、村瀬さゆり、元木保美、森川敏子、山本栄子（五十音順・敬称略）
8. 整理作業の効率化をはかるため、次のものに関しては民間の企業に一部を委託した。遺構図面のデジタルトレースおよび土器の実測・デジタルトレース（アイシン精機株式会社）、石器の実測・デジタルトレース（株式会社シン技術コンサル）、出土遺物の写真撮影（スタジオピア）、オンライン編集（株式会社クイックス）、微化石分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）
9. 本書の執筆と編集は宇佐見が担当したが、一部第1章2を藤岡が、第3章1-1を永井宏幸（調査研究員）が、第4章をパリノ・サーヴェイが分担執筆した。
10. 調査および本書で使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標（平面直角座標）第Ⅶ系に基づくものであり、海拔標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
11. 本書で使用した土壌色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
12. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いた番号を用いた。したがって、土坑（SK）・溝（SD）などの記号にも厳密な統一性はない。
13. 発掘調査時の記録（実測図・写真など）は愛知県埋蔵文化財センターで保管し、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

CONTENTS

序
例言

1 調査の概要

1. 調査の経緯と概要	1
2. 地理的および歴史的環境	2
2-1 地理的環境	2
2-2 歴史的環境	2
3. 基本層序	4

2 遺 構

1. 古 代	5
2. 中 世	5
3. 戦 国	6
3-1 A 区 1 面	6
3-2 A 区 2 面	7
3-3 A 区 3 面	7
3-4 B 区	9
4. 近 世	9
5. 近 代	10

3 遺 物

1. 土 器	11
1-1 古 代	11
1-2 中世から戦国時代	12
1-3 近世以降	17
1-4 その他の土器	19
2. 石製品	19
3. 金属製品	20

4 微化石分析

はじめに	21
1. 試 料	21
2. 分析方法	21
2-1 珪藻分析	21
2-2 花粉分析	22
2-3 植物珪酸体分析	22
3. 結 果	22
3-1 珪藻分析	22
3-2 花粉分析	23
3-3 植物珪酸体分析	23
4. 考 察	23

5 まとめ

鳳山屋敷遺跡の遺構変遷	27
-------------	----

図 版

図版目次

遺構

図版 1 基本遺構図 1 面 No.1	29	図版 11 A 区 SK476 出土状態図	39
図版 2 基本遺構図 1 面 No.2	30	図版 12 A 区 SB02 ～ 05 平面図	40
図版 3 基本遺構図 2 面 No.1	31	図版 13 A 区 SK175・SD10 他出土状態 図・セクション	41
図版 4 基本遺構図 2 面 No.2	32	図版 14 A 区 SK174 出土状態図・ セクション	42
図版 5 基本遺構図 2 面 No.3	33	図版 15 B 区 SK441 出土状態図・ エレベーション	43
図版 6 基本遺構図 3 面	34	図版 16 A 区 SX05 出土状態図	44
図版 7 基本遺構図 4 面	35	図版 16 A 区 SD02・06・07 セクション	44
図版 8 A 区 SB01 (掘りかた) 平面図・エレベーション	36	図版 17 A 区 西壁セクション	45
図版 9 B 区 SB01 平面図・セクション	37	図版 17 A 区 東壁セクション	45
図版 10 B 区 SB02 (掘りかた) 平面図・セクション	38		

遺物

図版 18	46	図版 25	53
図版 19	47	図版 26	54
図版 20	48	図版 27	55
図版 21	49	図版 28	56
図版 22	50	図版 29	57
図版 23	51	図版 30	58
図版 24	52		

写真図版目次

遺構

写真図版 1	59	写真図版 5	63
写真図版 2	60	写真図版 6	64
写真図版 3	61	写真図版 7	65
写真図版 4	62		

遺物

写真図版 8	66	写真図版 12	70
写真図版 9	67	写真図版 13	71
写真図版 10	68	写真図版 14	72
写真図版 11	69	写真図版 15	73

1. 調査の経緯と概要

鳳山屋敷遺跡は瀬戸市鳳山町に所在する。鳳山町に人家はなく、遺跡周辺は鬱蒼とした竹林となっているが、赤津川沿いに石炭窯跡や水車小屋跡が、丘陵斜面に石垣を伴う3段の平坦面と明治時代ごろの陶磁器の散布がみられるため、以前からこの時期の屋敷跡があると考えられていた。ここに県道瀬戸設楽線の建設が計画されたため、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成12年4月から5月と、13年3月に範囲確認調査を実施した。その結果、明確な遺構は確認できなかったが、古代から近代にかけての遺物が出土したため、遺物の出土が多かった地点1,600㎡を調査区と定め、平成14年1月から3月にかけて本調査を実施した。調査は、調査区の南側をA区、北側をB区とし、A区から開始した。調査を進めていくと、当初の予想に反し、多数の遺構と遺物が出土した。特にA区は遺物包含層が良好に残存し4面調査となった。調査の結果、縄文時代から近代にかけての遺物が出土したが、検出した遺構は、古代（須恵器・土師器が出土）、中世（古瀬戸製品・山茶碗が出土）、戦国（大窯製品・土師質製品が出土）・近世（登り窯製品が出土）・近代の5時期に大きく区分できる。

参考文献

小澤一弘 2001 「鳳山屋敷範囲確認調査」『年報平成12年度』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
宇佐見守 2002 「鳳山屋敷遺跡」『年報平成13年度』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

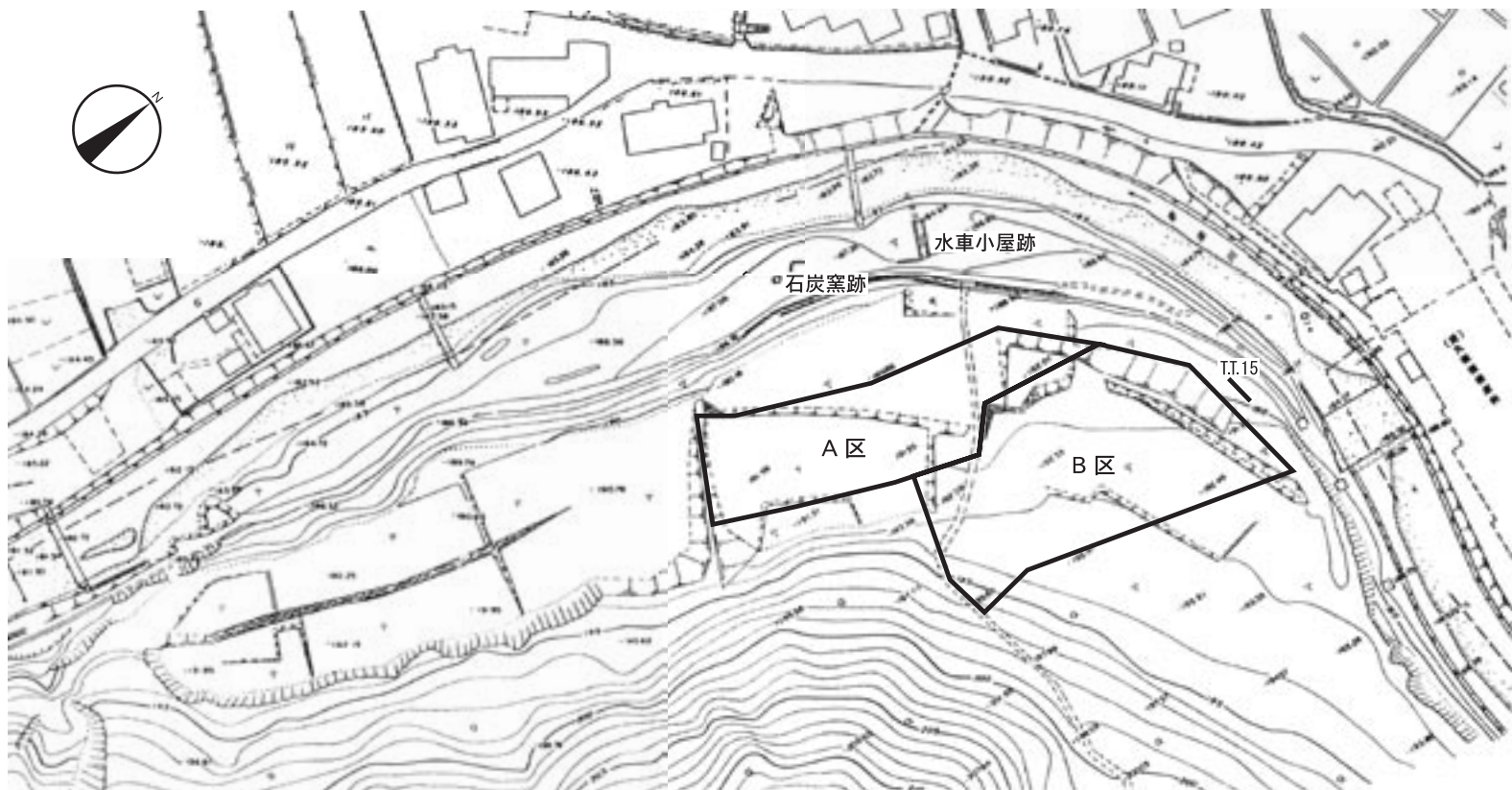


図1 調査区位置図 (1:1000)

2. 地理的および歴史的環境

2-1 地理的環境

瀬戸市東部には、三国山（標高 701m）と猿投山（標高 629m）がそびえ、標高 500 から 600m 内外の山地が続く、木曽山脈へと連なっている。この瀬戸東部の山地から矢田川水系の赤津川が流れており、菱野丘陵とのさかいに赤津盆地を形成している。鳳山屋敷遺跡は、東部山地につながる低丘陵地の縁辺にあり、赤津盆地・赤津川に隣接するところに位置する。標高は 191m 前後である。

2-2 歴史的環境

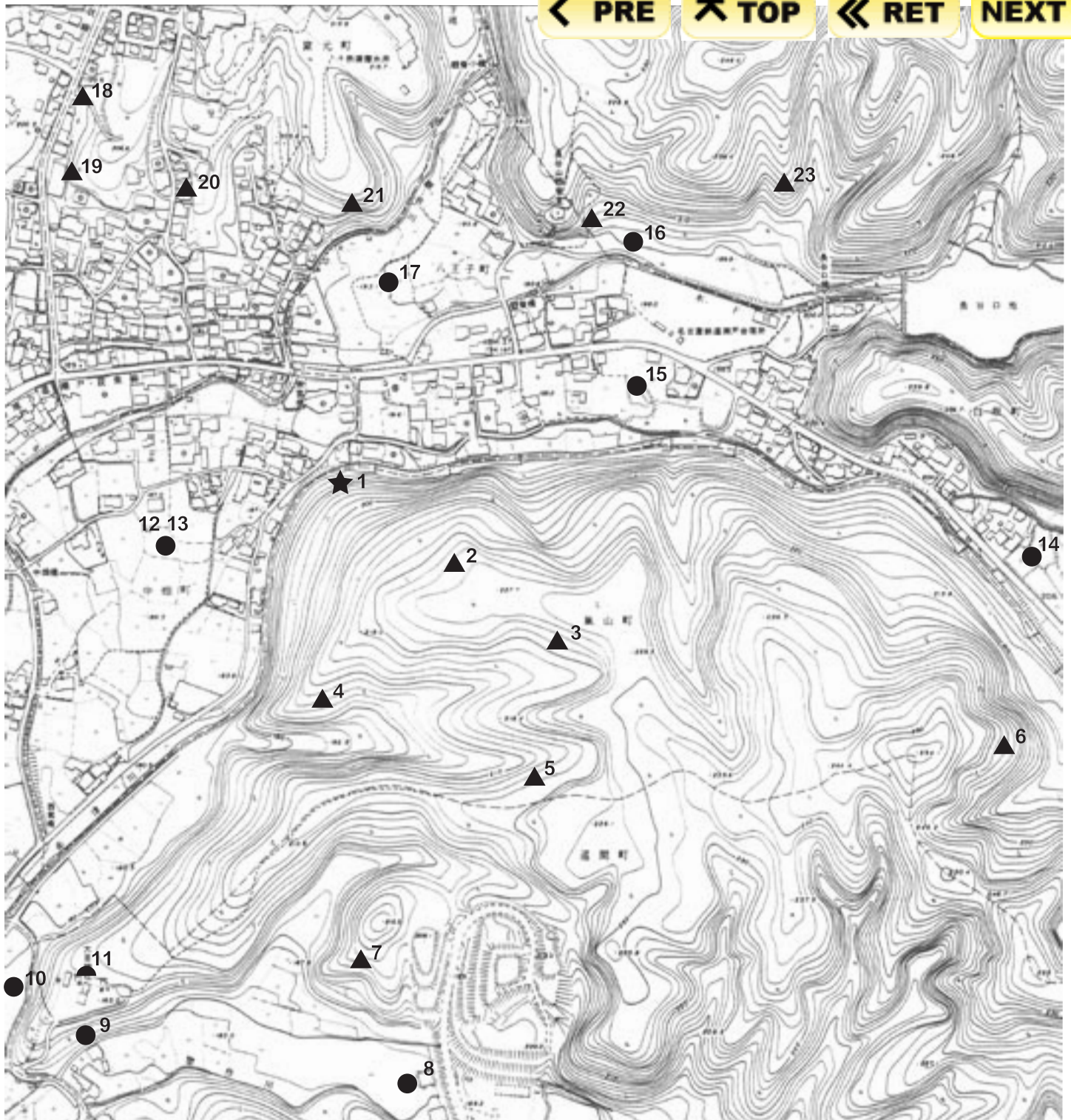
鳳山屋敷遺跡（図 2 中 1）の北東 300m ほどの河岸段丘上に縄文時代から近世・近代までの複合遺跡である長谷口遺跡（同 16）と八王子遺跡（同 15）がある。また、鳳山屋敷遺跡から南西 500m には、径 10m 前後の墳丘が残存する大目神社古墳（同 11）や土製勾玉や銅鐸型土製品の出土した惣作・鐘場遺跡（縄文から近世の複合遺跡）（同 10）がある。

赤津区内において確認された中世の窯は 100 を超え、いずれも現在の集落地東部に広がる丘陵地内に分布している。鳳山屋敷遺跡がある赤津北西部では丘陵の頂上に近い斜面にある鳳山 C 窯跡（同 3）の窯体 2 基から、山茶碗第 7 型式の遺物が出土している。その南東 100m ほどのところに鳳山窯跡（同 5）があり、その南 100m ほどに巡問 E 窯跡（同 7）がある。巡問 E 窯跡の窯体 2 基から、山茶碗第 9 型式の遺物・古瀬戸中期Ⅳ段階から後期Ⅰ段階の遺物が出土している。また、鳳山 B 窯跡（同 6）からは古瀬戸後期Ⅲ段階の遺物が出土するなど、赤津北西部では中期から後期にかけて窯が継起的に操業されていたと考えられる。ただ、戦国時代には鳳山 A 窯跡（同 2）や白山社窯跡（同 21）等、大窯による生産が行われていたものの、それに続く織豊期の大窯はこれまでのところ確認されていない。

近世赤津村の窯業は、初代尾張藩主である徳川義直が 1610（慶長 15）年に美濃国郷ノ木村から利右衛門（後の唐三郎）と仁兵衛の兄弟を呼び戻し、保護したのが始まりといわれている。窯元 A 窯跡（同 20）は、江戸時代中期を中心に焼かれていた窯で、藩御用を務めた御窯屋の窯跡といわれている。17 世紀後半の赤津村は、瀬戸村・下品野村と並び窯業が栄えた村で、『寛文村々覚書』によれば、「概高千五拾六石九斗九升五合 家数百七拾軒 人数六百七拾五人」とあり、当時は、石高・戸数・人口とも現在の瀬戸市を構成する 18 ケ村中最大の村落であった。窯跡としては、17 世紀以降の連房式登窯が 12 基（同 4・19・20・22・23 等）、大窯が 4 基（同 4・18・20 等）確認されており、文書史料からは概ね 5 基前後の連房式登窯が 18 世紀代には同時稼働していたことがうかがわれる。赤津村の窯業生産の特徴として、17 世紀代においては連房式登窯の登場後も第 3 四半期頃までは、大窯が存続し、大窯で茶陶を中心に生産が行われたこと、18 世紀以降は搗鉢・片口鉢・卸皿などの調理用具、銭甕・半胴・壺などの貯蔵用具を主要焼成品としていたことが指摘されている。また、窯元 A 窯跡は全国的にも例がない土師器を焼いていた江戸時代後期の窯も発見されている。

参考文献

- 青木修編 1993 『窯元 A 窯跡』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 山下峰司編 1993 『西窯 A 窯跡 I』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第 4 集財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 瀬戸市史編纂委員会編 1986 『瀬戸市史資料編二自然』
- 瀬戸市史編纂委員会編 1993 『瀬戸市史陶磁史篇四』
- 瀬戸市史編纂委員会編 1998 『瀬戸市史陶磁史篇六』
- 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター編 2002 『年報平成 13 年度』
- 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター編 2003 『年報平成 14 年度』
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002 『江戸時代の瀬戸窯』



1. 尻山屋敷遺跡（縄文～近代）
2. 尻山A窯跡（戦国）
3. 尻山C窯跡（中世）
4. 瓶子窯跡（近世）
5. 尻山窯跡（中世）
6. 尻山B窯跡（中世）
7. 巡問E窯跡（中世）
8. 惣作遺跡（中世）
9. 大目神社遺跡（中世～近世）
10. 惣作・鐘場遺跡（縄文～近世）

11. 大目神社古墳（古墳）
12. 中畑遺跡（古代～近世）
13. 赤津遺跡（古代～近世）
14. 白坂雲興寺遺跡（縄文～中世）
15. 八王子遺跡（縄文～中世）
16. 長谷口遺跡（縄文～近世）
17. 八王子観音遺跡（古代～近世）
18. 春慶窯跡（近世）
19. 窯元B窯跡（近世）
20. 窯元A窯跡（近世）

21. 白山社窯跡（戦国）
22. 長谷口B窯跡（近世）
23. 長谷口C窯跡（近世）

図2 周辺の遺跡（1：5000）

3. 基本層序

A区は遺物包含層が良好に残存しており、基本層序の様相はA区とB区でかなり異なる。

A区は、調査前2段の平坦面に分かれていたが、下段は表土および耕作土を除去すると基盤層が現れ、遺物包含層は北側にわずかにみられる程度であった。上段は中央部を境に南北で様相が異なる。北側の包含層は大きく2層に分かれるが、ともに古代の遺物をほとんど含まず、中世から戦国時代にかけての遺物を多量に含み、時期差のない堆積と考える。南側（図3、図版5）は大きく5層に分かれる。I層は暗褐色粗粒砂を主とする層で、近世以降の耕作土と考える。II層は褐色粗粒砂を主とする層で、整地層である。整地が行われた時期は、III層との境から大窯3段階の遺物が出土していることと、この面で検出した柱穴（SK034）から大窯4段階の天目茶碗が出土していることから、この間と考える。III層は暗褐色極粗粒砂を主とする層で、中世から戦国時代の遺物を大量に含む。IV層は黒褐色細～粗粒砂を主とする層で古代から中世の遺物を含むが、大窯製品は含まない。V層は黒色細粒砂を主とする層で古代の遺物を含む。

B区も、調査前2段の平坦面に分かれており、上段で3面、下段で2面の包含層を確認したが、A区と比較すると各層は浅く、出土する遺物は細片が多い。特に古代の遺物は削平され下段ではほとんどみられなかった。上段（図3、図版3）のVI層（褐色粗粒砂層）は近世の遺物を含むが、VII層（暗褐色粗粒砂層）は近世の遺物を含まないため、VI層とVII層の間には時期差があるが、VII層と基盤層直上のVIII層（褐色極粗粒砂を主とする層）の間には、古代の遺物を含む割合が違うものの、明確な時期差は確認できない。

参考文献

瀬戸市史編纂委員会編 1993『瀬戸市史陶磁史篇四』

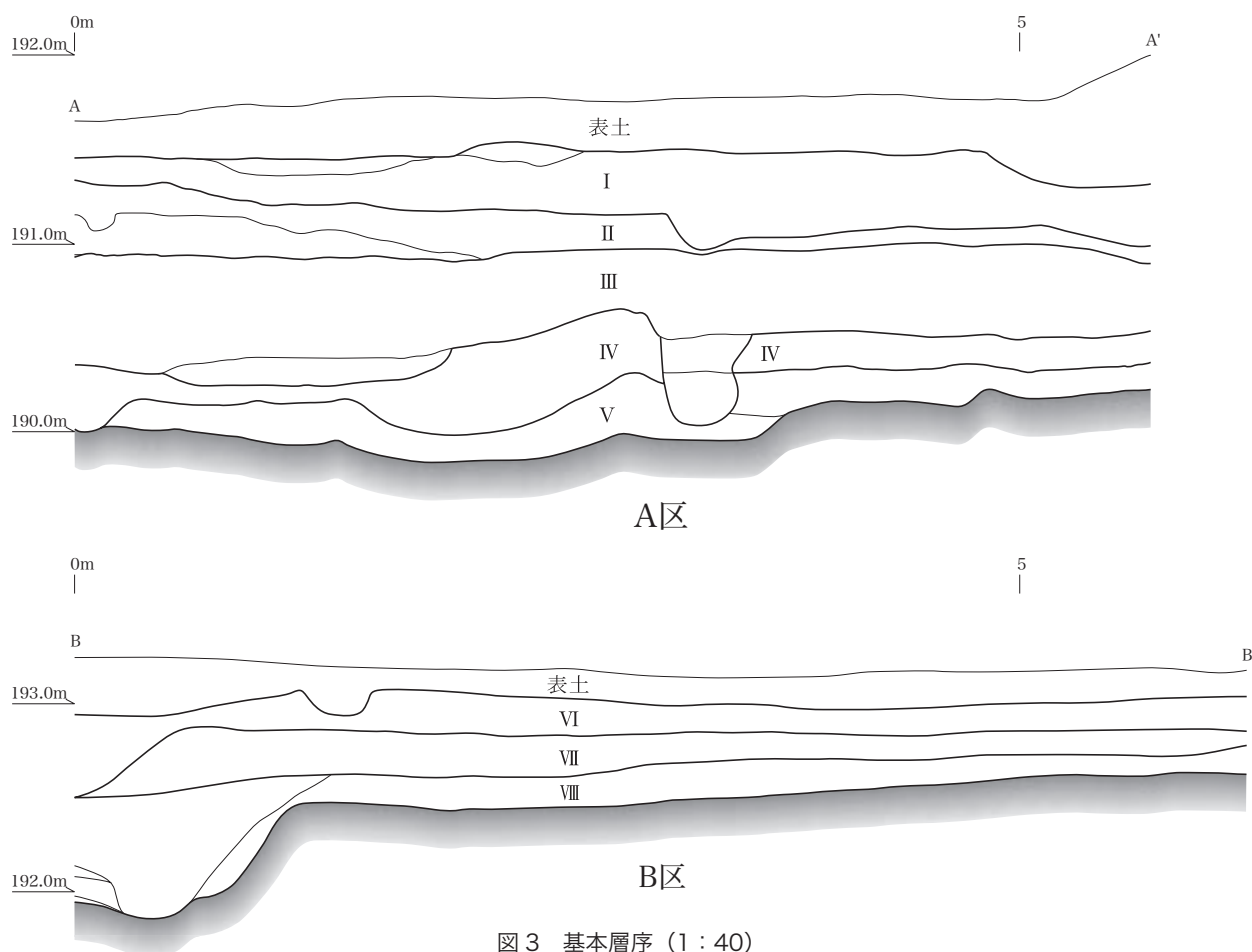


図3 基本層序 (1:40)

1. 古 代

古代の主な遺構として、竪穴住居 3 棟を検出した。これらは、出土遺物から奈良～平安時代にかけての遺構と考える。なお、他にもこの時期に所属する遺物が集中して出土した地点（B 区 SK322 周辺）があり、そこにも何らかの遺構があった可能性がある。

A 区SB01（図版 7・8）

調査区南端で検出した竪穴住居である。長軸約 4.0 m、短軸約 3.8 m を測る長方形のプランをしている。地山面でプランを確認したため、床面までの深さは約 4cm と浅い。明確な柱穴や壁溝は確認できなかった。カマドの痕跡（SK486）を北壁中央で確認したが、土層観察用のトレンチにより一部破壊されていた。北東隅の土坑（SK487）は、長軸約 102cm、短軸約 70cm、深さ約 18cm を測る長方形のプランをしている。検出した位置とプランから貯蔵穴と考える。住居の掘りかたは、住居中央と北壁中央を残し、壁から約 90cm の幅で掘削していた。深さは、床面から約 20cm 下がる。

B 区SB01（図版 3・9）

調査区北東端で検出した竪穴住居である。北東部分が調査区外に続いたため、完掘することはできなかった。一辺約 5.3 m 四方の正方形のプランをしている。掘り込みは比較的残りの良い南部分で約 28cm を測るものの、大部分は後世の削平を受けており、10cm 程度残存するにすぎなかった。さらに、多数の土坑や範囲確認調査時のトレンチにより破壊されており、住居の残存状態は良くなかった。SK133 は径約 45cm、深さ約 10cm の土坑で、位置とプランと出土遺物からこの住居の柱穴と考える。明確なカマドは確認できなかったが、調査区東壁で暗褐色土に挟まれた厚さ約 8cm の褐色土を確認していることと、この付近から土師器甕の底部が出土していることから、カマドは住居の東壁中央に築かれていたと考える。

B 区SB02（図版 3・10）

SB01 の西側で検出した竪穴住居である。長軸約 5.4 m、短軸約 5.3 m のほぼ正方形のプランをしている。掘り込みは南半分の残りが良く、約 30cm を測るものの、北半分は後世の削平を受け 4cm 程度残存するにすぎなかった。南東部を除く 3 ヶ所の柱穴（SK382 他）、カマド（SK143）、貯蔵穴を検出した。柱穴は径やプランにばらつきがあるが、検出位置から柱穴と考えた。カマドは東壁中央に位置し、長軸約 1 m、短軸約 0.8 m を測る。カマドは被熱部分が塊として残るのみであったが、土師器甕の他、製塩土器の脚部が出土した。貯蔵穴はカマドの南側に位置し、長軸約 86cm、短軸約 76cm、深さ約 6cm を測る楕円形のプランをしている。住居の掘りかたは A 区 SB01 同様、住居中央を残し掘削していた。住居の南東部は不整形な土坑により破壊されていたが、そこからは須恵器や土師器がまとまって出土した。これらの土器は出土状況から、住居廃絶後間もないころに廃棄されたものとする。

2. 中 世

ここでは便宜上、大窯製品以降の時期の遺物を含まない遺構を中世とした。この時期の遺構として、大型土坑 1 基と竪穴状遺構 2 基を検出した。

A 区SK476 (図版 7・11)

図版表示

カウント表

調査区南端で検出した土坑である。遺構の東西部分が調査区外に続くため、完掘することはできなかった。長軸 6.6 m 以上、短軸約 4.4 m、深さ約 14cm を測る。遺構の南東側（山側）で、礫と土器が集中して出土した。礫は拳大から人頭大をした花崗岩で、熱を受け赤色や黒色に変色したものもあるが、人為的に配置された様子はない。また、古代から中世にかけての土器が出土したが、新旧約 700 年の時期差がある。これらのことから、この遺構は浅い窪地に山側から不要になった礫や土器を廃棄した場所で、廃棄が行われた時期は、最も新しい遺物の時期である古瀬戸後期Ⅳ段階（15 世紀中～後葉）¹⁾ ごろと考える。

B 区SK056 (図版 3)

図版表示

B 区のほぼ中央で検出した遺構である。長軸約 3.0 m、短軸約 2.9 m のほぼ正方形のプランをした竪穴状遺構で、掘り込みは約 19cm を測る。北東隅を除く三方に柱穴と考えられる径 25 ～ 40cm ほどの小土坑（SK053 ～ 055）が存在するが、出土遺物の大半は古瀬戸製品や山茶碗など中世の遺物であり、遺構の規模、遺物の時期などから、竪穴住居とは考えられず、遺構の性格は不明である。

B 区SK311 (図版 3)

図版表示

B 区の中央南寄りで検出した遺構である。西側がSD02（近世の溝）により切られているため全貌は明らかではないが、長軸約 2.7 m、短軸 2.4 m 以上の方形のプランをした竪穴状遺構で、掘り込みは約 6cm と浅い。長軸約 60cm、短軸約 47cm の楕円形のプランをした土坑（SK413）が存在する。出土遺物からこの時期の遺構と考えるが、SK056 同様、遺構の規模、遺物の時期などから、竪穴住居とは考えられず、遺構の性格は不明である。

3. 戦 国

大窯製品を含み、連房式登窯製品を含まない遺構を、戦国時代の遺構とした。遺構は検出面の相違や切りあいから時期差があることは明確であるが、出土遺物から詳細な時期を判断できるものは少ない。ここでは、検出面ごとに記述していく。なお、検出面は 1 面目が基本層序のⅡ層上面、2 面目がⅢ層上面、3 面目がⅣ層上面、4 面目が基盤層上面である。

3-1 A 区 1 面

SB02 (図版 2・12)

図版表示

A 区東壁沿いで検出した掘立柱建物である。建物の北西部の柱穴列を 1 列検出したのみで、大部分は調査区外となる。直径 50 ～ 60cm の円形をした柱穴を 3 本検出したが、すべて根石を持つ。柱間間隔は約 1.9 m で、4 間（約 7.2 m）以上の建物を想定したが、1 か所柱穴を確認できなかった場所があり、2 棟の建物の可能性もある。柱穴の 1 つである SK034 の上部から大窯 4 段階（1590 ～ 1610 年）²⁾ の天目茶碗（図版 29）が出土しており、それより古い時期の建物と考える。なお、検出面は 2 面目であったが、SD01 と同時期と考えここに記述した。

SD01 (図版 2)

図版表示

A 区南東部で検出した石組み溝である。南側が調査区外に続くため、全長は不明だが、検出長約 17.1 m、残存状況の良好なところで幅約 50cm、深さ約 20cm を測る。断面形は箱形をしているが、中央部がさらに U 字形に浅く窪む。削平を受けており、北半分の石組みは喪失、南半分の石組みも部分的にしか残存していなかった。石組みが 2 段に積まれた部分を 1 箇所確認したことから、本来は 2 段以上に組まれていたと推定される。出土遺物に連房式登窯製品が含まれていないことと、SB02 と軸線の方が一致することから、大窯 4 段階以前の溝と考える。

1) 古瀬戸製品の年代については、『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—資料集』（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター編 1996）にしたがった。

2) 大窯製品の年代については、『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジア的視野から—資料集』（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター編 2001）にしたがった。



3-2 A区2面

SB03 (図版5・12)

A区上段ほぼ中央で検出した掘立柱建物である。南北4間(約7m)、東西2間(約4.3m)を測る。柱穴は12カ所検出したが、根石を持つものは2カ所のみである。柱穴の規模は、直径60～70cmのものと30～40cmのものに大別されるが、その配列は、西側の南北列は大小交互に並ぶのに対し、東側の南北列は中央の柱のみ小さい。深さは大型の柱穴が30cm以上であるのに対し、小型の柱穴は約15cmと浅い。柱間間隔も西側と東側で違っている。柱穴から出土した遺物から大窯3段階(1560～1590年)ごろの建物と考える。

SD07 (図版5)

A区南半分の段差に沿って掘られた溝で、検出長約23m、幅約2m、深さ約70cmを測る。断面形はJ字形をしている。南側9mがさらに深く掘られている(SD14、SK481図版7参照)。雨水などが上段から下段に流れ込まないように掘られた排水路と考える。南側の深く掘られた部分が埋没して後、上段の拡幅が行われたようで、SD07は整地土と考えられる斑土により埋められていた。上段から流れ込むように、中世から戦国時代にかけての遺物が、拳から人頭大の花崗岩とともに大量に出土したが、層序から中世に遡らない遺構であることは明確である。埋め立てに使われた土の中に古い時期の遺物が混ざっていたため、時期差のある遺物が同時に出土したと考える。

SK030 (図版5)

SK173の南側で検出した土坑である。北側を近世の溝であるSD12に切られている。長軸約3.7m、短軸約2.6m、深さ約17cmを測り、平面形は楕円形をしている。拳から人頭大の花崗岩は出土せず、遺物のみが出土した。

SK055・171、B区SK440 (図版5)

調査の都合上、遺構番号が分かれているが同一の遺構である。A区からB区にかけて検出した大型土坑群の一つである。下層でSK174～178、SD09・10を検出した(図版17参照)が、出土遺物は同一個体が含まれるなど時期差はない。西側は削平、東側は調査区外のため全貌は明らかではないが、長軸8.8m以上、短軸約2.7m、深さ約55cmを測る。下層との境には、黒色土が部分的にみられ、拳から人頭大の花崗岩とともに中世から戦国時代にかけての遺物がまとまって出土した。

SK115 (図版5)

A区南側で検出した土坑である。東側が調査区外に続くため平面形は不明だが、長軸2.8m以上、短軸約2.3m、深さ約62cmを測る。基本層序Ⅲ層を掘り込んで作られ、風化花崗岩により埋められていた。層序よりSD07と同時期の遺構と考えられるが、性格は不明である。

SK116 (図版5)

SD07とSK115のほぼ中間で検出した土坑である。一辺約1.9m四方の正方形をし、深さ約59cmを測る。SK115と同様に基本層序Ⅲ層を掘り込んで作られ、風化花崗岩により埋められていた。底から人頭大の花崗岩が2個出土したが、SB04の柱穴に据えられていた根石の可能性がある。遺構の性格は不明である。



3-3 A区3面

SB04 (図版6・12)

A区南側で検出した掘立柱建物である。南北3間(約6.5m)、東西2間(約3.8m)を測る。柱穴はSK115・116に破壊されている2カ所を除く8カ所を検出した。そのうちの4カ所に根石が伴うが、SK115・116から出土した花崗岩が、根石であった可能性がある。柱穴の規模は、SK298が直径約50cmと小型であるのを除けば60cm以上のもので占められる。柱間間隔は東西方向が約1.9m、南北方向が約2.15mである。層

序と柱穴から出土した遺物から古瀬戸後期IV新段階(15世紀後葉)から遅くとも大窯3段階ごろの建物と考える。

SB05 (図版6・12) 図版表示

SB04の北側でも根石を持つ柱穴を多数検出したが、柱穴が並ばず掘立柱建物を想定することが困難であった。ここでは、可能性の1つとしてSB05をあげる。SB05は南北4間(約8.5m)、東西2間(約4.5m)を測る。柱穴は10本検出したが、根石を持つものは5本である。柱穴の規模は直径30～80cmとばらついている。柱間間隔も西側と東側で違っている。層序からSB04と同時期と考える。

SD09 (図版5) 図版表示 カウント表

2面で検出した溝であるが、SK055他の下層に位置するため、ここに記述する。北側でSK174と切りあうが、範囲確認調査時のトレンチで破壊され、前後関係は不明である。全長は東側が調査区外に続くため不明だが、検出長約3.5m、幅約0.5m、深さ約6cmを測り、断面形はU字形の2段掘りとなっている。

SD10 (図版6・13) 図版表示 カウント表

SK055他の下層で検出した溝である。北側でSK178を切る。全長は南側が調査区外に続くため不明だが、検出長約4.2m、幅約1.5m、深さ約40cmを測り、断面形はV字形をしている。人頭大の花崗岩とともに中世から戦国時代の遺物がまとまって出土した。

SK173 (図版6) 図版表示

A区のほぼ中央、上段の縁で検出した東西に細長い土坑である。東側でSK174を切る。長軸約4.5m、短軸約1.4m、深さ約44cmを測る。人頭大の花崗岩とともに中世から戦国時代にかけての遺物がまとまって出土した。

SK174 (図版6・14) 図版表示 カウント表

SK173に切られる大型土坑である。SK178とも切りあうが前後関係は不明である。北側がわずかに削平されている。長軸約6.4m、短軸約3.5m、深さ約41cmを測り、基盤層をほぼ長方形に掘り抜いて作られている。北部にSK055他と同様の黒色土がみられ、中から鋳型の可能性のある焼土塊が出土した。他にも拳から人頭大の花崗岩とともに、鳥形土製品など中世から戦国時代にかけての遺物がまとまって出土した。遺構の埋土は黄褐色と褐色の互層となっており、2時期にわけて埋められた様子が観察できた。

SK175 (図版6・13) 図版表示 カウント表

SK055他の下層で検出した土坑である。北側でSK177を切るが、埋土から時期差はほとんどないと考える。長軸約1.9m、短軸約0.8m、深さ約40cmを測り、平面形は楕円形をしている。拳から人頭大の花崗岩とともに中世から戦国時代にかけての遺物が出土した。

SK176 (図版6・13) 図版表示 カウント表

SK055他の下層で検出した土坑である。北側が削平されているため平面形は不明だが、残存部の長軸約2.0m、短軸約0.7m、深さ約36cmを測る。SK177を切るが、埋土から時期差はほとんどないと考える。

SK177 (図版6・13) 図版表示

SK055他の下層で検出した土坑である。北側をSK176に、南側をSK175に切られているため平面形は不明だが、残存部の長軸約1.3m、短軸約0.6m、深さ約12cmを測る。拳から人頭大の花崗岩が出土した。

SK178 (図版6・13) 図版表示 カウント表

SK055他の下層で検出した土坑である。南側をSD10に、西側をSK174に切られているため平面形は不明だが、残存部の長軸約2.0m、短軸約0.7m、深さ約46cmを測る。拳から人頭大の花崗岩とともに中世から戦国時代にかけての遺物が出土した。

SK132 (図版6) 図版表示

SK174の南側で検出した土坑である。近世の溝であるSD08に切られている。一段高くなっている北側を除き、長軸約2.2m、短軸約1.2m、深さ約40cmを測り、基盤層をほぼ長方形に掘り抜いて作られている。拳から人頭大の花崗岩とともに中世から戦国時代にかけての遺物が出土した。

3-4 B区

B区でも多数の小土坑を検出した。SK314には太さ約5.5cmの先端を尖らした柱根が約27.5cm分残存しており、小土坑の多くは中世から戦国時代にかけての掘立柱建物の柱穴と考えられるが、明確な建物を想定することはできなかった。

SK441 (図版4・15) 図版表示

B区南西端の緩やかな南西斜面で検出した土坑である。長軸約68cm、短軸約33cm、深さ約16cmを測り、平面形は不整形な楕円形をしている。東濃型山茶碗を主とする30枚の皿が重なった状態で出土した。出土遺物は、緑釉小皿が古瀬戸後期Ⅱ段階（15世紀前葉）と古いことを除けば、古瀬戸後期Ⅳ段階から大窯1段階（1480～1530年）ごろのものであるため、この時期の遺構と考える。

4. 近 世

江戸時代前期から中期にかけては、遺物の出土はあるものの、明確な遺構は存在しない。江戸時代後期、特に幕末から明治時代にかけての遺構として、井戸、水回り施設、溝などを検出したが、B区周辺に集中する。

A区SX05 (図版2・16) 図版表示

A区北側上段斜面で検出した遺構で、戦国時代の遺構であるSK171を切る。明確な掘りかたは確認できなかったが、長軸約1.5m、短軸約0.7mの楕円形の範囲に拳大から人頭大をした礫とともに江戸時代後期の遺物が多数出土した。斜面の土留めを目的に埋め込まれたものと考えられる。

A区SX07 (図版4) 図版表示

A区北側下段で検出した不定形な土坑である。長軸約6.6m、短軸約5m、深さ約38cmを測る。拳大から人頭大をした礫とともに中世から近世にかけての遺物が出土した。特に残りの良い古瀬戸・大窯製品が多数出土したが、上段の遺構（SK171、174、176など）から出土した遺物と接合するものがみられ、下段を拡張するときに削平された上段の遺構に伴う遺物と考えられる。また、不定形なプランは、耕作により形成された複数の土坑を、大きな一つの土坑として検出したためと思われる。

B区SK351 (図版3) 図版表示

B区南東端で検出した一辺約1.2m四方の正方形のプランをした石組遺構である。拳大から人頭大の花崗岩が2ないし3段残存していた。深さが約14cmと浅いが、B区南側は、わずかな掘削で湧水を得ることができることから、この遺構を石組井戸と考える。出土遺物から江戸時代後期の遺構と考える。

B区SK410 (図版3) 図版表示

石組井戸（SK351）に附属する水回り施設である。石組溝と水を蓄える方形の土坑からなる。土坑内に杭が一本残存していた。井戸とほぼ同時期の遺物が出土した。

B区SD02 (図版3) 図版表示

SK410から始まり、B区中央をほぼ南北に走る石組溝である。検出長約25m、幅約60cm、深さ約22cmを測る。断面形は箱形をしている。石列は部分的にしか残存していなかった。石組井戸（SK351）と水回り施設（SK410）と同時期の遺物が出土しており、それらと関連する排水路と考える。なお、これにほぼ直交する溝（SD03、07）も出土遺物などから同時期の溝と考える。

B区SK443 (図版4) 図版表示

B区南西端で検出した径約90cm、深さ約70cmの円形の土坑である。検出した位置とプランから素掘りの井戸と考える。遺構に伴う遺物はないため、時期を特定することはできないが、井戸から流れ出た水により形成された溝状遺構（A区SD08、12）から出土した遺物から、この時期の可能性が高い。

5. 近 代

明治 17 年の地籍図によると、A 区はほとんどが畑、B 区は藪となっており、幕末に存在したと考えられる屋敷はみられない。現在、水車小屋跡と石炭窯跡が残る場所に宅地があるのみである。土地の区画も調査区中央にある道路以外は様相が異なっており、明治 17 年以後に土地の改良が行われたようである。遺跡の背後にある山は鳳山と呼ばれ、子供達が鳳をあげる山であったため、そう呼ばれるようになったと言われている¹⁾。今でこそ木々が生い茂り人跡未踏の感があるが、地元の人の話では、戦前までは禿山で子供達の遊び場になっていたとのことである。しかし、調査区のある山の麓は、そのころすでに竹藪となっており、宅地等は存在しなかったようである。以上のことから、次に記述する石垣、溝、道路などは、明治から昭和初期に存在した屋敷に伴う遺構と考える。

A 区SD02 (図版 1・2) **図版表示**

2 段の平坦面の段差に沿って L 字状に掘られた溝で、検出長約 32.3 m、幅約 30cm、深さ約 40cm を測る。断面形は箱形に近い U 字形をしている。SD06 はその掘りかたである (図版 16 参照)。本来は、段差に築かれていた石垣と一体となるものと考えられ、人頭大の花崗岩が多数出土した。

B 区SD05 (図版 4) **図版表示**

調査前に地表面で観察できた石組溝のうちの埋没していた部分である。全長約 14.5 m、幅約 60cm、深さ約 22cm を測る。断面形は箱形をしている。円弧状に屋敷の石垣まで続いていた。石組は東側 1 段しか残存していなかったが、地表面で観察できた部分を考慮すると両側に 4 段は積まれていたと考える。なお、SD04 はその掘りかたで、石垣の掘りかたともなっており、この溝と石垣が同時に築かれたことを表している。古代から近代までの遺物が出土したが、掘りかたから明治時代以降と考えられる遺物が出土しているため、石組溝および石垣の構築はそれ以後と考える。また、A 区 SD03・04 を平行して検出しており、溝の掘り直しも考えられる。

A 区SF01 (図版 1) **図版表示**

明治 17 年の地籍図に描かれた道路とほぼ同じ場所で検出した道路であるが、石垣構築時に所在した溝 (SD11) が埋没した後に作られており、それより新しい時期の遺構と考える。検出長約 6.3 m、幅約 60cm を測り、石垣近くで終わっている。なお、道路両側に平行して溝 (SD04、05) が掘られていた (図版 17 参照)。

A 区SD11・B 区SD10 (図版 4) **図版表示**

SF01 の下層に位置する大溝で、山から流れ込んだ土砂で埋没した後に SF01 が築かれている。検出長約 17 m、幅約 2.5 m、深さ約 60cm を測る。断面形は U 字形をしている。溝の形状をしているが、明治 17 年の地籍図に描かれた道路にほぼ一致する。北側の一部に石垣が構築されているが、人頭大の花崗岩を乱雑に積んだものである。残りの良い部分で 10 段、高さは約 1.8 m を測るが、山側にすすむにつれて積石数は少なくなる。溝幅もそれにつれて狭くなり、最後は B 区 SD02 につながる。なお、SD11 下層から多量の礫とともに戦国時代の遺物が出土しており、戦国時代の段階から水道^{みずみち}になっていたようである (図版 17 参照)。

1) 愛知県瀬戸警察署自主研究グループ編 1987『瀬戸の町名由来 (その 2)』

参考文献

藤澤良祐 1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～資料集』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

1. 土 器

1-1 古 代

図版表示

古代の遺物は、今回提示するB区SB01とB区SB02のほか、A区からも若干出土している。いずれもほぼ同一時期であることと、図化可能な資料のまともは上記2遺構に限られることから、34点について記載する。なお、土器の器種名については、『志賀公園遺跡』（永井編 2001）にしたがって記載する。

B区SB01は、杯蓋（杯B蓋）2点、無台杯（杯A）1点、土師器甕（濃尾系甕）2点ある。図化資料のほか、蓋杯3点、有台杯1点、須恵器甕1点が出土している。

B区SB02は、杯蓋（杯B蓋）8点、無台杯（杯A）7点、有台杯（杯B）4点、無台碗（碗A）1点、撫肩長頸壺（長頸瓶）2点、横瓶1点、土師器鍋（三河系ナデ鍋）1点、土師器甕（濃尾系甕）4点、製塩土器1点ある。図化資料のほか、杯蓋6点以上、無台杯7点以上、有台杯4点以上、無台碗2点以上、瓶類2点、須恵器甕1点が出土している。

以上、図化した資料の器種と点数を示した。これら資料を器種からみると、杯蓋と無台杯が多く、碗類・盤類が少ない。また、口径20cm前後の有台杯がみられるものの、これに伴う杯蓋がない。

ここで、個別の資料について見てみる。1・2・6～13の杯蓋はすべて摘みが付くもの。摘みの付かない平頂蓋はこれら以外にもみられない。無台杯のうち、底部に段を持つもの（3・20～25）がほとんどで、平坦な底部のもの（15）はほとんどない。26は撫肩長頸壺で、底部内面に気泡による凹凸がみられるが、磨り落とされている。28はミニチュアの横瓶で黒笹7号窯に類例がある。濃尾系甕（4・5・31～34）は口縁部と底部がみられる。口縁部および胴部の特徴について、頸部から口縁部にかけて大きく外反する、頸部が短く直立しない、胴部の粗いケズリ調のハケ調整から、甕C2類（永井1996）に分類できる。底部はいずれも「底部内面に段接合技法」が顕著にみられる。三河系ナデ鍋（30）は一对の把手が付くもの。製塩土器（29）は知多式4類の脚部。これらの資料は窯式編年で示せば折戸10号窯式前半期に収まる資料群である。検出資料のなかには灰釉陶器碗（折戸53窯式）も若干みられるが、そのほとんどがほぼ一時期と考えられる。今回の資料のうち特筆できる資料としては、製塩土器の出土である。写真図版331～336は製塩土器の口縁部片である。古代の土器資料が少なく、土師質土器の絶対量が少ないことも好を得て、製塩土器の口縁部が抽出できた。少量ながらも製塩土器が確認できることは、当時の製塩土器の流通を考える上で重要である。すなわち、官衙的な遺跡だけでなく、通常の集落遺跡でも少なからず出土することが指摘できる。蛇足ながら、濃尾系甕の流通も、従来美濃から尾張地域のみと考えられてきたが、隣接する矢作川流域にも見られることが豊田市水入遺跡の調査からわかってきた。

参考文献

永井宏幸編 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

永井宏幸 1996『尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷』『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会



1-2 中世から戦国時代

中世の遺物の多くが戦国時代の遺物に混ざって出土しているため、ここでは中世から戦国時代の土器を一括して記述する。なお、使用した器種名と編年の出典は参考文献にまとめて記述する。

A 区 SK476 (35～65)

図版表示

カウント表

35 は平碗である。付高台で高台内に回転糸切り痕を残す。体部外面下方に回転ヘラ削りを行い、高台周辺を除き灰釉を施す。古瀬戸後期 I 段階（以下略称で表記）。36 は天目茶碗である。高台部を欠く。体部外面下方に回転ヘラ削りを行い、体部外面下方を除き灰釉を施す。後Ⅳ期（古）。37 は平底末広碗である。底部外面に回転糸切り痕を残す。底部周辺を除き灰釉を施すが、焼成不良のため白色を呈する。中Ⅲ期。38 は四耳壺である。頸部と体部下方を欠く。肩部に 5 本の沈線を施した耳が 2 か所確認でき、その下に櫛目 5 本の沈線が巡る。粘土紐輪積成形で、肩部内面に指押さえ痕を残す。外面に灰釉を施すが、体部下方は薄く、焼成不良のため白色を呈する。中Ⅰ・Ⅱ期。39・40 は縁釉小皿である。ともに底部外面に回転糸切り痕を残し、口縁部内外面に灰釉を施す。なお 39 の体部外面には縁釉小皿片が熔着している。39 は後Ⅱ、40 は後Ⅳ期（古）。41 は折縁中皿である。底部内面中央に回転ヘラ削り痕とトチ痕 4 か所がみられる。底部外面に回転糸切り痕を残し、口縁部内外面に灰釉を施す。後Ⅳ期。42～44、46・47 は折縁深皿である。42・43 は底部外面に回転糸切り痕を残す。42・44・46・47 は体部外面下方から底部にかけて回転ヘラ削りを行なっている。42・44 は灰釉を施すが、体部外面下方は薄い。44 は底部内面にトチ痕を残す。ともに中Ⅲ期。43 は体部から底部内面にかけて灰釉をハケ塗りした後、口縁部から体部上方にかけて漬けがけしているが、焼成不良のため白色を呈する。中Ⅳ期。44・46・47 はともに口縁部に輪花を施し、三足と考えられる足が付く。体部から底部内面にかけて灰釉を薄くハケ塗りした後、口縁部から体部上方にかけて漬けがけしている。46 は底部内面にトチ痕が 2 か所、底部外面に重ね焼き痕がみられる。ともに後Ⅰ・Ⅱ期。45 は卸目付大皿である。底部外面中央に回転糸切り痕を残し、三足と考えられる足が付く。体部外面上方にはロクロ目、体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削り痕がみられる。体部上方に灰釉を施すが、焼成不良のため白色を呈する。後Ⅳ期（古）。48 は直縁大皿である。三足と考えられる足が付く、体部から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っている。灰釉がハケ塗りされているが、焼成不良のため白色を呈する。体部下方から底部外面にかけて煤が厚く付着している。後Ⅰ期。49・50 は花瓶である。49 は頸部のみである。胴部とは成形を別にしている。灰釉を施す。50 は器高約 34.5cm と大型の花瓶であり、頸部・胴部・高台を別に成形しており、接合面にヘラ痕が残る。頸部と胴部にロクロ目がみられる。灰釉を施すが、内面は頸部のみである。頸部内面にトチ痕 4 か所が、高台端部に多数の砂利の熔着がみられる。ともに後Ⅰ・Ⅱ期。51 は内耳鍋である。底部外面に回転糸切り痕を残し、錆釉を施す。後Ⅰ期。52 は釜である。肩部の二方に横耳と火覆いが付く。体部外面下方に回転ヘラ削りを行い、薄い錆釉を施す。体部外面に煤が付着している。後Ⅳ期。53 は匣鉢である。底部外面に回転糸切り痕、体部外面にロクロ目がみられる。長石粒の多い胎土を使用している。古瀬戸段階。54・55 は東濃型山茶碗である。54 は付高台で粉殻痕が付く。高台内に回転糸切り痕を残す。大洞東 1 号窯式。55 は底部外面に回転糸切り痕、体部内面にロクロ目を残す。脇之島 3 号窯式。56 は東濃型小皿である。底部外面に回転糸切り痕を残す。底部内面が扁平に盛り上がり、中央には指圧痕が残る。大畑大洞 4 号窯式新段階。57～59 は片口鉢である。ともに付高台で、長石粒の多い胎土を使用している。57 は体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っている。底部内面に木の葉痕がみられる。第 9 型式。58・59 はともに体部外面上方にロクロ目、体部外面下方にヘラによる掻き上げ痕、底部外面に指圧痕がみられる。体部下方から底部内面にかけて磨耗している。59 は体部内面に煤が付着している。58 は第 10 型式、59 は第 9 型式。60～64 は尾張型山茶碗である。ともに底部外面に回転糸切り痕を残す。60～62、64 は底部内面中央に指圧痕を、60～62 は底部外面に板目状圧痕を残す。64 を除き長石粒の多い胎土を使用している。60～63 は第 9 型式、64 は第 10 型式。65 は土師質の羽釜である。口縁部外面に鰐が付く。体部外面にハケ目、体部内面に指

押さえ痕を残す。体部内面が被熱により黒色化しており、体部外面に煤が付着する。A 4 類。

B 区 SK441 (76 ~ 105)

76 は緑釉小皿である。底部内面中央に指圧痕を残し、鉄釉を施す。後Ⅱ期。77 は端反皿である。付高台で、内外面に灰釉を施すが、焼成不良のため白色を呈する。大窯 1 段階（以下略称で表記）。78 は挟み皿である。底部外面に回転糸切り痕を残す。大窯段階。79・80 は尾張型山茶碗である。ともにきめの細かい胎土で軟質である。ともに第 12 型式。81 ~ 105 は東濃型山茶碗である。体部内面の回転痕の違いから、指頭ナデにより螺旋状を呈するもの（82・95・97・98）、指頭ナデにより同心円を呈するもの（105）、コテの押圧により螺旋状を呈するもの（81・83 ~ 94・96・99）、コテの押圧により同心円を呈するもの（100 ~ 104）の 4 つに分類できる。ともに生田 2 号窯式。

A 区 SD10、SK173 ~ 178 (106 ~ 128)

106 は端反皿である。底部内面に印花文を施す。底部外面に輪トチが付着する。大窯 1 後。107 は折縁中皿である。削り出し輪高台で、口縁部を輪花にしている。体部外面下方に回転ヘラ削りを行っている。鉄釉を施す。後Ⅳ期。108 は内耳鍋である。体部外面下方に指押さえ痕を残す。錆釉を施す。外面と底部内面に煤が付着している。大窯段階。109・111 は腰折皿である。ともに削り出し輪高台で、体部外面下方に回転ヘラ削りを行い、底部内面にロクロ目が残る。高台周辺を除き灰釉を施す。底部内面にトチ痕が 3 か所みられる。後Ⅳ期（新）。110 は緑釉挟み皿である。底部外面に回転糸切り痕を残し、口縁部から体部内面に鉄釉を施す。大窯 1 前。112 は小天目である。削り出し輪高台で、体部外面に回転ヘラ削りを行っている。高台周辺を除き灰釉を施す。大窯 1 後。113 は天目茶碗である。削り出し輪高台で、濃い錆釉を化粧がけした後、黄瀬戸釉を施す。大窯 1 後。114 は緑釉小皿である。鉄釉を施す。内外面にトチ痕を 4 か所残す。後Ⅳ期。115・123 は稜皿である。ともに削り込み高台で、115 は錆釉を化粧がけした後、鉄釉を施すが、焼成不良である。123 は体部外面下方に回転ヘラ削りを行っている。鉄釉を施す。底部内面と体部外面下方にトチ痕、底部外面に輪トチ痕を残す。115 は大窯 2、123 は大窯 3。116 は丸皿である。付高台で、灰釉を施す。底部内面に印花文を施す。底部外面に輪トチが付着している。大窯 2。117・121 は合子である。ともに底部外面に回転糸切り痕を残し、体部下方から底部外面を除き鉄釉を施す。ともに後Ⅳ期。118 は搦鉢である。体部外面下方に指押さえ痕を残す。口縁部に片口が付き、体部内面に 21 本 1 組の櫛による搦目がみられるが間隔は広い。内外面に錆釉を施す。大窯 1 後。119 は匣鉢である。底部内面に螺旋状のロクロ目、体部外面下方に指押さえ痕を残す。体部下方に焼成前穿孔がみられる。底部内面に輪トチが付着し、口縁部平坦面に熔着がみられる。大窯段階。120 は常滑の甕の口縁部である。172 と同一個体の可能性が高い。11 型式。122 は尾張型山茶碗である。第 8 型式。124 は挟み皿である。底部内面に沈線が 8 条巡り、灰釉の熔着がみられる。体部外面にピン痕が 3 か所残る。大窯段階。125 は大皿である。削り込み高台で、錆釉を化粧がけした後、底部外面を除き鉄釉を施すが焼成不良である。大窯 3。126 は甕の底部である。体部から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っている。体部下方から底部外面を除き鉄釉を施す。後期。127 は鉢である。付高台で、体部から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っている。底部内面にロクロ目を残す。体部下方から底部外面にかけて錆釉を化粧がけした後、高台周辺を除き鉄釉を施す。大窯 3。128 は鳥形土製品である。図化したのは羽の部分であるが、頸部から胴部にかけての破片も（写真図版 128）出土している。筒状の製品に粘土を貼り付け、そこに多数の線刻で鳥の羽を表現している。頸部から胴部にかけては手づくねで作られている。後Ⅰ・Ⅱ期か。

A 区 SK055・171、B 区 SK440 (129 ~ 147)

129・130 は天目茶碗である。ともに内反り高台で、底部外面にトチ痕を残す。129 は薄い錆釉を化粧がけした後、鉄釉を施す。口縁部外面にピン痕を残し、底部内面にピンが熔着している。大窯 2 前。130 は大窯 3 前。131・135 は緑釉小皿である。131 は灰釉を施す。後Ⅳ期（古）。135 は、体部下方から底部内面に灰釉を薄くハケ塗りしている。底部外面に判読不能の墨書がみられる。後Ⅱ期。132・133 は腰折皿である。ともに後Ⅳ期（新）。134 は豆皿である。削り込み高台で、内外面に灰釉を施す。大窯 2。136 は丸皿である。平底で、体部

外面にロクロ目、底部外面に回転糸切り痕を残す。底部内面に重ね焼きの痕跡がみられる。錆釉を化粧がけした後、口縁部内外面に鉄釉を施す。大窯 3。137 は合子である。底部内面にロクロ目を残す。口縁部から体部外面にかけて灰釉を施す。底部外面に線刻が、体部内面から底部内面にかけて漆の付着がみられる。中Ⅰ期。138 は仏花瓶である。底部外面に回転糸切り痕を残す。口縁部内面から体部外面上方にかけて鉄釉を施す。中Ⅱ期。139 は筒形香炉である。底部外面に回転へう削り痕が残り、三足が付く。体部外面の 3 か所に沈線が巡り、灰釉を施す。底部内面に輪トチが付着する。大窯 1。140・141 は擂鉢である。ともに底部外面に回転糸切り痕を残す。140 は底部外面下方に紐ずれ痕が残り、体部内面に 23 本 1 組の櫛による擂目が 12 か所みられる。後Ⅳ期（新）。141 は口縁部に片口が付き、体部内面に 22 本 1 組の櫛による擂目が 9 か所、口縁部縁帯に沈線が 3 本みられる。体部内面にトチ痕が 4 か所残る。大窯 3 前。142 は小瓶である。頸部を欠く。底部外面に回転へう削りを行っている。錆釉を化粧がけした後、体部外面に鉄釉を施す。大窯 1・2。143 は徳利である。頸部から体部上方を欠く。体部下方から底部外面にかけて回転へう削りを行っている。底部内面に螺旋状のロクロ目が残る。体部から底部外面にかけて錆釉を化粧がけした後、体部外面に鉄釉を施す。大窯段階。144 は土師質の内耳鍋である。体部内面上方 2 か所に耳が付く。体部内面にハケ目痕が残り、体部外面に煤が付着する。B 1 類。145・146 はともに耳の痕跡を残しており、口広有耳壺である。体部内面に長脚ピンの痕跡がみられ、他の製品を入れて焼成したと考えられる。145 は体部内外面上方に鉄釉を施す。体部内面に煤が付着する。146 は錆釉を化粧がけした後、体部内面上方から体部外面にかけて黄瀬戸釉を施す。ともに大窯 1。147 は匣鉢蓋である。底部内面に糸切り痕を残す。底部外面に窯記号「井」が刻まれている。大窯段階。

A 区 SX07 (163～172)

163 は合子である。底部外面に回転糸切り痕を残す。体部外面に粒状と紐状の粘土を交互に貼り付け線刻を入れる。内外面に灰釉を施す。中Ⅱ・Ⅲ期。164 は仏具である。口縁部を欠く。底部外面に回転糸切り痕を残す。体部下方から底部外面を除き錆釉を施す。後Ⅲ期。165 は仏餉具である。口縁部を欠く。内反り高台で、受け皿が付く。底部外面を除き鉄釉を施す。後Ⅳ期（古）。166 は土師質の皿である。底部外面に回転糸切り痕を残す。底部内面に線刻がみられる。167・168 は丸皿である。ともに付け高台で、灰釉を施す。167 は体部外面にロクロ目を残す。168 は底部内面に印花文を施す。ともに大窯 2。169・170 は稜皿である。169 は錆釉を化粧がけした後、鉄釉を施す。体部内面にトチ痕を 3 か所残す。ともに大窯 3。171 は匣鉢である。体部内外面にロクロ目、底部内面には輪トチが付着している。体部外面に鉄釉が付着するが、自然釉である。大窯期。172 は常滑の甕の底部である。120 と同一個体の可能性が高い。体部外面下方に指押さえ痕、紐かけ痕を残す。11 型式。

A 区 SD07 (173～229)

173～175 は平碗である。体部内外面にトチ痕を 3・4 か所残す。ともに後Ⅰ期。176～183 は天目茶碗である。176 は付高台である。177～181 は内反り高台で、177・180・181 は濃い錆釉を、178・179 は薄い錆釉を化粧がけしている。182 は高台部を欠く。化粧がけしているが、焼成不良である。183 は口縁部を欠く。削り出し輪高台で、濃い錆釉を化粧がけした後、灰釉を施す。176 は中Ⅱ期。177・179～182 は大窯 2、178 は大窯 2 前、183 は後Ⅳ期（新）。184・185 は縁釉小皿である。底部内面に灰釉をハケ塗りしている。内面にトチ痕を 2・3 か所残す。184 は底部内面中央にロクロ目を残し、体部外面に煤が付着する。ともに後Ⅰ期。186 は縁釉挟み皿である。灰釉を施す。大窯 1 前。187～189 は端反皿である。底部内面に印花文を施す。底部外面に輪トチが付着または痕跡が残る。ともに大窯 1。190 は丸皿である。削り込み高台で、鉄釉を施す。底部内面にトチ痕が 3 か所残る。大窯 2。191 は稜皿である。錆釉を化粧がけした後、鉄釉を施す。大窯 3。192 は尾張型山茶碗である。きめの細かい胎土でやや軟質である。第 12 型式。193～197 は東濃型山茶碗である。193 は内面にコテの押圧による螺旋状の、194～197 は同心円状のロクロ目がみられ、胎土は 193・196 が青灰色、194 が淡黄色、195・197 が緑灰色をしている。195 は口縁部から体部内外にかけて煤が付着する。ともに生田 2 号窯式。198 は仏具である。底部外面に回転糸切り痕を残す。無釉である。後Ⅱ期。199 は陶丸である。200 は柄付片口である。口縁部に片口と、それに直交する位置に把手が付く。底部外面に回転糸切り痕を残す。体部下方から底部外

面を除き灰釉を施すが、焼成不良のため白色を呈する。中Ⅲ期。201は花瓶の高台である。付高台で、高台外面に鉄釉を施す。中Ⅰ・Ⅱ期202は口広有耳壺である。体部外面上方に耳が2か所付く。底部外面に回転糸切り痕、体部下方から底部外面にかけて指押さえ痕、底部内面にロクロ目が残る。濃い錆釉を化粧がけした後、体部外面上方に鉄釉を施す。口縁部平坦面と底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。後Ⅳ期（新）か。203は擂鉢である。底部外面に回転糸切り痕、体部外面下方に紐ずれ痕を残す。口縁部に片口を有し、体部と底部内面に15本1組の櫛による揃目が13か所みられる。錆釉を施す。体部下方と底部内面が磨耗している。大窯3前。204は壺である。口縁部に沈線が巡る。体部外面にへう削りを行っている。鉄釉を施す。後Ⅳ期。205は白磁の端反皿である。削り出し輪高台で、高台周辺は露胎である。E-2。206・207・209～216は土師質の皿である。206は底部内面に指圧痕を残す。口縁部から体部内面にかけてタールが付着している。207・211～213・216は軟質である。209は体部内面が一部被熱により黒色化しており、体部外面に煤が付着する。口縁部を成形しなおした痕跡がみられる。210・214・215は体部が被熱により黒色化しており、215は口縁部2か所に煤が付着する。208は土師質の内耳鍋である。体部内面は被熱により黒色化しており、体部外面に煤が厚く付着する。B1類。217～229は窯道具である。ともに大窯段階。217・218は挟み皿である。217は底部内面に輪トチ痕、体部外面にピン痕が残り、体部外面に灰釉が熔着する。219～229は匣鉢である。器高の低いタイプ（219～226）と高いタイプ（227～229）に分けることができる。器高の低いタイプは、径の大小でさらに2タイプに分けることができる。219～225は底部内面に螺旋状のロクロ目、底部外面に回転糸切り痕を残す。220・223は底部外面に板目がみられる。226は体部外面にロクロ目が、219・226は体部外面下方に指押さえ痕がみられる。219・220・224・226の体部外面には鉄釉がかかるが自然釉である。器高の高いタイプは、ともに体部にロクロ目、底部外面に回転糸切り痕、体部外面下方に指押さえ痕が残る。228・229の底部内面には輪トチ痕がみられる。

A区SK030（230～232）

図版表示

230は東濃型山茶碗である。内面にコテの押圧による同心円状のロクロ目がみられる。生田2号窯式。231は筒形香炉である。体部内面にロクロ目、底部外面に回転糸切り痕、体部外面下方に指押さえ痕を残す。体部内外面上方に鉄釉を施す。口縁部平坦面に重ね焼きの痕跡を残す。後Ⅳ期（新）。232は建水である。体部外面にロクロ目、底部外面に回転糸切り痕を残す。体部内外面上方に鉄釉を施す。口縁部平坦面に重ね焼きの痕跡を残す。大窯3。

A区SK115（233・234）

図版表示

233は水滴である。底部外面に回転糸切り痕を残す。体部外面に印花文が7か所、注口接合部に貼花文がみられる。灰釉を施す。熔着のため注口が塞がれている。中Ⅱ期。234は袴腰形香炉である。口縁部と底部の一部を欠く。底部外面に回転糸切り痕を残す。体部外面に印花文がみられる。体部内外面上方に鉄釉を施すが、焼成不良である。中Ⅱ期。

包含層（V D11e）（66～75）

図版表示

包含層から出土した土器のなかで、出土地点が近くまとまりがあると思われるものを一括して記述する。66～68は腰折皿である。67の高台に＋字の線刻がみられる。ともに後Ⅳ期（新）。69・70は端反皿である。70は底部外面に輪トチが付着する。ともに大窯1。71は挟み皿である。内面に灰釉の熔着がみられる。大窯段階。72・73は陶丸である。74は匣鉢蓋である。底部内面に糸切り痕を残す。底部外面に窯記号「キ」が刻まれている。これと同様の記号をもつ匣鉢がSX07から出土している。大窯段階。75は茶釜である。肩部に耳が、体部外面中央に鐙が付く。濃い錆釉を施す。大窯1。

包含層（V D14b・c、15b）（148～162）

図版表示

148は小天目である。内反り高台で、濃い錆釉を化粧がけしている。大窯1後。149は天目茶碗である。高台部を欠く。錆釉を化粧がけしている。後Ⅳ期（新）か。150・153は丸皿である。150は削り込み高台で、体部外面から底部にかけて薄い錆釉を化粧がけした後、鉄釉を施す。153は付高台で、灰釉を施す。内面に多数の熔着がみられる。ともに大窯2。151は腰折皿である。後Ⅳ期（新）。152は緑釉挟み皿である。灰釉を施す。大

窯Ⅰ前。154は稜皿である。錆釉を化粧がけした後、黄瀬戸釉を施す。大窯3。155は深鉢である。削り出し輪高台で、体部外面に回転ヘラ削りを行っている。鉄釉を施すが、焼成不良である。後Ⅳ期（新）。156は徳利である。頸部を欠く。削り込み高台で、体部外面に回転ヘラ削りを行っている。錆釉を施した後、底部周辺を除き鉄釉を施す。底部外面に重ね焼き痕がみられる。大窯3。157・158は袴腰形香炉である。ともに底部外面に回転糸切り痕を残し、三足が付く。157は底部内面に螺旋状のロクロ目を残す。口縁部から体部上方にかけて灰釉を施す。後Ⅰ期。158は体部下方から底部にかけて濃い錆釉を化粧がけした後、口縁部から体部外面上方にかけて鉄釉を施す。後Ⅳ期（新）。159は釜である。肩部に縦耳と火覆いが付く。体部外面下方に沈線が巡る。薄い錆釉を施す。体部外面に煤が付着している。後Ⅳ期。160は四耳壺である。付高台で、体部外面下方に回転ヘラ削りを行っている。肩部には耳が3か所確認でき、その上下に4本1組の櫛目で沈線を巡らす。体部外面下方から底部を除き鉄釉を施す。底部内面にトチの付着がみられ、重ね焼きの痕跡と考えられる。後Ⅳ期（新）。161は中国製の染付碗である。呉須で文様を描く。高台端部の釉は掻き落としてある。破面に漆継の痕跡がみられる。C群。162は土師質の内耳鍋である。底部内面にヘラ削りを行っている。体部外面上方に沈線が巡り、指圧痕が多数みられる。底部内面は被熱により黒色化しており、体部外面に煤が厚く付着する。BⅠ類。

その他 (295～329)

図版表示

ここでは図化した中世から戦国時代にかけての土器の残りを記述する。なお、出土地点については出土遺物一覧表（CD-ROMに収録）に記載する。

中世 (295～313)

図版表示

295・296は小天目である。295は削り出し輪高台である。後Ⅳ期。296は高台を欠く。後Ⅳ期（古）。297・298は平碗である。ともに削り出し輪高台で、298は高台端部に回転糸切り痕を残す。297は後Ⅱ期、298は後Ⅳ期（古）。299は折縁小鉢である。体部下方を欠く。灰釉を施す。中Ⅲ期。300は合子の蓋である。摘みを欠く。台部外面に回転糸切り痕を残す。天井部に灰釉を施す。後Ⅰ・Ⅱ期。301は合子である。体部下方から底部外面を除き灰釉を施す。後Ⅱ・Ⅲ期。302・303は折縁小皿である。ともに底部外面に回転糸切り痕を残す。体部外面上方から内面にかけて灰釉を施すが、焼成不良である。303は底部内面中央に指圧痕が残る。302は後Ⅲ期、303は後Ⅰ期。304は縁釉小皿である。底部内面中央に指圧痕を残す。口縁部から体部上方にかけて灰釉を施す。トチ痕が内面に2か所、外面に4か所みられる。後Ⅱ期。305は擂鉢である。底部外面に回転糸切り痕を残し、体部内面に14本1組の櫛による擂目が17か所みられる。体部外面上方にロクロ目、体部外面下方に指押さえ痕と線刻を残す。底部外面中央を除き錆釉を施す。体部内面が磨耗している。後Ⅳ期（新）。306は水滴である。注口と把手が付く。底部内面にロクロ目を残す。底部外面周辺を除き鉄釉を施す。体部外面に熔着がみられる。後Ⅳ期。307は東濃型小皿である。大畑大洞4号窯式新段階。308は東濃型山茶碗である。底部内面にロクロ目、底部外面に回転糸切り痕と板目状圧痕を残す。生田2号窯式。309・310は尾張型山茶碗である。ともに底部内面に指圧痕を残す。309は底部外面にも指圧痕を残す。310は底部外面に板目状圧痕を残し、体部外面に煤が付着する。ともに第10型式。311～313は陶丸である。

戦国 (314～329)

図版表示

314・315は天目茶碗である。314は内反り高台で、薄い錆釉を化粧がけしているが、焼成不良である。大窯2。315は削り出し輪高台で、鉄釉を施した後、灰釉を流しがけしている。大窯4後。316・318は端反皿である。316は口縁部を輪花としている。底部内面に印花文を施す。底部外面にトチが付着する。口縁部と底部外面の一部が黒色化している。318は焼成不良のため白色を呈する。ともに大窯1。317・319は丸皿である。ともに付高台で灰釉を施すが、焼成不良のため白色を呈する。317は底部内面に印花文を施す。底部内面に煤が付着している。ともに大窯2。320は反り皿である。付高台で灰釉を施す。大窯1。321は茶壺の底部である。体部内面にロクロ目が残る。底部外面には文字が刻まれているが、「祖母」以外は判読不能である。胎土は暗青灰色をしており、錆釉を施す。大窯段階。322は建水である。体部にロクロ目、体部外面下方に指押さえ痕を残す。口縁

部平坦面を除き体部内面上方から体部外面にかけて鉄釉を施す。大窯3。323は卸皿である。底部外面に回転糸切り痕を残す。底部内面に卸目がみられる。口縁部に灰釉を施す。大窯1。324は蓋である。摘みとかえりが付き、錆釉を施す。大窯段階。325は茶入である。体部上方を欠く。底部内面にロクロ目、外面に回転糸切り痕を残す。錆釉を化粧がけした後、体部下方から底部外面を除き鉄釉を施す。大窯段階。326は土師質の皿である。磨耗が激しい。底部内面に指圧痕を残す。327・328は中国製の染付皿である。327は口縁部を欠く。碁笥底で、畳付部分の釉を掻き取っている。底部外面に波涛文、底部内面にねじ花を描く。328は底部を欠く。口縁部が端反りしている。ともにC群I類である。329は中国製の染付碗である。底部を欠く。

他に中国製の染付皿の底部が1点出土している。

参考文献

- 北村和宏 1996 「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
 鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
 田口昭二 1985 『美濃焼』ニュー・サイエンス社
 中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」」「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品資料集』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第10輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

1-3 近世以降¹⁾

A区SX05 (235～251)

図版表示

235は扁平碗である。削り出し輪高台で、体部外面上方にロクロ目、体部外面下方に回転ヘラ削り痕が残る。高台周辺を除き淡黄色をした灰釉を施す。第2段階5・6小期。236は端反湯呑である。高台を欠き、焼成不良のため白色を呈する。第3段階10・11小期。237は染付丸碗で磁器製品である。呉須で文様を描く。第3段階11小期。238は釜である。口縁部外面の二方に把手、体部外面上方に鐔が付く。口縁部と鐔との間に5本の沈線が巡る。鉄釉を施しているが、体部外面下方の釉は薄い。砂粒を多く含む粗い胎土を使用している。第3段階。239は広東茶碗である。呉須と鉄釉で植物を描く。第3段階10小期。240・241は向付である。240は灰釉を施したのち、口縁部から体部上方にかけて緑釉を流しかけている。第3段階10・11小期。241は体部外面に文様を削り込み、高台周辺と底部内面を除き緑釉を施す。底部内面は鉄釉により花びらを描いた後、長石釉を施す。第3段階。242は片口である。削り出し輪高台で、体部外面上方にロクロ目、下方に回転ヘラ削り痕を残す。高台周辺を除き淡黄色をした灰釉を施す。内面にトチ痕を2か所残す。第3段階10・11小期。243は練鉢である。体部中央を欠く。底部外面を除き灰釉を施したのち、口縁部から体部上方にかけて緑釉を流しかけているが、焼成不良のため発色が悪い。底部外面に煤が付着している。第3段階11小期。244・245は搗鉢である。ともに口縁部を欠き、体部から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っている。244は体部と底部内面に19本1組の櫛による搗目を施す。柿釉を施し、トチ痕を7か所残す。第3段階10小期。245は体部内面上方に沈線が1条巡る。23本1組の櫛による搗目を施す。錆釉を施す。第3段階11小期。246は短檠の注口部である。上方に長方形の穿孔を施し、下方を削り底部を作っている。淡黄色をした灰釉を施す。第3段階。247は焙烙である。体部上方内面に耳が付く。体部外面に煤が付着している。Ⅱ期J5。248～251は窯道具である。248は三足が付く輪ドチである。249・250は匣鉢である。249は底部外面に糸切り痕、内面に指ナデ痕を残す。250は体部外面にロクロ目、底部外面に糸切り痕がみられ、トチ痕を2か所残す。砂粒を多く含む粗い胎土を使用している。251はエブタである。中央に指押さえ痕が残る。製品を載せて焼成した痕跡がみられる。

1) 近世以降の土器に関しても使用した器種名と編年の出典は参考文献にまとめて記述する。

B 区 SD04 (252～264)**図版表示**

252～254 は磁器製品である。呉須で文様を描く。252 は端反碗、253 は筒形湯呑、254 は仏餉具である。254 を除き第3段階。254 は明治時代の可能性が高い。255・256 は蓋である。255 は鉄釉・緑釉・錆釉により放射状の線を描く。256 は摘み部を欠く。底部内面に回転ヘラ削りを行っており、煤が付着する。外面に鉄釉を施すも焼成不良である。ともに第3段階。257 は半胴である。高台を付け上げ底にしている。体部外面上方に沈線が2条巡る。体部外面下方から底部にかけて回転ヘラ削りを行っている。体部外面下方から底部外面を除き錆釉を施す。第3段階。258 は向付である。底部外面と内面中央を除き緑釉を施すも多くが剥落している。底部内面中央は鉄釉により花びらを描いた後、長石釉を施す。第3段階。259 は搗鉢である。底部外面に指押さえ痕を残す。体部内面上方に沈線が1条巡る。24本1組の櫛による搗目を15か所施す。沈線と搗目の間に「田」の印を押す。柿釉を施し、体部下方から底部内面にかけてトチ痕を8か所残す。焼成後底部を意図的に穿孔している。第3段階 11 小期。260 は雪平である。注口と直交する部分に把手が付く。体部外面にロクロ目がみられ、口縁部平坦面と体部外面下方を除き灰釉を施す。第3段階。261・262 は御納戸徳利である。261 は頸部のみであるが、鉄釉を施す。262 は体部下方から底部を欠く。肩部に鉄釉で梅の花を描く。長石釉を施す。ともに第3段階。263 は土瓶である。明赤褐色の胎土をしており、産地は不明である。上げ底で、体部外面に回転ヘラ削りを行っている。体部外面上方に灰釉を施し、呉須・鉄釉・長石釉で梅の木を描いている。264 は窯道具のトチン（センベイ）である。

B 区 SD05、A 区 SD04 (265～268)**図版表示**

265 は口径約 23.1cm、器高約 23.4cm の大型の半胴である。上げ底で、体部外面上方と下方に沈線がそれぞれ2条巡る。底部外面に回転ヘラ削りを行っている。体部下方から底部外面を除き柿釉を施す。底部内外面と口縁上面平坦面にトチ痕を残す。底部に亀裂がみられる。第3段階。266 は鉢である。高台を有し、体部外面と底部内面に鉄釉で植物が描かれている。体部下方から底部外面を除き長石釉を施す。近隣の石炭窯の物原から類似の文様と釉調をした大皿が採集されており、石炭窯で焼かれた製品の可能性が高い。267 は碗である。体部外面に鉄釉で植物を描く。長石釉を施したのち、口縁部に緑釉を少量流しかけている。277 の蓋と対になると考えられる。第3段階。268 は丸碗の底部である。削り出し輪高台の高台内に墨で「天」と書かれている。底部内面に灰釉を施す。第1段階。

A 区 SD11・B 区 SD10 (269～276)**図版表示**

269 は織部の蓋である。鉄釉で絵を描いた後、長石釉と緑釉を施す。緑釉の発色は不良である。第3段階。270・271 は小杯である。270 は底部外面に回転糸切り痕を残す。底部外面周辺を除き灰釉を施すが焼成不良のため白色を呈する。近世か。271 は磁器製品である。高台外面に染付により文様を描く。高台内面に判読不明の銘が書かれている。明治時代以降の可能性もある。272 は広東茶碗である。呉須で文様を描く。第3段階 11 小期。273 は端反碗である。磁器製品で、呉須で文様を描く。第3段階 10 小期。274 は織部の湯呑である。鉄釉で絵を描いた後、長石釉と緑釉を施すが、焼成不良のため、釉の発色は不良である。第3段階。275 は油皿である。底部外面に回転糸切り痕を残す。口縁部から体部上方にかけて灰釉を施す。第3段階。276 は鉢である。体部外面下方に回転ヘラ削りを行っている。口縁部から体部上方にかけて鉄釉を施す。第3段階。

その他

中世から戦国時代にかけての土器と同様に、図化した土器の残りを記述する。なお、出土地点については出土遺物一覧表（CD-ROM に収録）に記載する。277 は織部の蓋である。体部外面に鉄釉で植物を描く。長石釉を施したのち、口縁部に緑釉を少量流しかけている。267 の碗と対になると考えられる。第3段階。278 は目皿である。土師質で、底部外面に回転糸切り痕を残す。体部6か所と底部中央1か所に穿孔がみられる。279・285・286 は油皿である。279・285 は体部外面の一部が被熱により黒色化している。286 はやや上げ底になっており、体部外面にヘラ削りを行っている。ともに体部内面から体部外面上方にかけて灰釉を施し、第3段階。280 は雪平の蓋である。摘みを削り出して作っている。灰釉を施す。第3段階。281 は搗鉢である。体部内面上

方に段が形成されている。19本1組の櫛による掻目を施す。掻目は磨耗している。柿釉を施し、トチ痕を6か所残す。第3段階11小期。282・283は半胴である。ともに底部を欠く。体部外面上方に沈線がそれぞれ2条巡る。体部外面に回転ヘラ削りを行っている。282は口縁部平坦面内側に浅い沈線が巡る。鉄釉を施す。283は口縁部平坦面にトチ痕を1か所残す。柿釉を施す。ともに第3段階。284は鍋である。体部外面下方に回転ヘラ削りを行っており、被熱により黒色化している。体部外面上方に沈線が巡る。体部外面下方を除き柿釉を施す。第3段階。287は土瓶の蓋である。摘みとかえりが付く。外面に柿釉を施す。第3段階。288は孫太である。底部外面に回転糸切り痕を残す。体部内面にロクロ目、体部外面下方に指ナデと指押さえがみられる。体部下方から底部外面と口縁部平坦面に薄い錆釉、それ以外に濃い錆釉を施す。第3段階。289は茶入れ、290は織部の鉢であるが、ともに底部外面に「春岱」銘の落款が押されている。「春岱」銘の落款は他に織部碗で1点見つかっている。289は底部外面に回転糸切り痕、体部下方から底部にかけてトチ痕を2か所残す。底部外面を除き鉄釉を施す。底部外面に煤が付着している。290は体部外面に回転ヘラ削りを行っている。体部外面に鉄釉で絵を描き、高台周辺を除き長石釉を施した後、口縁部に緑釉を流しかけている。加藤宗四郎春岱は1802（享和2）年生まれの赤津の陶工である。1850（嘉永3）年に14代藩主徳川慶勝から春岱の名を賜わり、1877年になくなっているためこの間の作品である。291は動物形土製品である。ロクロで成形した胴部に足を接合しており、毛を表現したと考えられる線刻が多数みられる。底部を除き薄い錆釉を施す。近世か。292は窯道具のヘダテである。体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っている。五足が付くが残存するのは三足のみである。

参考文献

- 井上喜久男 1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社
 江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
 金子健一 1996「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
 金子健一 1996「近世陶器煮炊具の分類」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
 瀬戸市史編纂委員会編 1993『瀬戸市史陶磁史篇五』
 瀬戸市史編纂委員会編 1998『瀬戸市史陶磁史篇六』

1-4 その他の土器（293・294）

293は縄文土器の底部である。砂粒を多く含む胎土で、にぶい黄橙色をしている。

294は土師器の高杯の脚部である。内面は未調整、外面は縦方向にヘラ削りがみられる。砂粒を多く含む胎土で、灰黄褐色をしている。松河戸式。

参考文献

- 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集財団法人愛知県埋蔵文化財センター

2. 石製品（330～339）

石製品は縄文から弥生時代にかけての石鏃（330～334）・剥片、中世以降の砥石（336～338）が出土している。337が同時期の遺構に伴う以外はすべて、包含層ないし別時代の遺構の埋土からの出土である。

330～334は石鏃である。330～332は凹基石鏃、333・334は有茎石鏃である。材質は330・331がチャート、他が下呂石である。

335は磨り石である。表面が磨かれ、上面、下面、側面の3か所に敲打痕がみられる。材質は濃飛流紋岩で、時期は不明である。

336～339は砥石である。材質は339を除き凝灰岩である。339は土器片を利用しているので石製品とは言えないが、ここに記す。



3. 金属製品 (340 ～ 345)



錢貨（340 ～ 344）はすべて包含層からの出土である。340 は天聖通寶で、1023 年初鑄の北宋錢である。341 は元豐通寶で、1078 年初鑄の北宋錢である。344 は皇宋通寶で、1038 年初鑄の北宋錢である。342 は「寶」以外判別不能である。343 は寛永通宝である。345 は古代の住居である B 区 SB02 から出土した棒状の金属製品である。

金属製品としては他に、刀子、鎌、キセルの吸口などが出土しているが、包含層からの出土が多い。

参考文献

永井久美男編 1996 『日本出土錢総覧 1996 年版』兵庫埋蔵錢調査会

はじめに

鳳山屋敷遺跡（愛知県瀬戸市鳳山町所在）は、瀬戸市南東部に所在する縄文時代から近代にかけての複合遺跡である。矢田川の支流である赤津川左岸、標高 190 m 前後の丘陵（鳳山）北西斜面に立地する。周辺には、北東から南西方向に鳳山 A 窯跡・鳳山 C 窯跡・瓶子窯跡など中世～近世の窯跡がある。

今回発掘調査が行われた A 区では、古代・中世、戦国時代、近世、近代に該当する遺構・遺物が確認されており、幕末から近代には近隣の窯跡に関連した場であったと推定されている。今回の調査では、調査区内の土層断面から試料を採取し、堆積環境や古植生など栽培植物に関する情報を得る目的で珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

調査地点である II STY01A の堆積物は、上位より 4 層～1 層に区分される（図 4）。4 層は赤褐色粘土からなり、花崗岩風化鉱物粒子や粘土ブロックを混在する。出土遺物から近世相当と考えられている。3 層は褐色粘土からなり、花崗岩風化鉱物粒子を含む。根石を持つ柱穴群・溝・大型の土坑が確認されており、戦国時代相当と考えられている。2 層は黒褐色粘土からなる。集石遺構などが確認されており、14～15 世紀に相当すると考えられている。また、本層の放射性炭素年代測定値は、下部（試料 2 層準）が 4640 ± 30 BP、上部（試料 4 層準）が 2615 ± 25 BP である（山形、未公表）。1 層は黄褐色粘土からなる。分析試料は各層から層位試料として、1 ないし 3 点の合計 6 点が採取されている。これら 6 点について珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

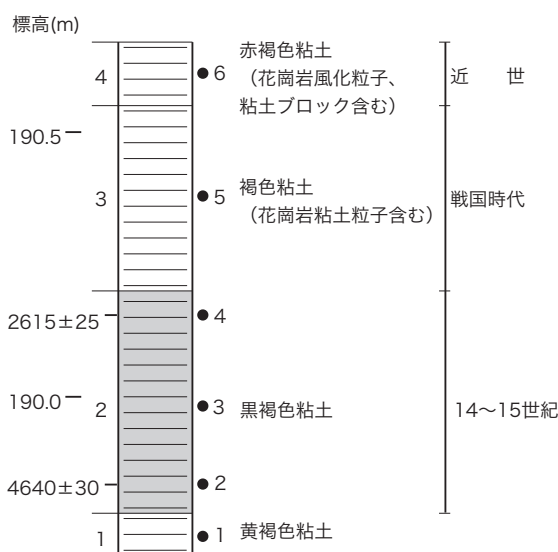


図 4 試料採取地点柱状図

2. 分析方法

2-1 珪藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻

1) 本章はバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した微化石分析の報告であるが、報告書作成に伴う整理作業の結果に基づき、若干改変して掲載している。

化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 100 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、海水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

2-2 花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

2-3 植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1 分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3. 結 果

3-1 珪藻分析

結果を表 1、図 5 に示す。珪藻化石は、試料番号 3～6 の 4 試料から産出したが、試料番号 1・2 は少なかった。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、50% 前後であった。産出分類群数は、17 属 41 種類と単調な組成を示す。試料番号 3～6 とも陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある

陸生珪藻が全体の約 90%以上を占めることを特徴とする。主な産出種は、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い陸生珪藻 A 群（伊藤・堀内、1991）の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が 20～50%と優占し、同じく A 群の *Pinnularia borealis*、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻 B 群（伊藤・堀内、1991）の *Stauroneis obtusa* 等を伴う。これらの陸生珪藻のうち、A 群とされるものは土壤珪藻としても一般的なものである（Patrick, 1977）。なお、化石の少なかった試料番号 1・2 も前述のような陸生珪藻がみられる。



3-2 花粉分析

結果を表 2 に示す。花粉化石の検出状況は極めて悪く、モミ属・マツ属・ナデシコ科・キク亜科がわずかに検出されるにとどまった。また、プレパラート内には、炭化した微細植物片が多量にみられた。



3-3 植物珪酸体分析

結果を表 3、図 6 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。いずれの試料もネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などがわずか、あるいは稀に認められる。また、栽培植物のイネ属が試料番号 4 で出現し、上位にかけて連続的に検出され、出現率も増加する。これらの試料には、稲稈殻に形成されるイネ属類珪酸体も認められる。



4. 考 察



本遺跡が立地する丘陵地の地質は、主として領家帯の花崗岩類からなるが、これは遺跡内の堆積物に風化した花崗岩が散在していることからみても明らかである。このことから、遺跡内の堆積物は、花崗岩を母材とし、これが風化することによって生じた粘土層（いわゆるマサ土）であると考えられる。

珪藻化石群集をみると、2 層中部～4 層（試料 3～6）は、陸生珪藻が 90%以上と優占して産出した。また、珪藻化石の検出数は少なかったが、1 層～2 層下部（試料 1～2）もほとんどが陸生珪藻であった。このことから、調査区内の堆積物は、好気的環境で花崗岩が風化することによって形成された堆積物であるといえる。一方、花粉・シダ類胞子は、好気的環境では分解・消失すると考えられており（中村、1967；徳永・山内、1971）、今回の花粉化石がほとんど検出されなかったのも風化しやすい環境下にあったためと考えられる。

このように調査区内の堆積物は好気的環境化で形成されたとみられるが、各層で層相に差異があり、堆積環境や土壌化作用は一様でなかったと判断される。特に黒褐色粘土からなる 2 層は、年代測定値のバラツキや遺物の出土状況を考慮すると、土壌の発達が行われた堆積物の可能性がある。今後、調査区が位置する斜面地形の形成過程を検討し、堆積物の成因について評価する必要がある。

本遺跡周辺の植生は、植物珪酸体の産状からみると、1 層から 4 層形成期を通じて、調査区周辺にはネザサ節を含むタケ亜科をはじめとして、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。特に、ネザサ節を含めてタケ亜科は乾いた場所や開けた場所に生育する種類が多い。おそらく、生業によって切り開かれた場所を中心に、これらが生育していたことが伺われる。なお、2 層上部・3 層・4 層では栽培植物のイネ属が検出された。この要因として、燃料材や住居構築材など生活資材としての稲藁や稲稈の持ち込みなどが考えられる。

一方、本遺跡周辺では、上品野遺跡、巡間 E 窯跡、宇トゲ窯跡、上品野蟹川遺跡で花粉分析が行われている（パリーノ・サーヴェイ、未公表：新山、1999）。これらの成果によれば、瀬戸市周辺で窯が操業されるようになる鎌

表 1 珪藻分析結果

	生態性			環境 指標種	6	5	4	3	2	1
	塩分	pH	流水							
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	1	-	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	4	7	-	-	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	-	2	-	-
<i>Caloneis hyalina</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis largerstedtii</i> (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia exigua</i> (Breb.)Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	-	1	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	2	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	3	2	-	-	-	-
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>saxonica</i> (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	1	-	1	-	-
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	57	48	24	31	3	1
<i>Navicula cohnii</i> (Hilse)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	3	4	-	1	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	1	1	-	-
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	-	-	-	-	-
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1	1	-	-
<i>Navicula ignota</i> var. <i>palustris</i> (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	24	25	24	23	1	-
<i>Navicula muticoides</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	2	-	-	-	-
<i>Navicula paramutica</i> Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	3	2	1	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	-	1	2	-	-
<i>Nitzschia</i> cf. <i>perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	6	4	7	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	8	4	19	8	4	1
<i>Pinnularia hemiptera</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph		-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	2	-	-
<i>Pinnularia schoenfelder</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	5	2	12	9	2	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	1	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	9	14	5	2	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-	-	-
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-	-
<i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	1	-	-	-	-
海水生種					0	1	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	1	0	0	0	0
淡水生種					121	124	110	101	13	2
珪藻化石総数					121	126	110	101	13	2

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C.R. : 流水に対する適応性
Eur : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-Meh : 淡水—汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ind : pH 不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	unk : pH 不明種	unk : 流水不明種

環境指標種群

B: 内湾指標種 (小杉, 1988)
 K: 中・下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A 群, RB:B 群, RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)

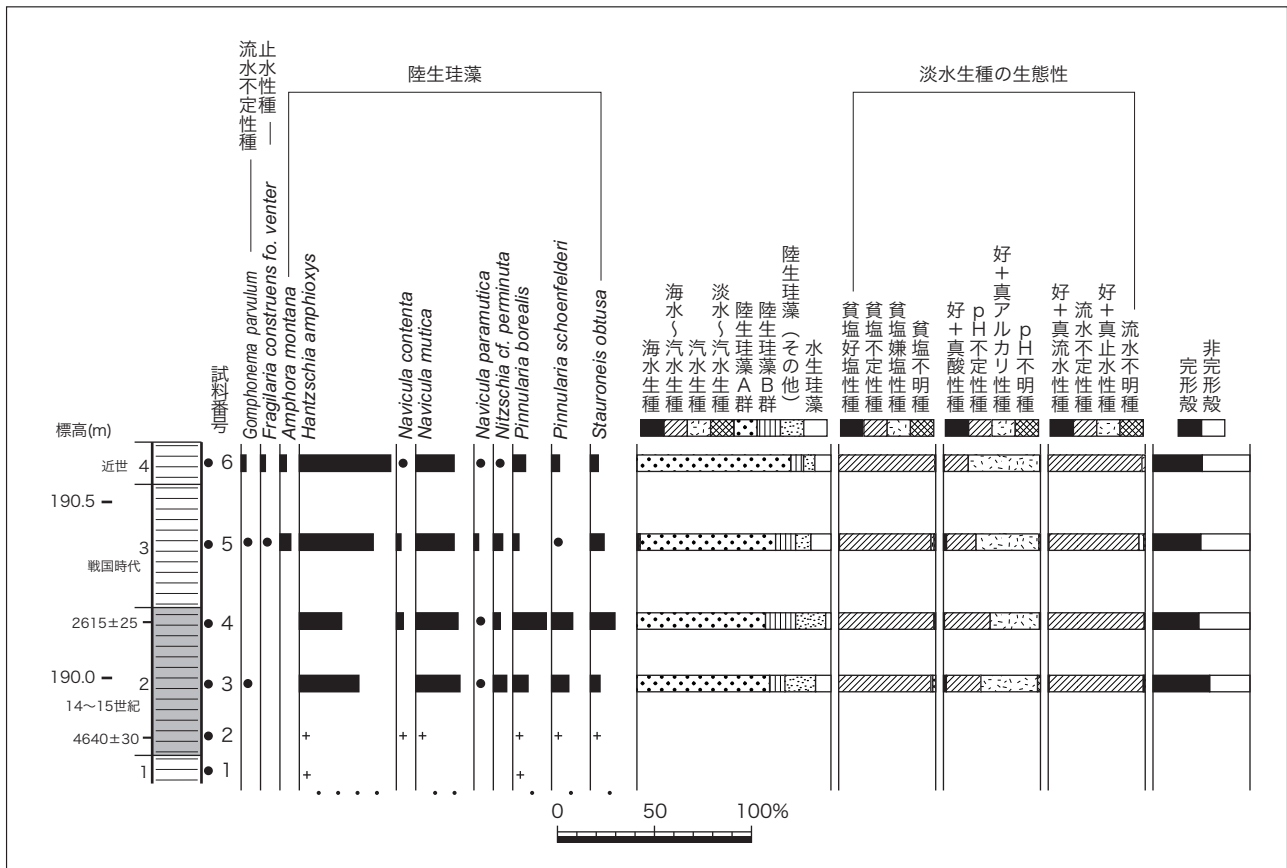


図5 主要珪藻化石群集の層位分布

海水—汽水—淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は 2 % 未満、+ は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

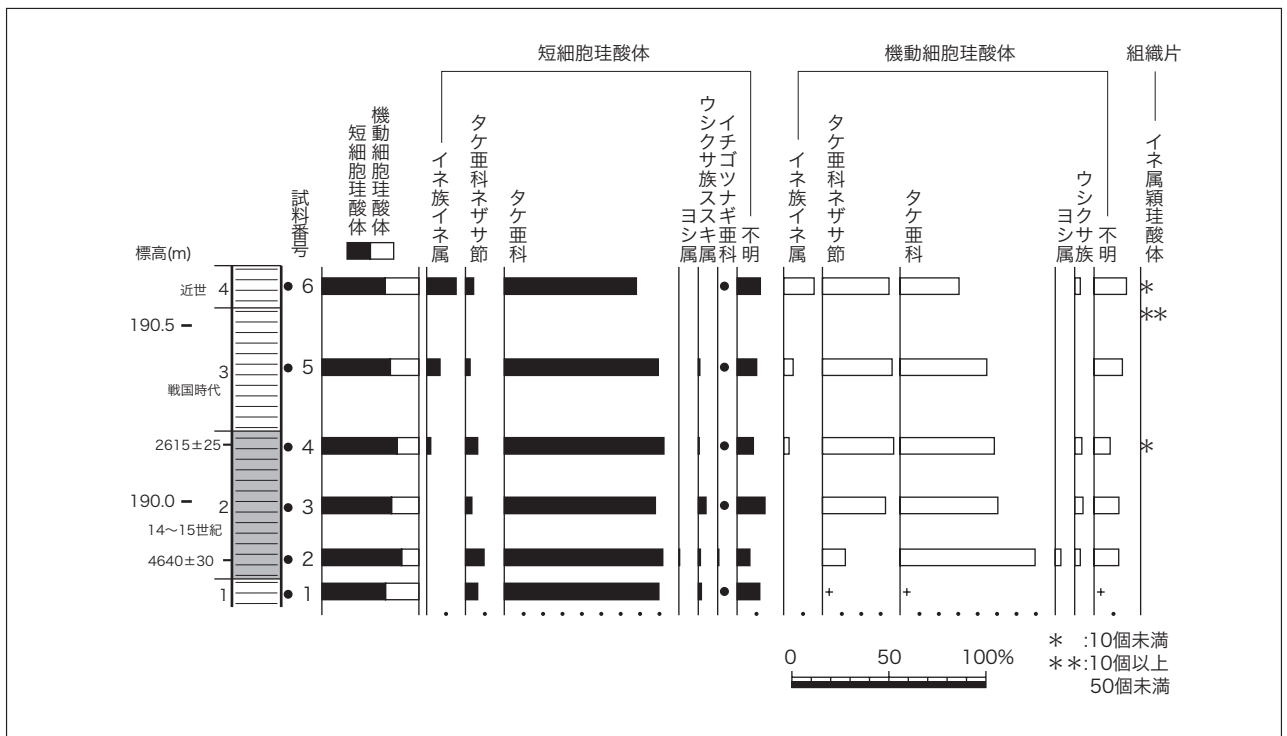


図6 植物珪酸体群集の層位的変化と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。●は 1 % 未満、+ は 100 個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を*で示す。

倉時代を境にして、ヒノキ類やナラ類、カシ類などの森林から、マツを中心とする森林へ変化したことが推定されている。おそらく、本遺跡周辺でも中世以降マツ林の占める割合が増加しているものと考えられる。マツ林が成立する理由の多くは、二次林や植林によるものであることから、このような森林構成になった理由は人為的要因による部分が大きいと考えられる。この点については、窯業地域における森林資源活用など、当時の社会背景を考慮した森林史・林業史的な観点からの検討が必要であり、今後の課題である。

表 2 花粉分析結果

種 類	試料番号	6	5	4	3	2	1
木本花粉							
モミ属		1	-	-	-	-	-
マツ属		4	-	-	1	-	-
草本花粉							
ナデシコ科		1	-	-	-	-	-
キク亜科		-	-	2	1	-	-
不明花粉		-	-	1	-	-	-
シダ類胞子							
シダ類胞子		6	1	5	-	6	2
合 計							
木本花粉		5	0	0	1	0	0
草本花粉		1	0	2	1	0	0
不明花粉		0	0	1	0	0	0
シダ類胞子		6	1	5	0	6	2
総計（不明を除く）		12	1	7	2	6	2

表 3 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	6	5	4	3	2	1
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属		29	17	8	-	-	-
タケ亜科ネザサ節		8	6	24	10	45	8
タケ亜科		130	196	312	233	385	102
ヨシ属		-	-	-	-	2	-
ウシクサ族ススキ属		-	2	2	12	5	2
イチゴツナギ亜科		1	1	1	1	3	1
不明キビ型		14	11	15	16	13	6
不明ヒゲシバ型		5	10	11	12	13	5
不明ダンチク型		4	4	6	15	5	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属		16	5	3	-	-	-
タケ亜科ネザサ節		35	37	40	38	12	5
タケ亜科		31	46	53	59	71	41
ヨシ属		-	-	-	-	3	-
ウシクサ族		3	-	4	5	3	-
不明		17	15	9	15	13	21
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		191	247	379	299	471	128
イネ科葉身機動細胞珪酸体		102	103	109	117	102	67
総 計		293	350	488	416	573	195
組 織 片							
イネ属穎珪酸体		7	31	4	-	-	-

参考文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42，p.73-88。
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘（1998）埼玉の藻類 珪藻類。埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600。
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌，6，p.23-45。
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27，p.1-20。
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用。第四紀研究，25，p.31-64。
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Patrick, R. (1977) Ecology of freshwater diatoms and diatom communities. The biology of diatoms., Botanical Monographs, 13, p.284-332, Blackwell Scientific Publication, London.
- 中村 純（1967）花粉分析。232p., 古今書院。
- 新山雅広（1999）上品野蟹川遺跡の花粉化石群集。「上品野蟹川遺跡2 財団法人瀬戸市文化財センター調査報告書第13集」，財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子。「化石の研究法」，p.50-73，共立出版株式会社。

風山屋敷遺跡の遺構変遷

縄文から古墳時代

縄文土器、縄文から弥生時代にかけての石鏃、古墳時代の土師器が出土したが、遺構は存在しなかった。

古 代

奈良時代後半の竪穴住居を3棟検出した。特にB区SB02から出土した製塩土器は、瀬戸市内では初出土であり、近辺でも尾張旭市の渋川遺跡で出土しているのみである。同住居から出土した三河系ナデ鍋とともに古代の流通を考える上で好資料になると考える。

他には平安時代半ばの灰釉陶器が出土したが、遺構は存在しなかった。

中 世

室町時代の竪穴状遺構2基と大型廃棄土坑1基を検出した。B区の小穴は掘立柱建物の柱穴になる可能性が高い。出土した古瀬戸製品は中期以降、尾張型山茶碗もほぼ同時期の第9型式以降がほとんどである。さらに古瀬戸製品を細かくみていくと、中期は出土量は多くないがⅠ～Ⅳ段階のものが出土している。後期は中期と比べ出土量は増えるが、Ⅲ段階のものはほとんどみられない。

当初、この時期の遺跡の性格を、明確な遺構が少ない割に遺物の量が多いこと、周辺に古瀬戸中期から後期にかけての窯跡が存在すること、遺跡が赤津川沿いの平坦地で江戸時代には風山への登り口になっていたことなどから、窯で焼成された製品を一時期保管しておく場所ではないかと考えた。しかし、報告書作成に向けて整理を進めていくと、この時期の遺物の多くが大窯製品に混ざって出土することから、中世の遺構は戦国時代以降に破壊された可能性が高いこと、東濃型山茶碗など赤津で焼成されていない遺物や底部内面が磨耗しているなど使用痕の認められる遺物が多く、出土遺物を単純に周辺の窯跡と関連付けることはできないことなどが明らかになってきた。よって、現在は、遺跡の立地から周辺の窯跡と何らかの関係のある中世の集落跡と考える。

特筆すべき遺物としては鳥形土製品がある。類例がないため時期は決めがたいが、精緻な作りから、古瀬戸後期Ⅰ・Ⅱ段階ごろの可能性が高い。

戦国時代

風山屋敷遺跡のメインとなる時期である。B区は不定形な土坑がみられる程度である。小穴が掘立柱建物の柱穴になる可能性はあるものの、中世に比べ遺物の出土が少なく、江戸時代以降の削平により遺構が破壊された可能性が高い。それに対してA区は西側の一段低い場所が江戸時代以降に削平を受けているものの、上段は3時期にわたる遺構の変遷をうることができる。

- ・A区北側に大型土坑（SK174他）が掘削され、その南側に掘立柱建物が2棟（SB04・05）建つ段階
- ・SK174他は埋められたものの、周辺が窪み（SK055他）として残り、南側の段差に溝（SD07）が掘削され、掘立柱建物が1棟（SB03）建つ段階

・上段が整地され、南東部に石組み溝（SD01）と掘立柱建物が1棟（SB02）建つ段階

ただし、すべての時期で大窯3段階の遺物が出土し、遺物による時期差はみられないことから、短期間の変遷の可能性が高い。

出土遺物は古瀬戸後期Ⅱ段階以前の遺物が比較的多く含まれるものの、古瀬戸後期Ⅳ段階から大窯3段階の遺物が主である。特に窯道具である匣鉢と挟み皿の出土が目につく。B区の北東方向に大窯2～3段階の窯である鳳山A窯跡があり、灰原がすぐ近くまで広がっている。このことから匣鉢・挟み皿・大窯2～3段階の大窯製品の多くはこの窯の焼成品と考えられ、遺構は窯に関連する可能性が高い。しかし、問題になるのが、古瀬戸後期Ⅳ段階から大窯1段階の遺物である。未発見の窯跡が存在する可能性もあるが、この時期の窯跡は今のところ赤津では見つかっていない。遺構の変遷としては、今のところ、古瀬戸後期Ⅲ段階の断絶後、Ⅳ段階のころから再び建物が建てられ、鳳山A窯が築かれた時には、それに関連した建物が建てられた可能性が高い。このことは、窯の廃絶後の遺物がほとんど出土していないことからとも言えそうである。

特筆すべき遺構として、B区SK441があげられる。東濃型山茶碗を主とした30枚の皿を重ねて埋めた土坑である。なぜ大量の皿が埋められたのかの明確な答えは持ち合わせていないが、他遺跡での調査事例と比較していけば答えがみつかるかもしれない。また、生田2号窯式とした東濃型山茶碗のうち、東濃型山茶碗とも大窯製品の灯明皿とも違うものが含まれている。瀬戸市内での古瀬戸後期Ⅳ段階の窯跡の発掘調査例がないため、これ以上のことは言えないが、東濃型山茶碗から灯明皿への変化は陶工集団の再編成を考える上で重要な意味をもっているため、その答えのヒントになる可能性がある。

江戸時代

第1段階から2段階にかけての陶器は少量で、この時期の遺構は存在しなかった。

第3段階の陶磁器はB区の表土から大量に出土しているが、その中に「春岱」の落款が底部外面に押された陶器が3点出土している。加藤春岱は幕末に活躍した赤津の陶工であり、発掘調査で春岱の作品が出土したのは初めてである。出土した陶磁器の中には焼成不良品や窯道具などが含まれるものの、外面に煤が付着している雪平など使用痕を残すものも多い。単なる不要になった陶磁器の廃棄場所とも考えられるが、この時期の遺物を伴う遺構として、石組み井戸（SK351）・水回り施設（SK410）・排水路（SD02）などを検出しており、何らかの建物が建ち、人が生活していた場所と考えたい。

明治から大正時代

明治17年の地籍図によると、幕末にB区に存在した屋敷はすでになく、藪になっていることと、調査前に地表面で観察できた石垣や石組溝（SD05）の裏込めの土の中から明治時代以降の遺物が出土していることと、石組溝からA区の西方向にある石炭窯跡の灰原で採集した遺物と類似したものが出土していることから、石炭窯や水車小屋に関連した建物が建てられていた可能性が高い。そのことは、一般的に石炭窯は大正から戦前にかけての限られた時期に使用されていることと、戦後にはこの場所は竹藪となっていたという地元の人の話からも裏付けできる。

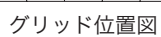
参考文献

瀬戸市史編纂委員会編 1981『瀬戸市史陶磁史篇二』

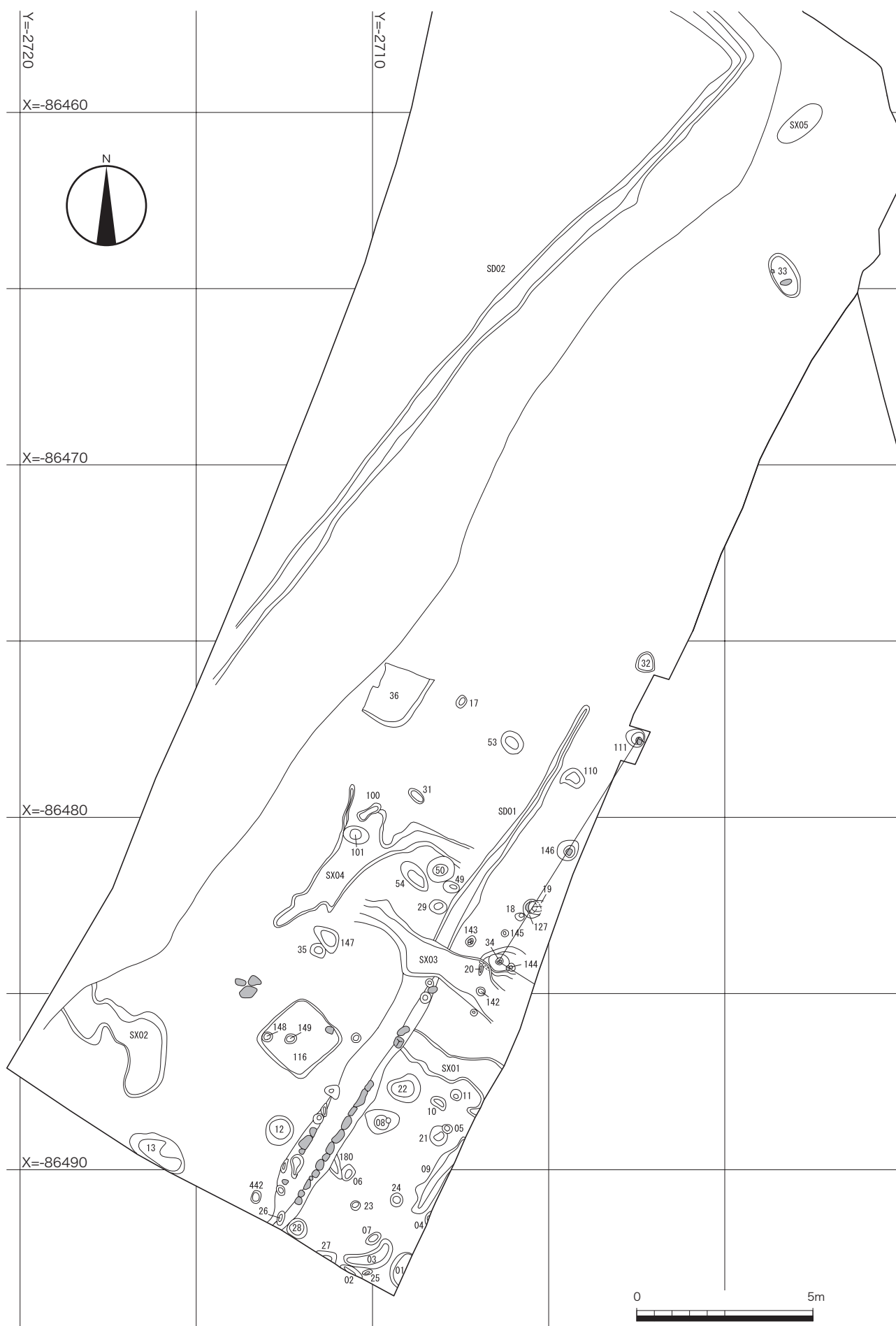
七原恵史・木村哲雄編 1994『渋川城館跡・渋川遺跡』尾張旭市教育委員会

服部郁 1998「赤津区の中世窯跡」『研究紀要ⅩⅤ』瀬戸市歴史民俗資料館

森泰通 1997「東海地方における消費地出土の製塩土器―特に固形塩の問題をめぐって―」『シンポジウム製塩土器の諸問題―古代における塩の生産と流通―』塩の会シンポジウム実行委員会



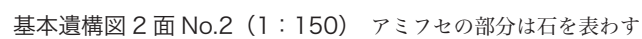
基本遺構図 1 面 No.1 (1 : 150)

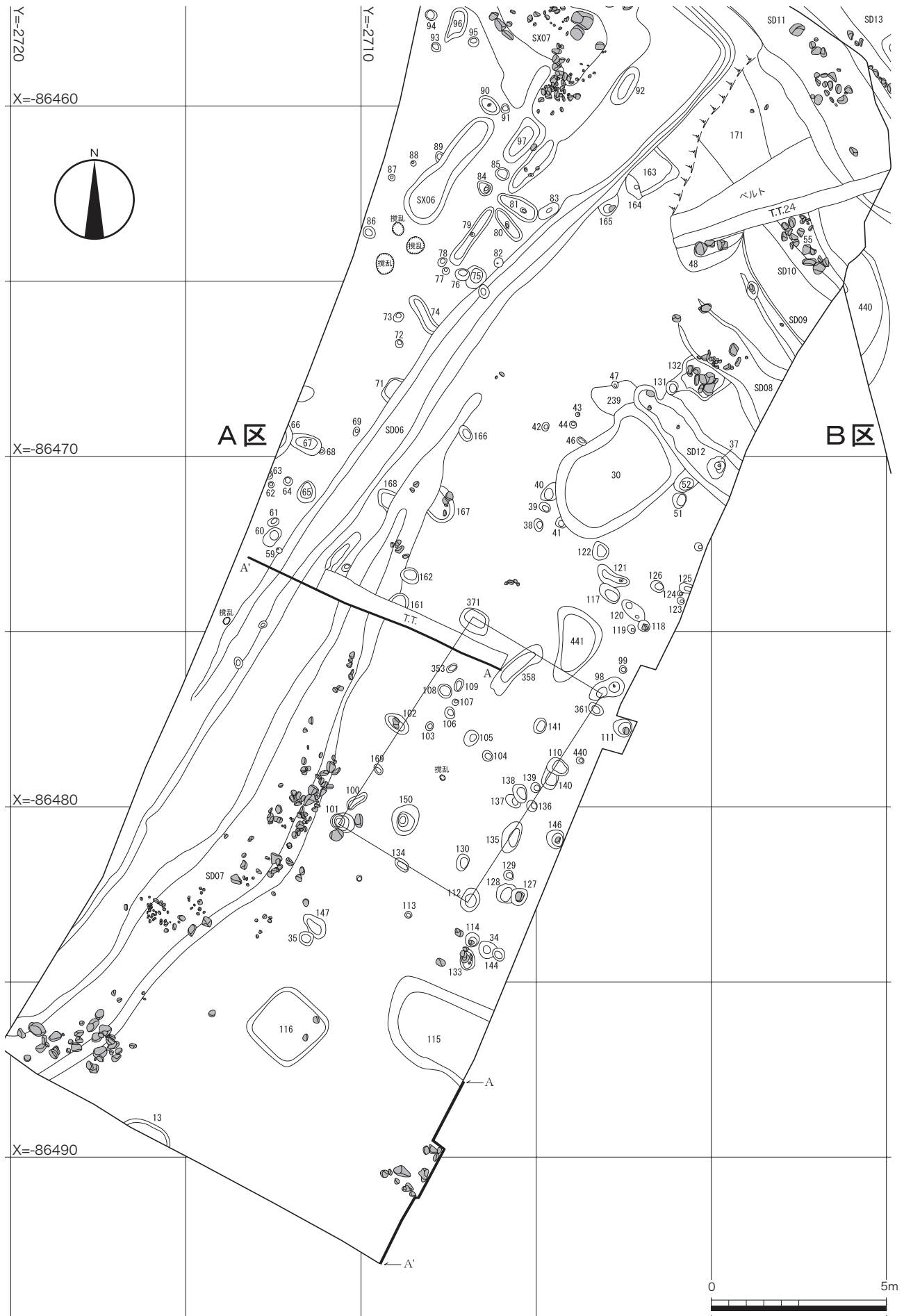


基本遺構図 1 面 No.2 (1 : 150) アミフセの部分は石を表わす

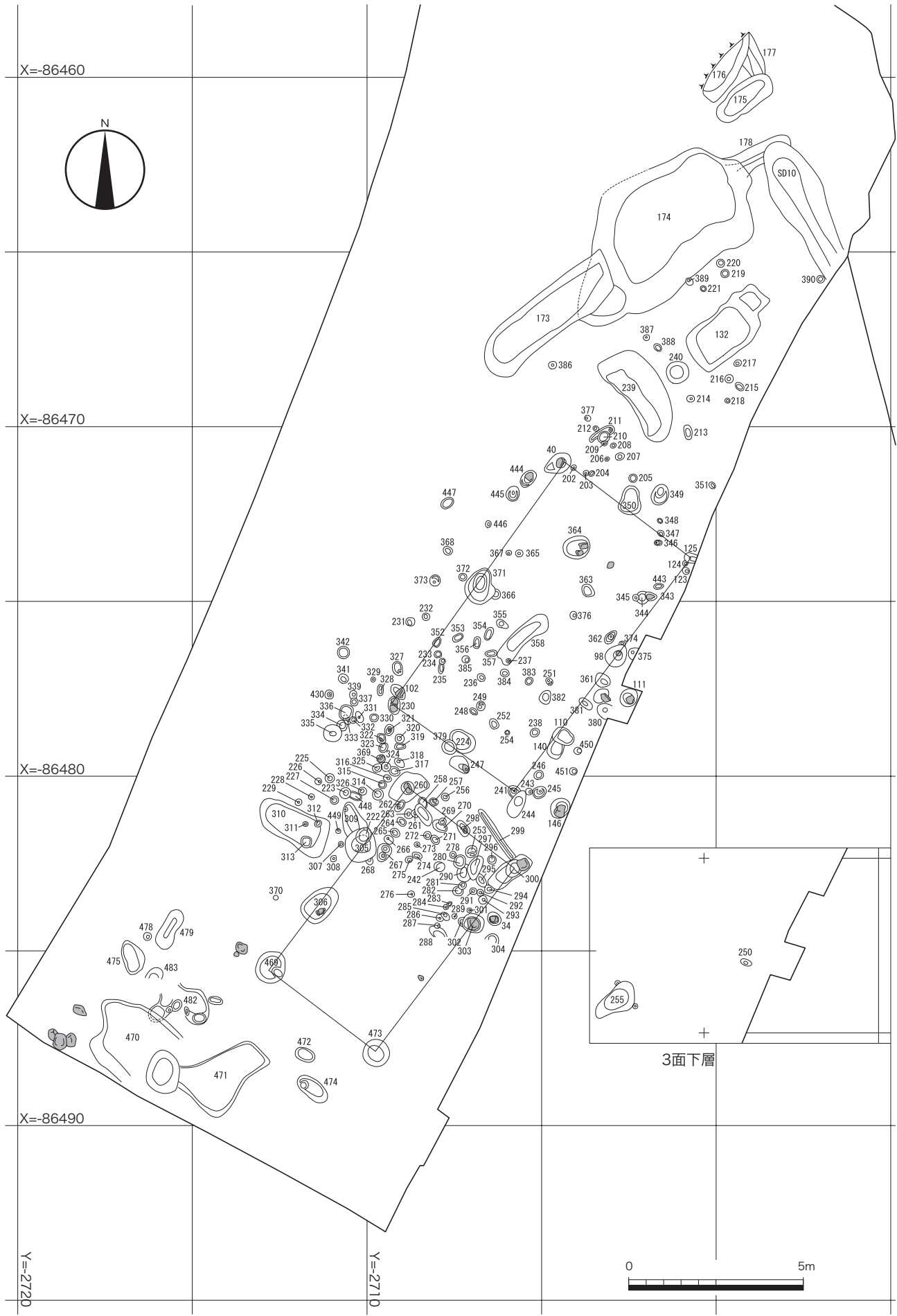


基本遺構図 2 面 No.1 (1 : 150) アミフセの部分は石を表わす





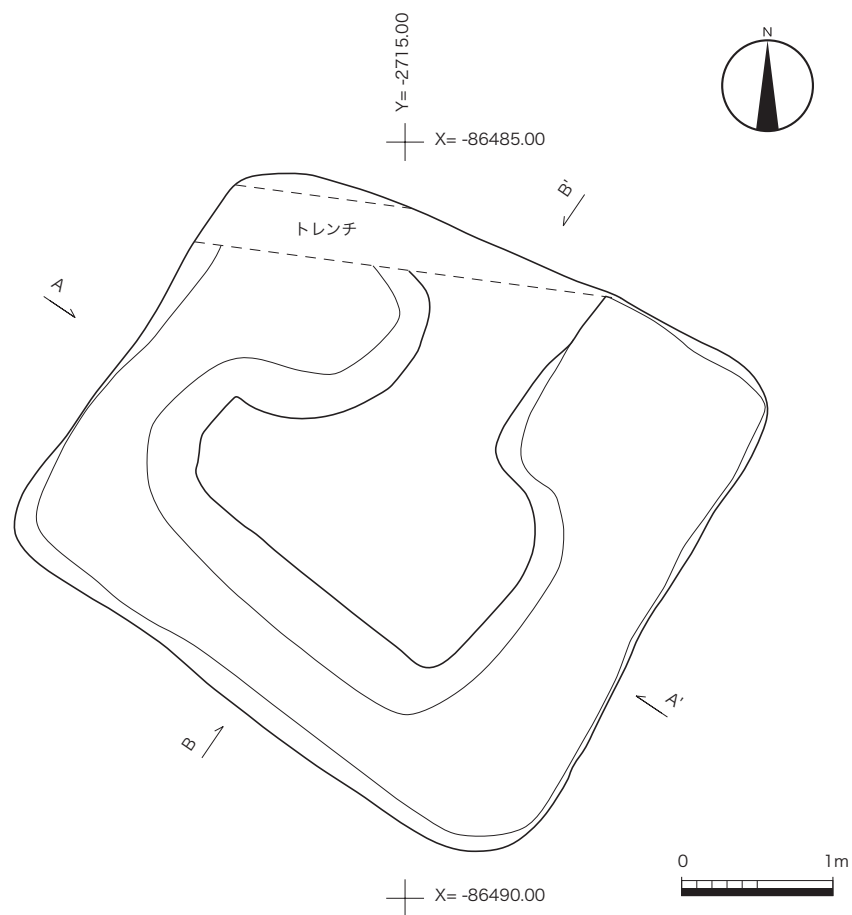
基本遺構図 2 面 No.3 (1 : 150) アミフセの部分は石を表わす



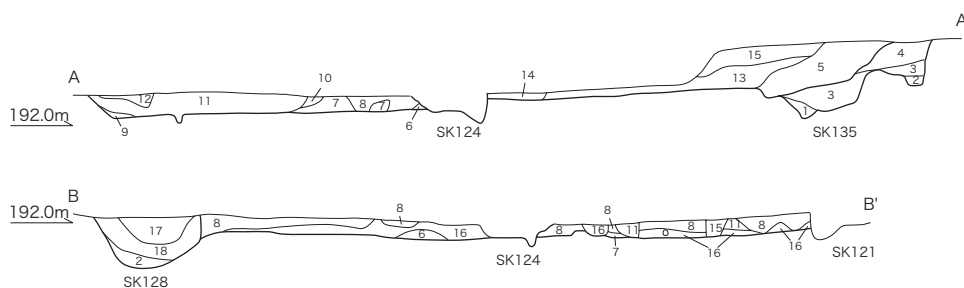
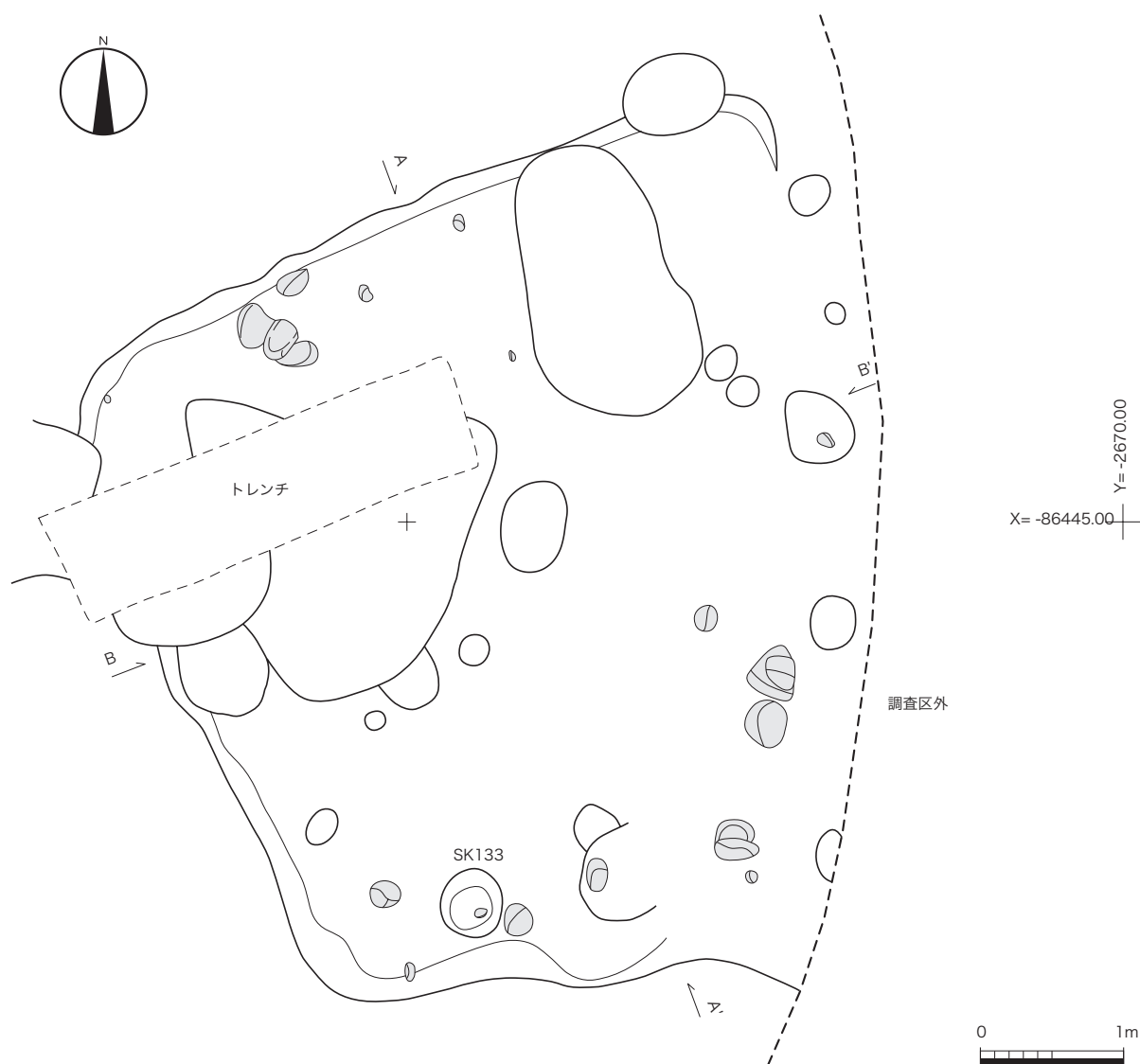
基本遺構図3面 (1:150) アミフセの部分は石を表わす



基本遺構図 4 面 (1 : 150)

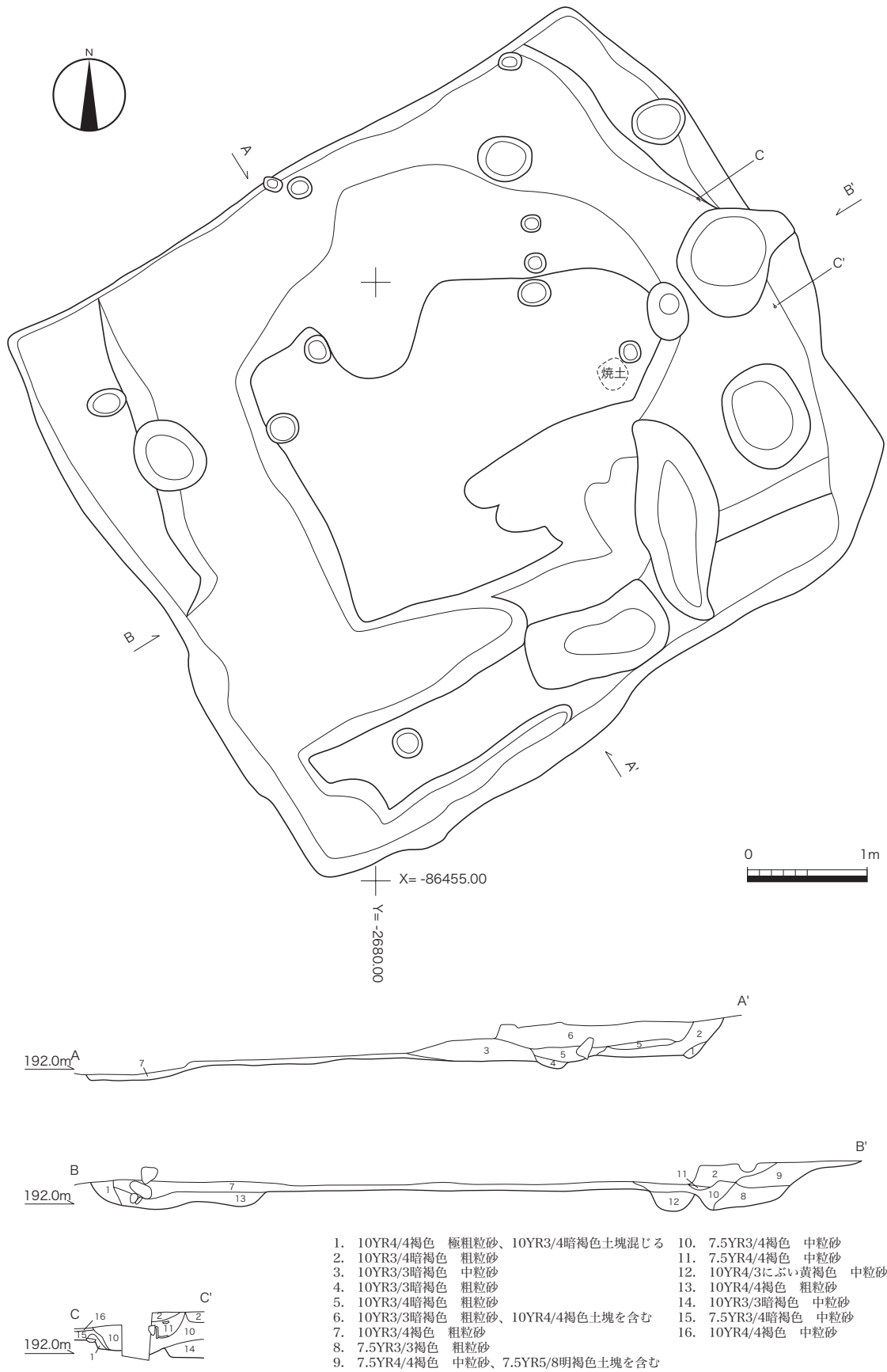


A 区 SB01 (掘りかた) 平面図・エレベーション (1 : 50)



- | | |
|--------------------|--------------------------------------|
| 1. 10YR3/4暗褐色 極粗粒砂 | 10. 10YR4/4褐色 中粒砂 |
| 2. 10YR3/3暗褐色 極粗粒砂 | 11. 10YR3/4暗褐色 中粒砂 |
| 3. 10YR3/4暗褐色 極粗粒砂 | 12. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 |
| 4. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 | 13. 11.と同じ |
| 5. 10YR2/3黒褐色 中粒砂 | 14. 10YR4/3にぶい黄褐色 中粒砂 |
| 6. 10YR4/4褐色 中粒砂 | 15. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 |
| 7. 10YR4/6褐色 極粗粒砂 | 16. 10YR4/4褐色 中粒砂 |
| 8. 10YR3/4暗褐色 極粗粒砂 | 17. 10YR3/4暗褐色 中粒砂、7.5Y R5/6明褐色土塊を含む |
| 9. 6.と同じ | 18. 10YR4/4褐色 中粒砂、7.5Y R5/6明褐色土塊を含む |

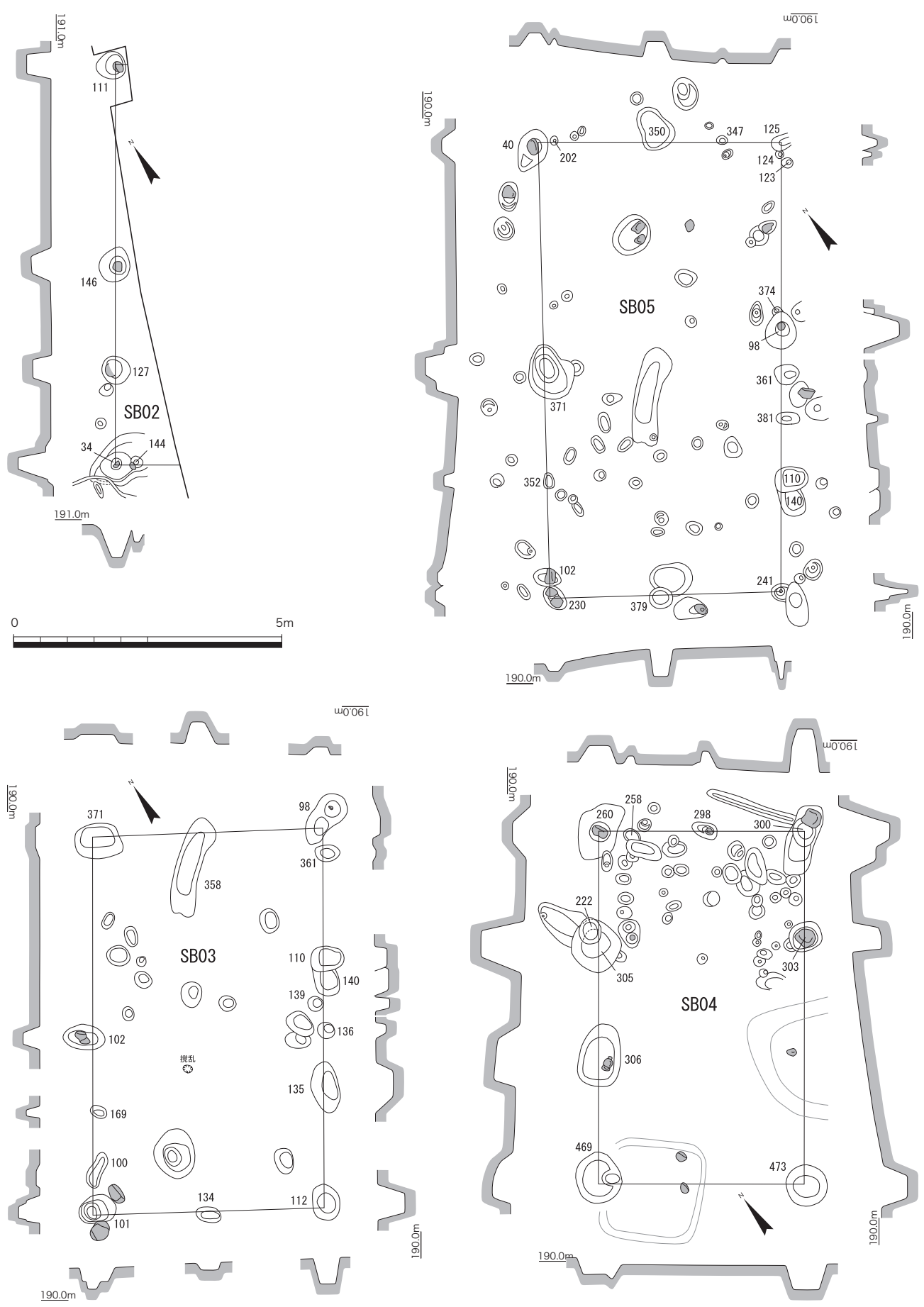
B区SB01 平面図・セクション (1:50) アミフセの部分は石を表す



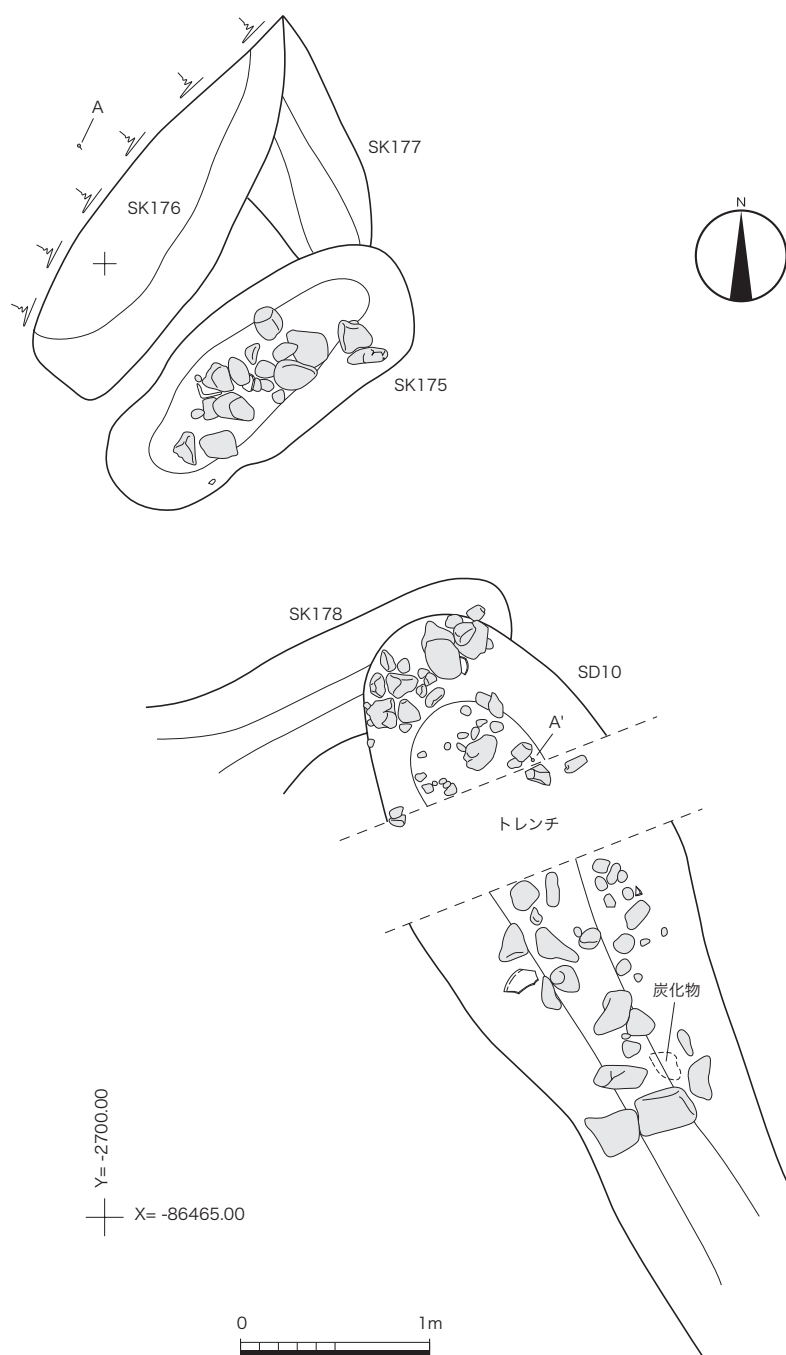
B区SB02(掘りかた)平面図・セクション(1:50)



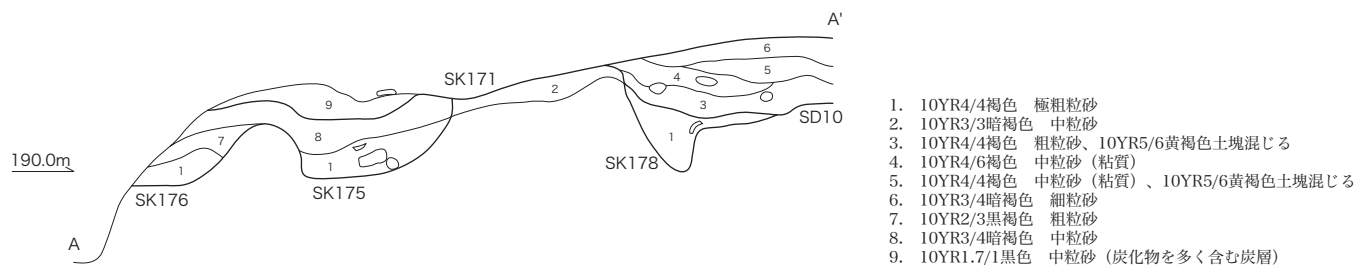
A 区 SK476 出土状態図 (1 : 40) アミフセの部分は石を表わす



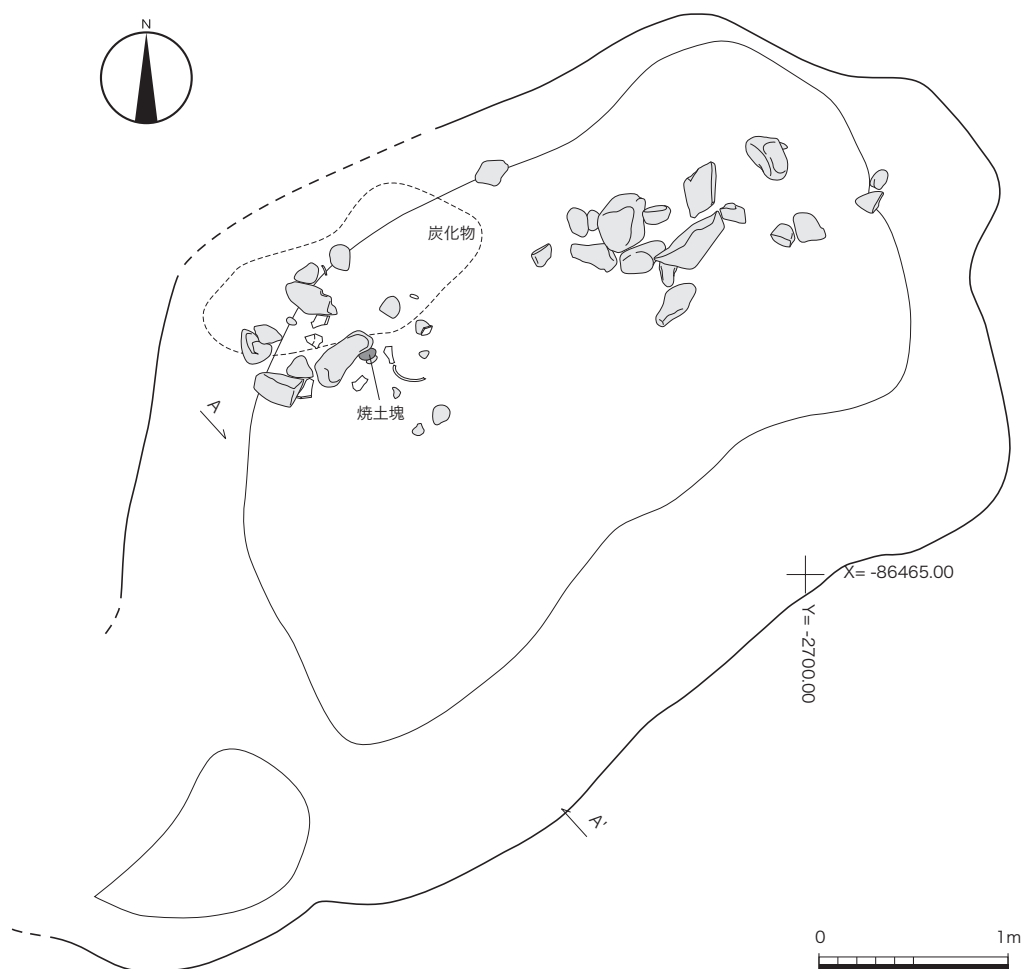
A 区 SB02 ~ 05 平面図 (1 : 100) アミフセの部分は石を表わす



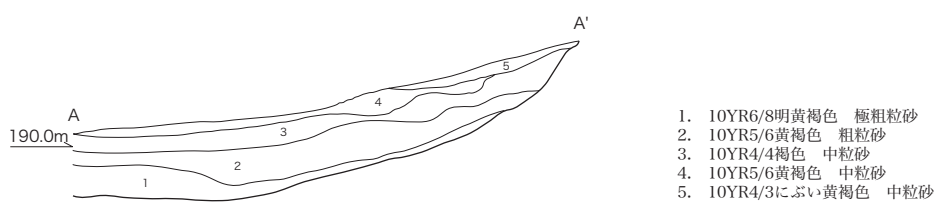
191.0m



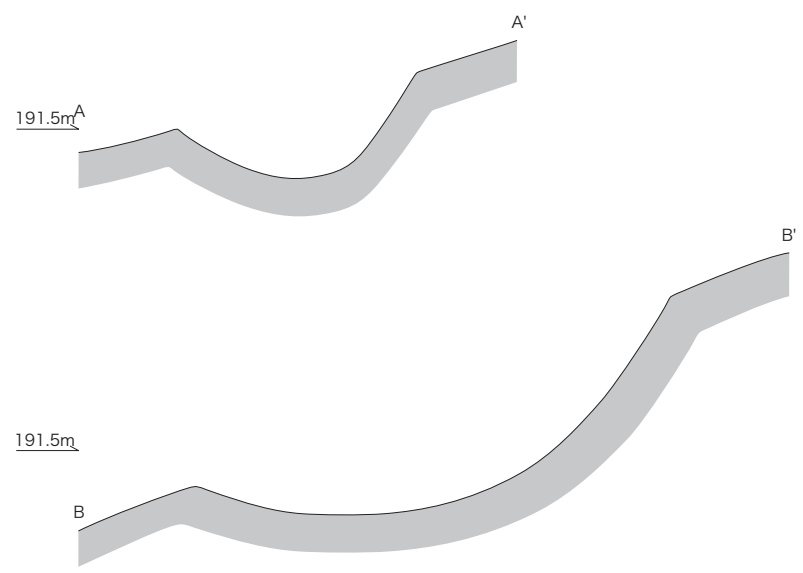
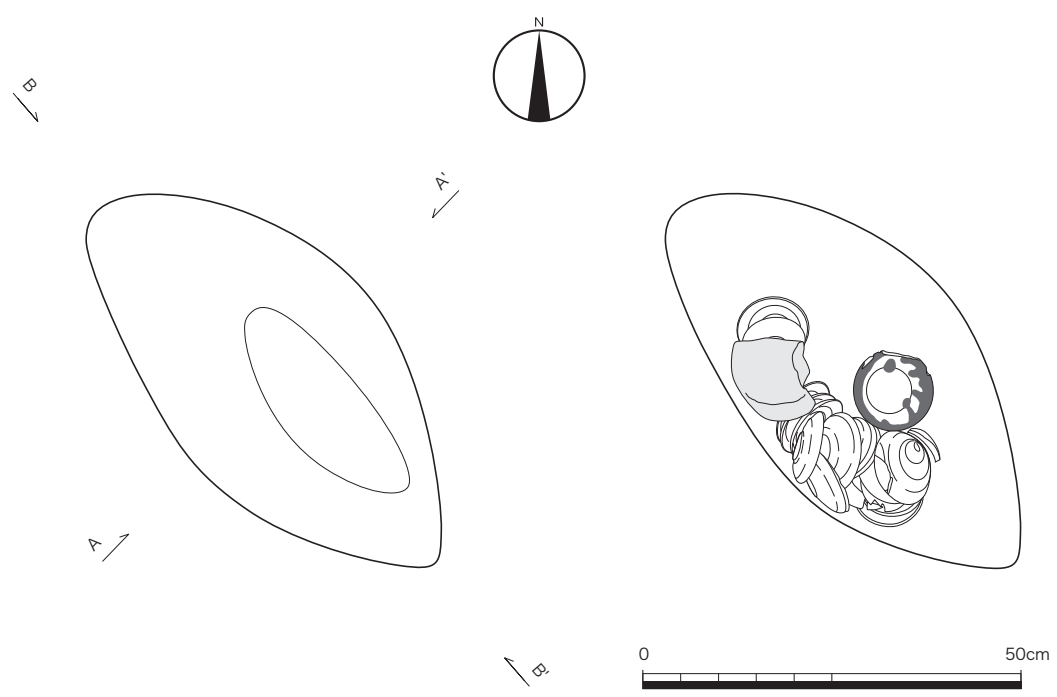
A区 SK175・SD10 他出土状態図・セクション (1:40) アミフセの部分は石を表わす



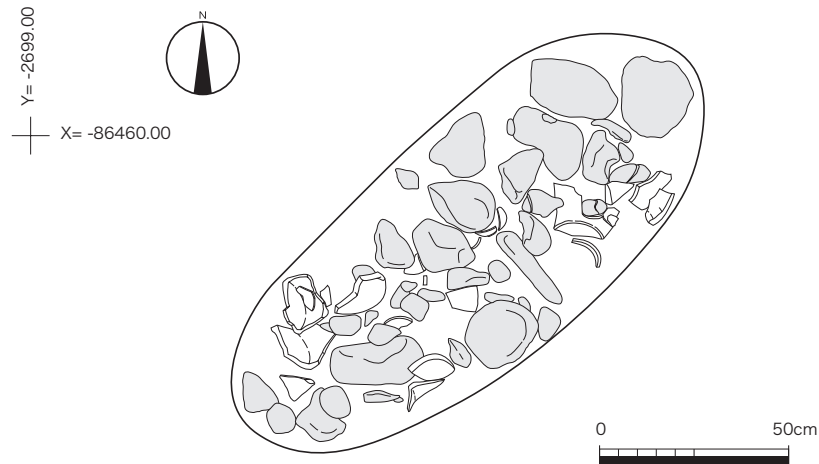
191.0m



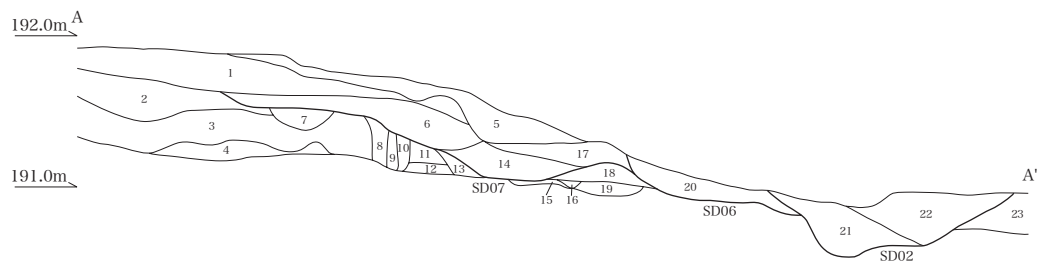
A区 SK174 出土状態図・セクション (1:40) アミフセの部分は石を表わす



B 区 SK441 出土状態図・エレベーション (1 : 10) アミフセの部分は石を表わす

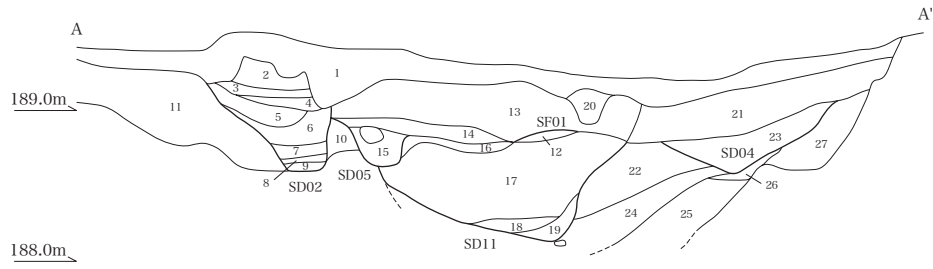


A 区 SX05 出土状態図 (1 : 20) アミフセの部分は石を表わす



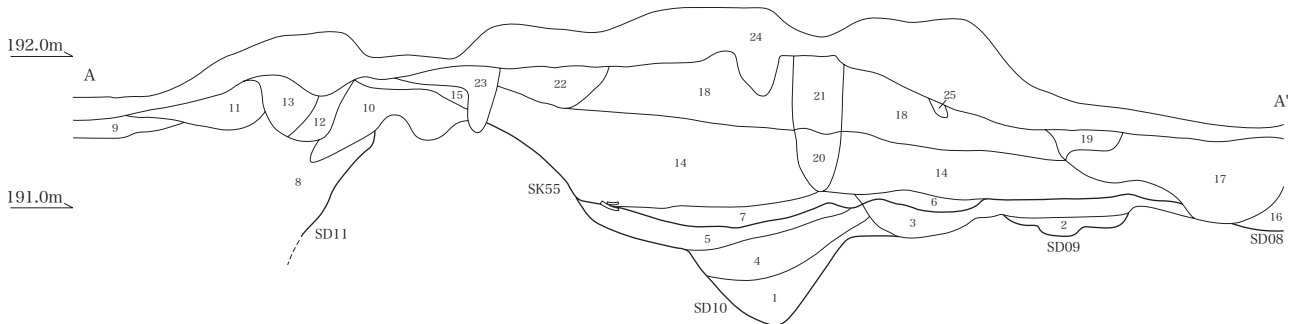
- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 1. 10YR3/4暗褐色 粗粒砂 | 13. 10YR2/3黒褐色 中粒砂 |
| 2. 10YR2/3黒褐色 中粒砂 (粘質) | 14. 10YR3/4暗褐色 粗粒砂 |
| 3. 10YR2/2黒褐色 細粒砂 (粘質) | 15. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 |
| 4. 10YR3/3暗褐色 極細粒砂 (粘質) | 16. 10YR2/2黒褐色 極細粒砂 (粘質) |
| 5. 10YR3/3暗褐色 粗粒砂 | 17. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 |
| 6. 10YR3/4暗褐色 粗粒砂 (粘質) | 18. 10YR2/3黒褐色 細粒砂 |
| 7. 10YR2/3黒褐色から10YR3/3暗褐色 細粒砂 (粘質) | 19. 10YR2/2黒褐色 細粒砂 (粘質) |
| 8. 10YR2/3黒褐色 細粒砂 (粘質) | 20. 10YR2/3黒褐色 中粒砂 |
| 9. 10YR2/1黒色 極細粒砂 | 21. 10YR4/4褐色 細粒砂 |
| 10. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 (粘質) | 22. 10YR3/2黒褐色 細粒砂 (粘質) |
| 11. 10YR2/3黒褐色 細粒砂 (粘質) | 23. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 |
| 12. 10YR4/4褐色 極細粒砂 (粘質) | |

A 区 SD02・06・07 セクション (1 : 50) ※図版5 参照



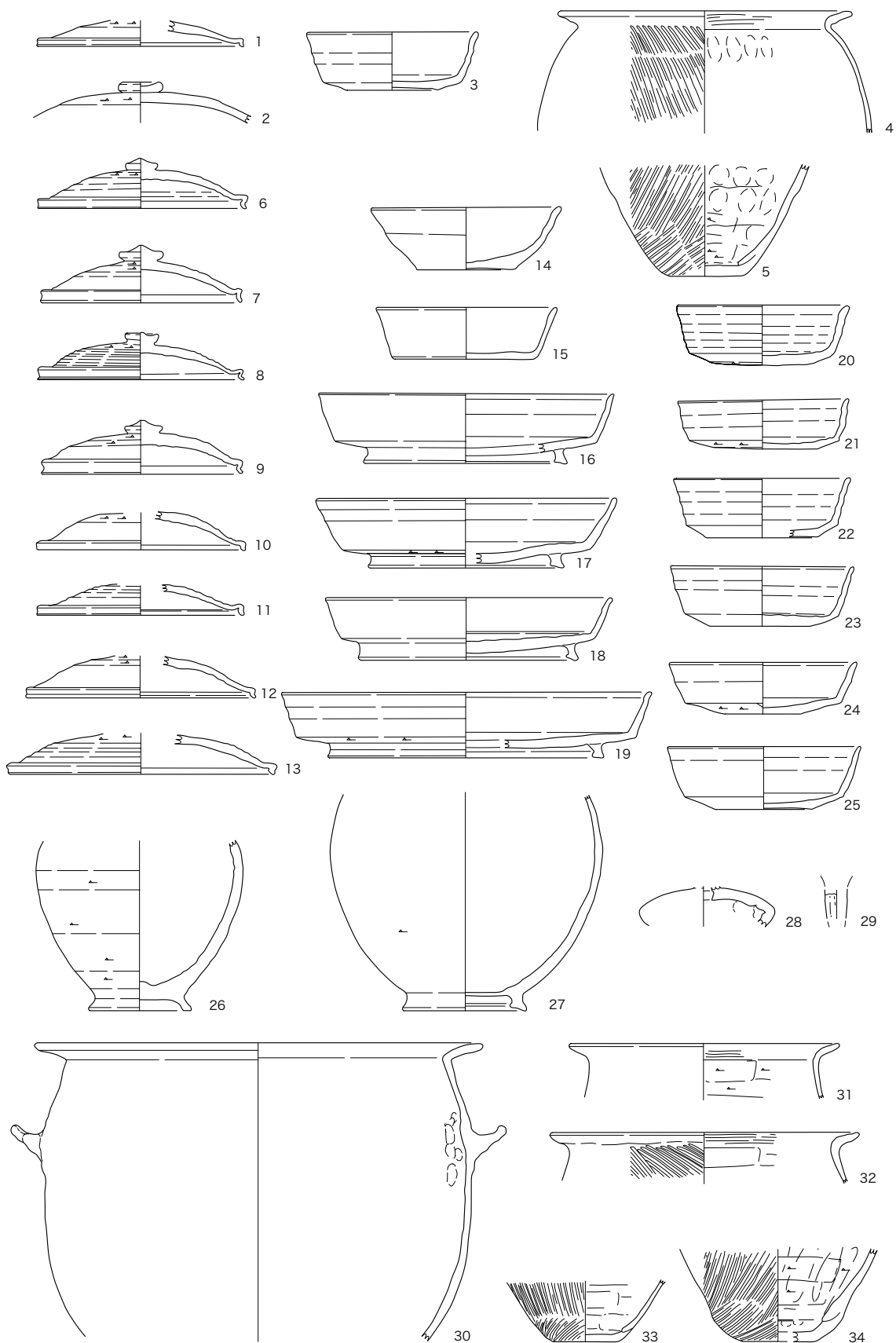
- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 10YR3/3暗褐色 表土 | 15. 10YR4/4褐色 中粒砂 |
| 2. 2.5Y4/4オリーブ褐色 粗粒砂 | 16. 10YR5/4にぶい黄褐色 極粗粒砂 |
| 3. 10YR4/3にぶい黄褐色 細粒砂 | 17. 10YR5/6黄褐色 極粗粒砂 |
| 4. 2.5Y4/4オリーブ褐色 中粒砂 | 18. 10YR4/6褐色 粘質シルト |
| 5. 10YR3/4暗褐色 粗粒砂 | 19. 10YR5/6黄褐色 中粒砂 |
| 6. 10YR4/3にぶい黄褐色 極粗粒砂 | 20. 2.5Y4/6オリーブ褐色 粗粒砂 |
| 7. 10YR4/4褐色 中粒砂 | 21. 10YR3/4暗褐色 細粒砂 (粘質) |
| 8. 10YR5/6黄褐色 極粗粒砂 | 22. 10YR4/6褐色 細粒砂 (粘質) |
| 9. 10YR4/3にぶい黄褐色 細粒砂 | 23. 10YR3/3暗褐色 細粒砂 (粘質) |
| 10. 10YR4/4褐色 細粒砂 | 24. 10YR5/6黄褐色 粗粒砂 |
| 11. 10YR4/3にぶい黄褐色 粗粒砂 | 25. 10YR5/8黄褐色 細粒砂 (粘質) |
| 12. 10YR4/6褐色 粗粒砂 | 26. 10YR3/4暗褐色 細粒砂 (粘質) |
| 13. 10YR4/4褐色 粗粒砂 | 27. 10YR4/6褐色 細粒砂 (粘質) |
| 14. 10YR4/6褐色 粗粒砂 | |

A 区 西壁セクション (1 : 50) ※図版 4 参照



- | | |
|-----------------------------------|-----------------------|
| 1. 2.5Y5/2暗灰黄色 極粗粒砂 | 14. 10YR4/6褐色 粗粒砂 |
| 2. 10YR4/4褐色 極粗粒砂 | 15. 10YR4/6褐色 粗粒砂 |
| 3. 2.5Y4/4オリーブ褐色 極粗粒砂 | 16. 2.5Y4/4オリーブ褐色 粗粒砂 |
| 4. 2.5Y5/4黄褐色 極粗粒砂、10YR5/8褐色土塊を含む | 17. 10YR4/4褐色 粗粒砂 |
| 5. 2.5Y4/4オリーブ褐色 極粗粒砂 | 18. 10YR5/6黄褐色 中粒砂 |
| 6. 10YR4/6褐色 極粗粒砂 | 19. 10YR4/6褐色 極粗粒砂 |
| 7. 10YR4/6褐色 極粗粒砂 | 20. 10YR4/6褐色 中粒砂 |
| 8. 10YR5/4にぶい黄褐色 粗粒砂 | 21. 10YR4/4褐色 中粒砂 |
| 9. 10YR4/4褐色 中粒砂 | 22. 10YR4/4褐色 中粒砂 |
| 10. 10YR4/6褐色 中粒砂 | 23. 10YR3/4暗褐色 中粒砂 |
| 11. 2.5Y4/4オリーブ褐色 中粒砂 | 24. 10YR3/2黒褐色 中粒砂 |
| 12. 10YR4/4褐色 細粒砂 | 25. 10YR4/4褐色 粗粒砂 |
| 13. 10YR3/3暗褐色 中粒砂 | |

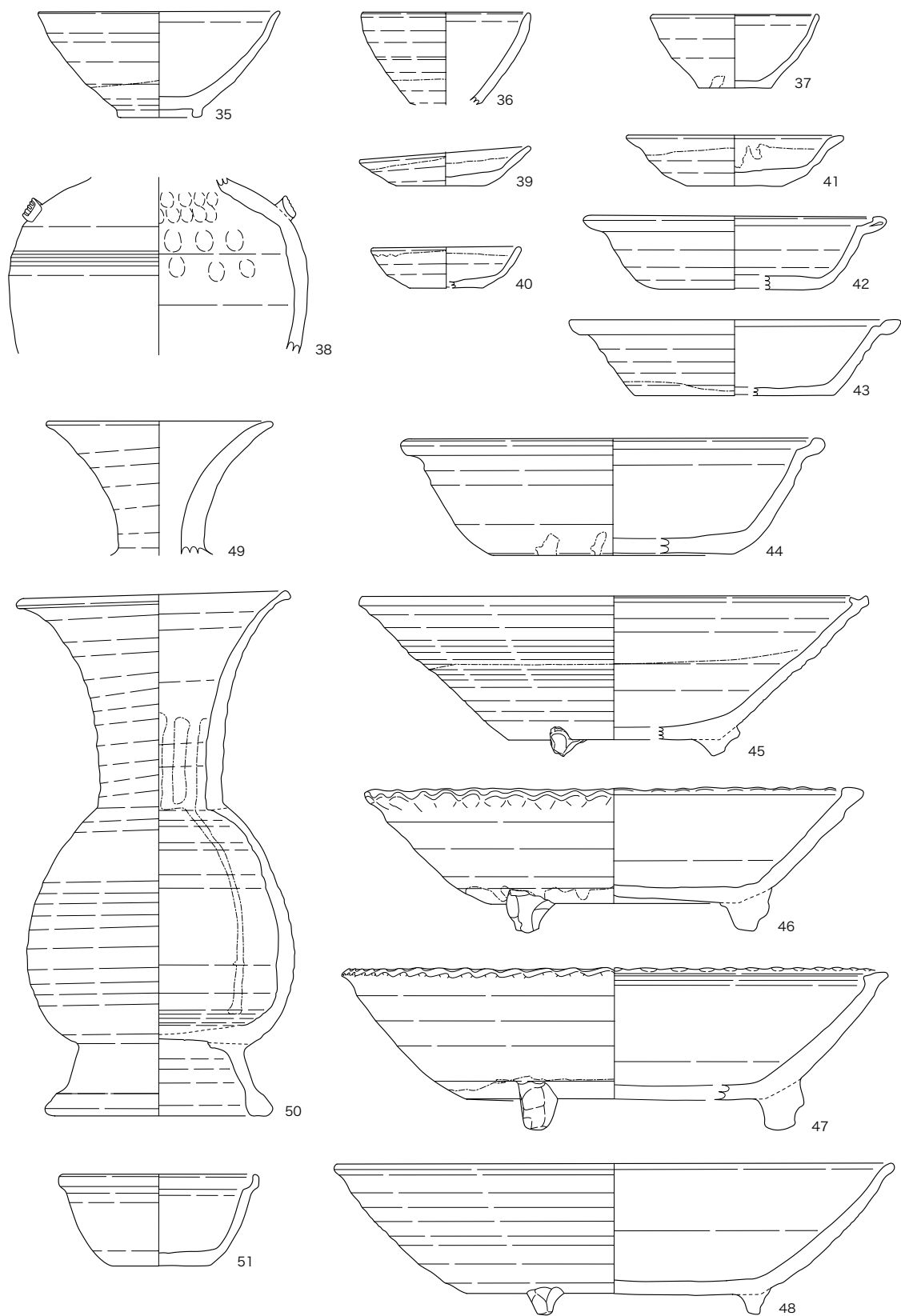
A 区 東壁セクション (1 : 50) ※図版 4 参照



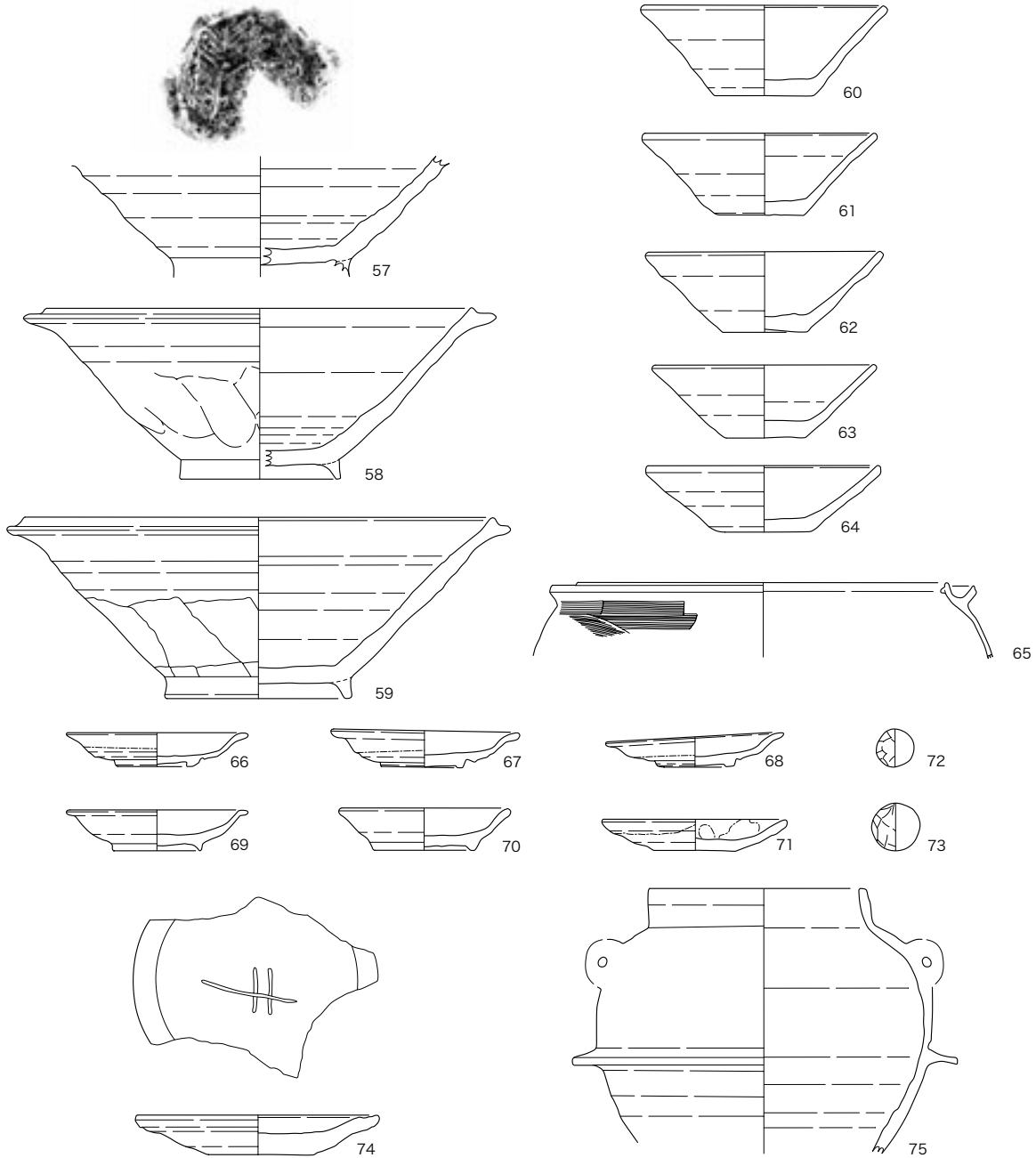
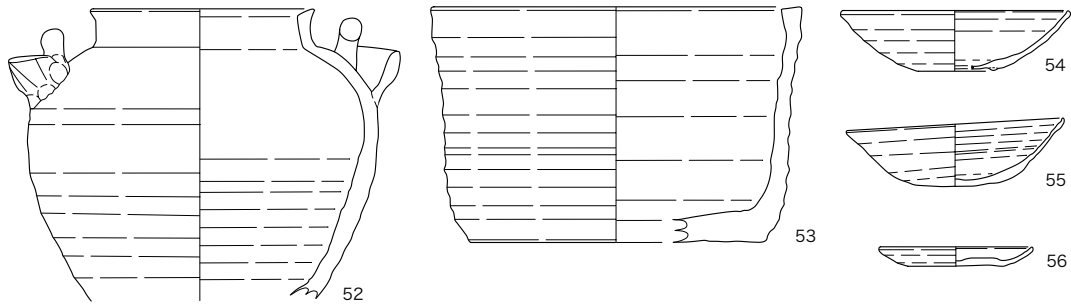
1 ~ 5 B区 SB01

6 ~ 34 B区 SB02

0 20cm



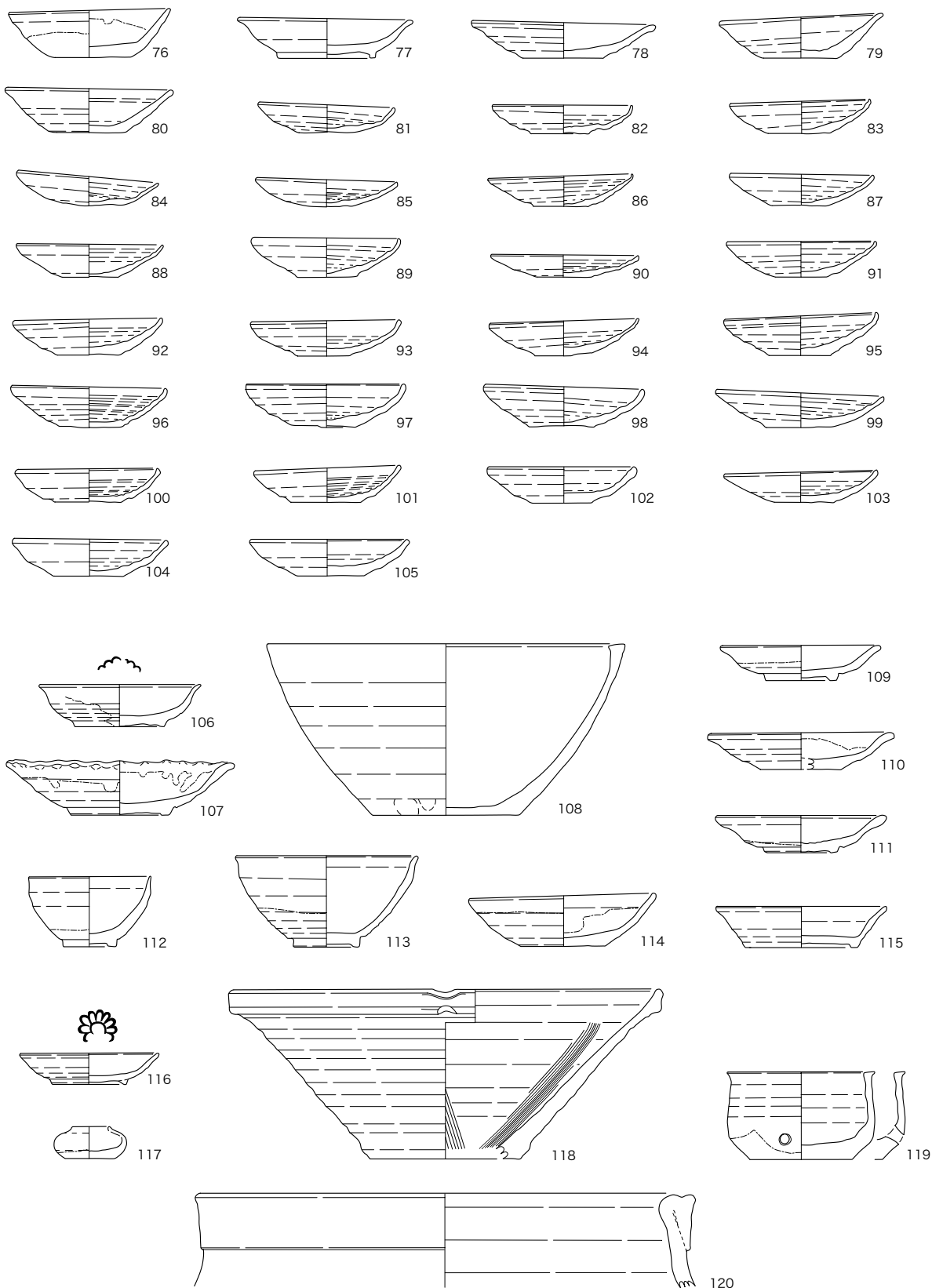
A 区 SK476



52~65 A区 SK476

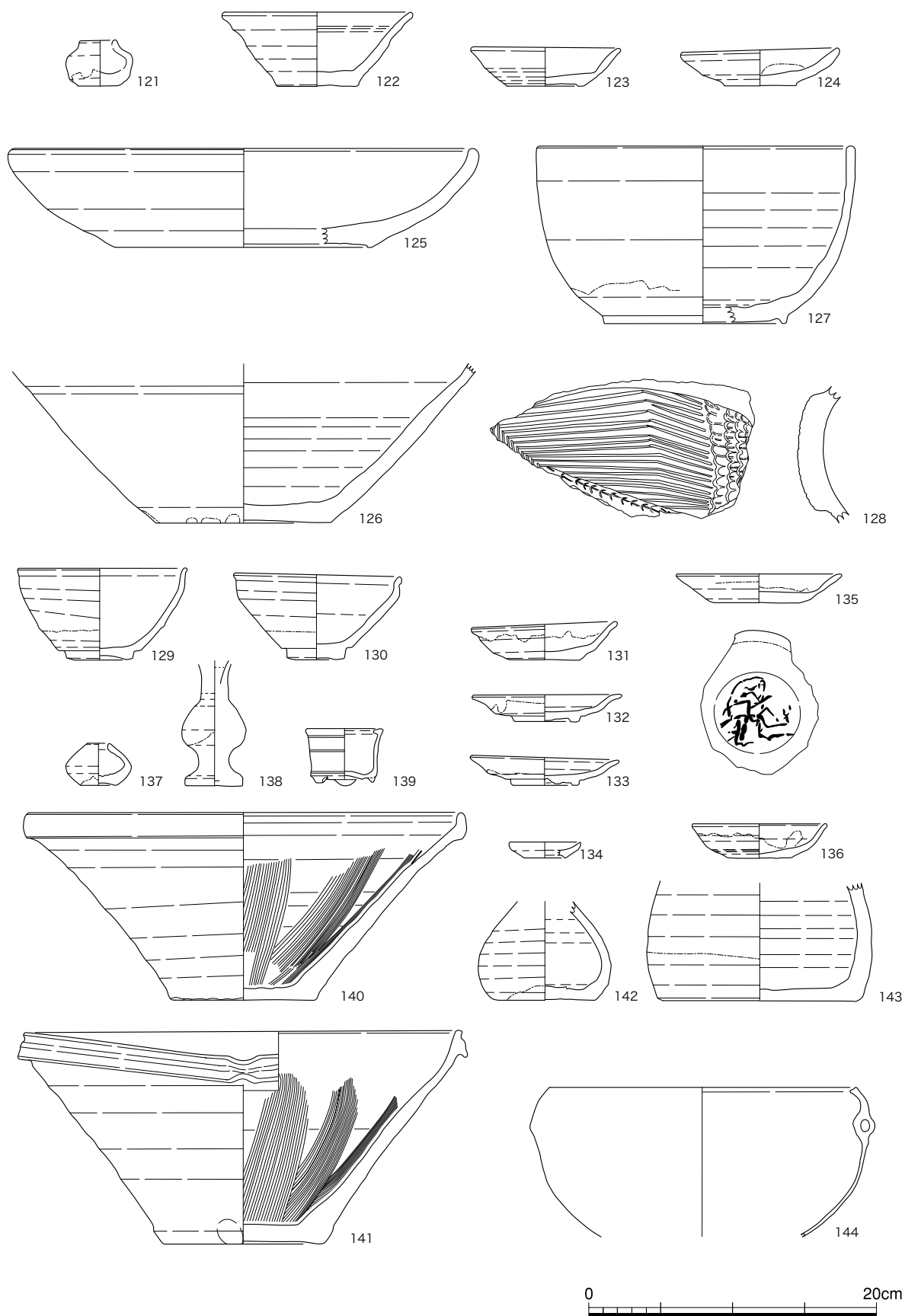
66~75 B区 VD11e 包含層

0 20cm



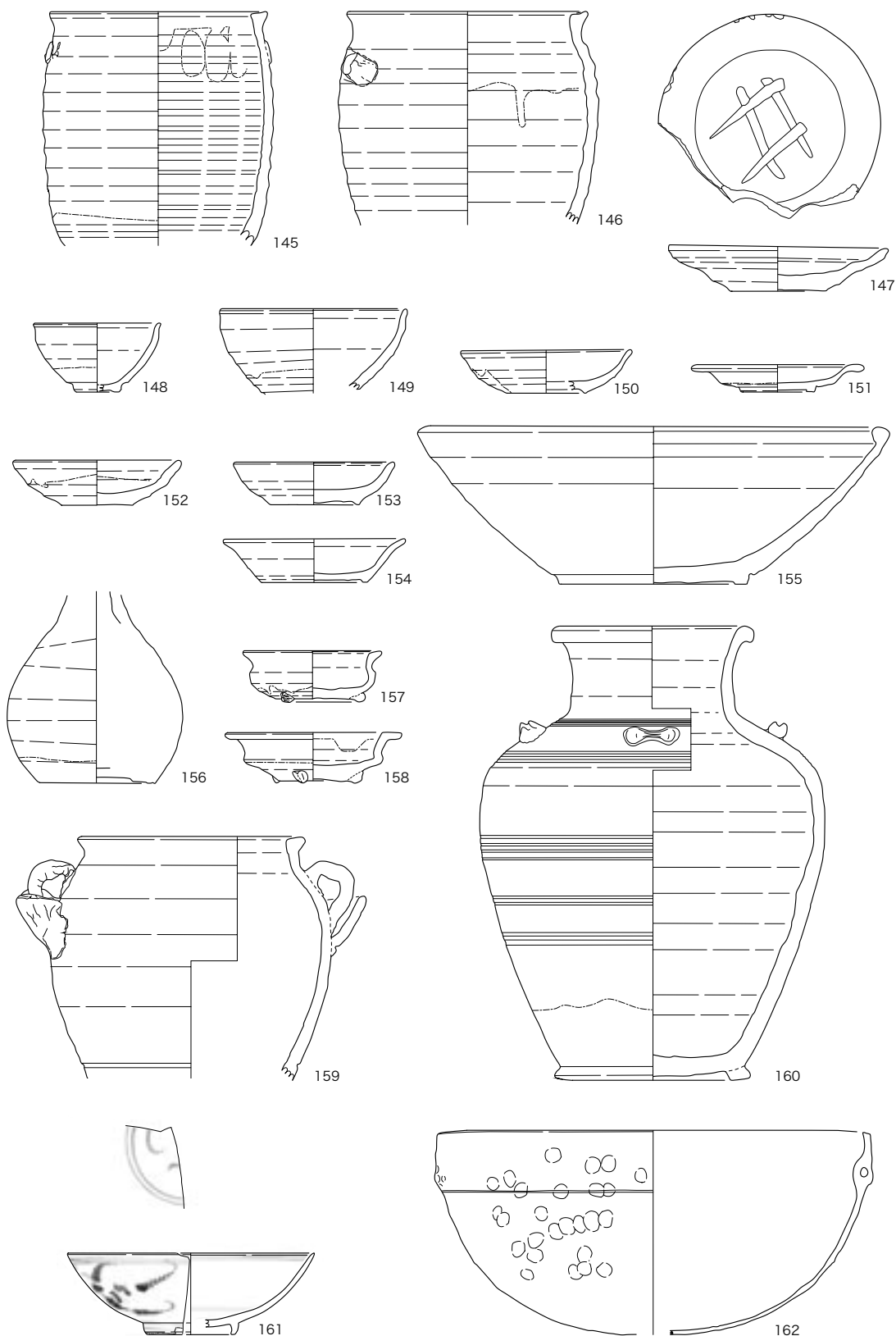
76~105 B区 SK441

106~120 A区 SD10, SK173・175・176・178



121~128 A区 SK174

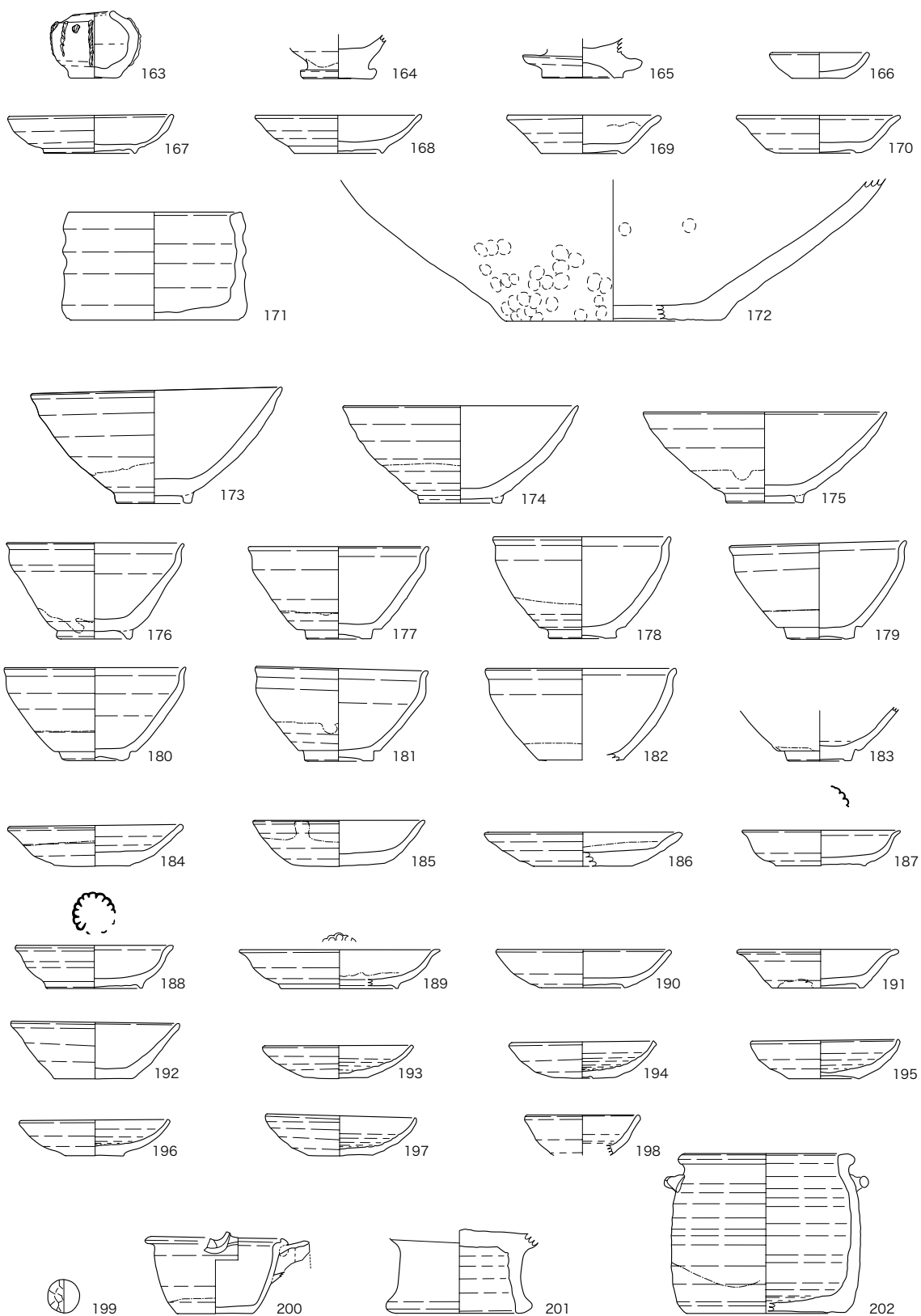
129~144 A区 SK055・171, B区 SK440



0 20cm

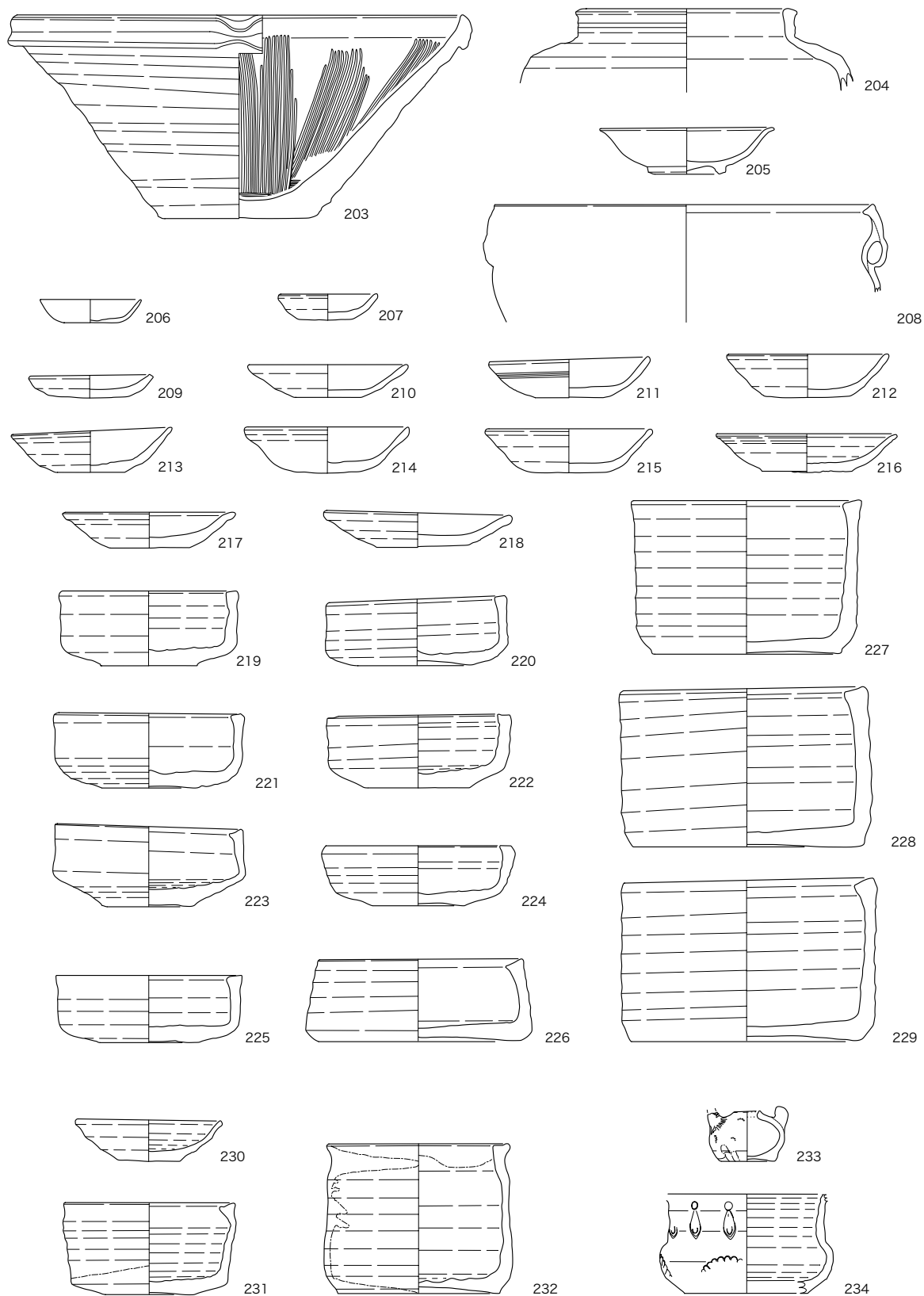
145~147 A区 SK055・171

148~162 B区 VD14b・C, 15b 包含層



163~172 A区 SX07

173~202 A区 SD07

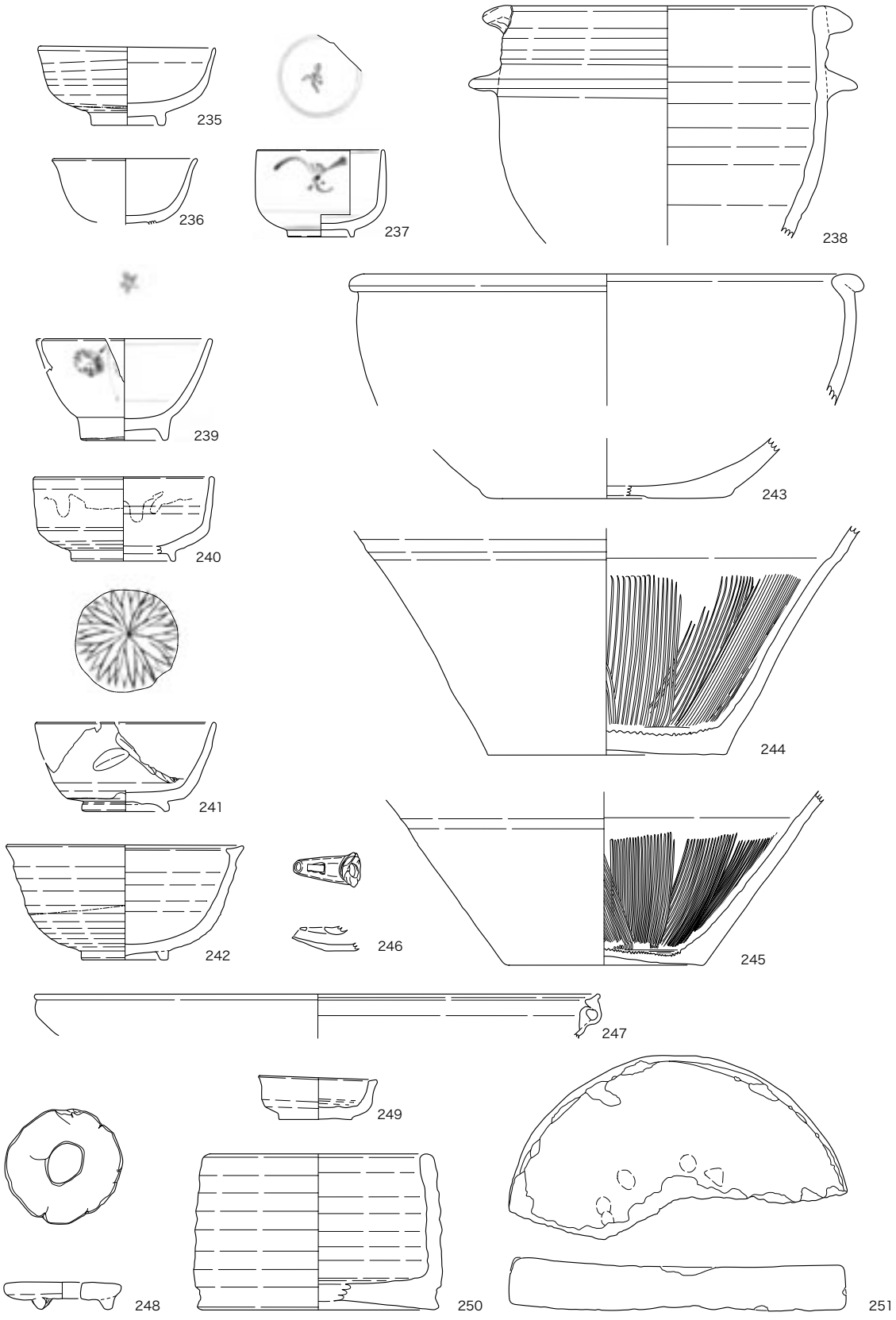


0 20cm

203~229 A 区 SD07

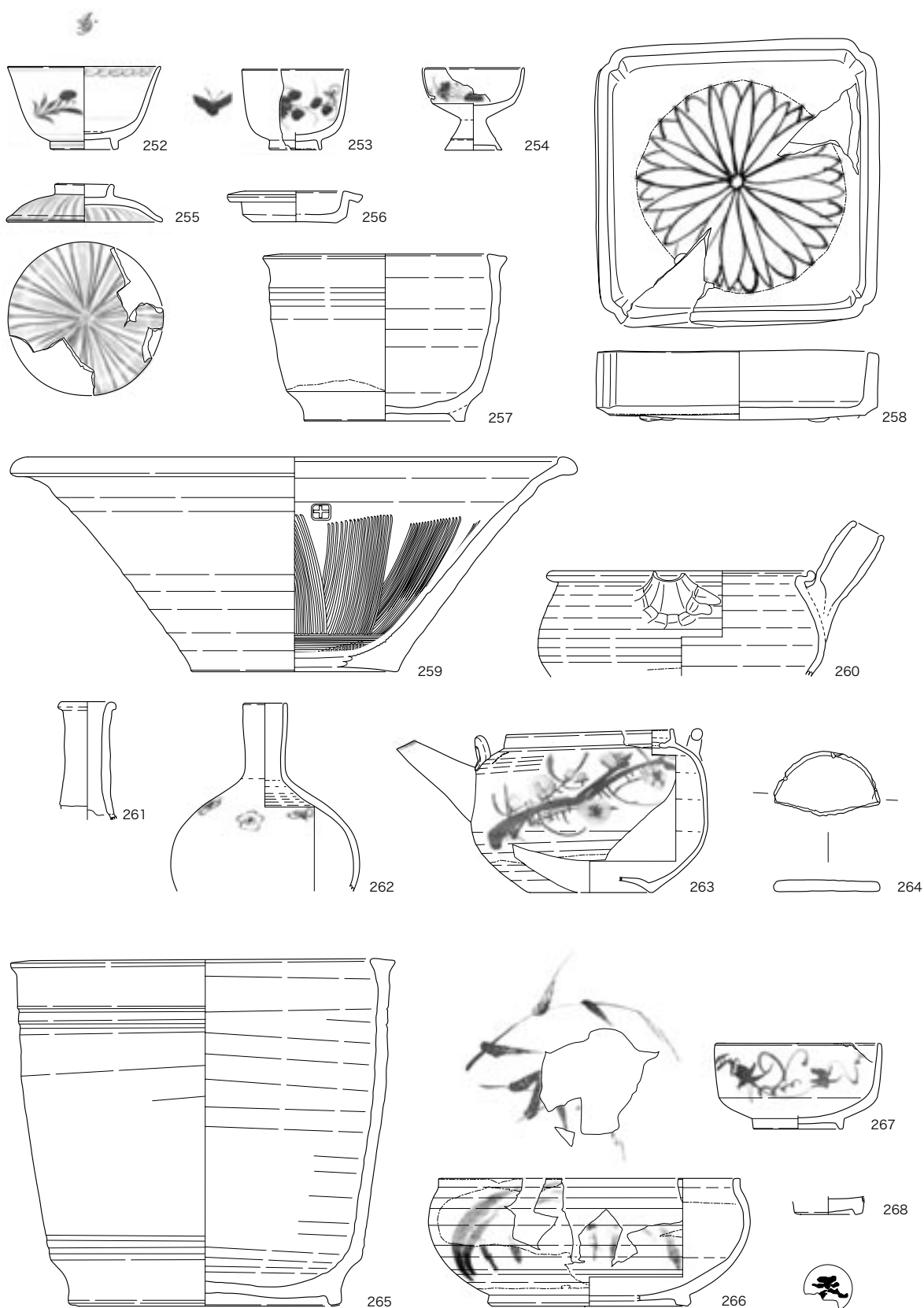
230~232 A 区 SK030

233~234 A 区 SK115



A 区 SX05

0 20cm

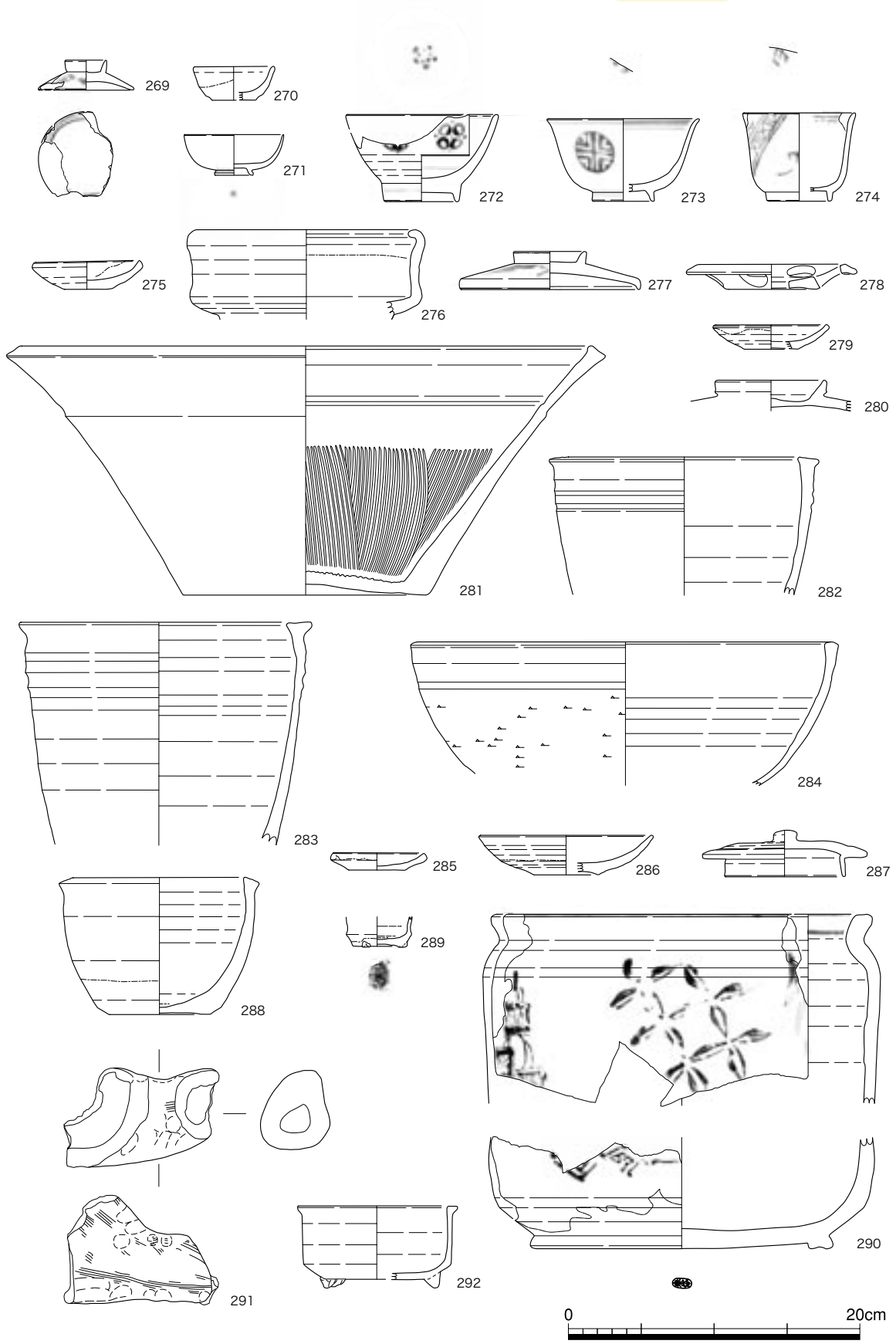


0 20cm

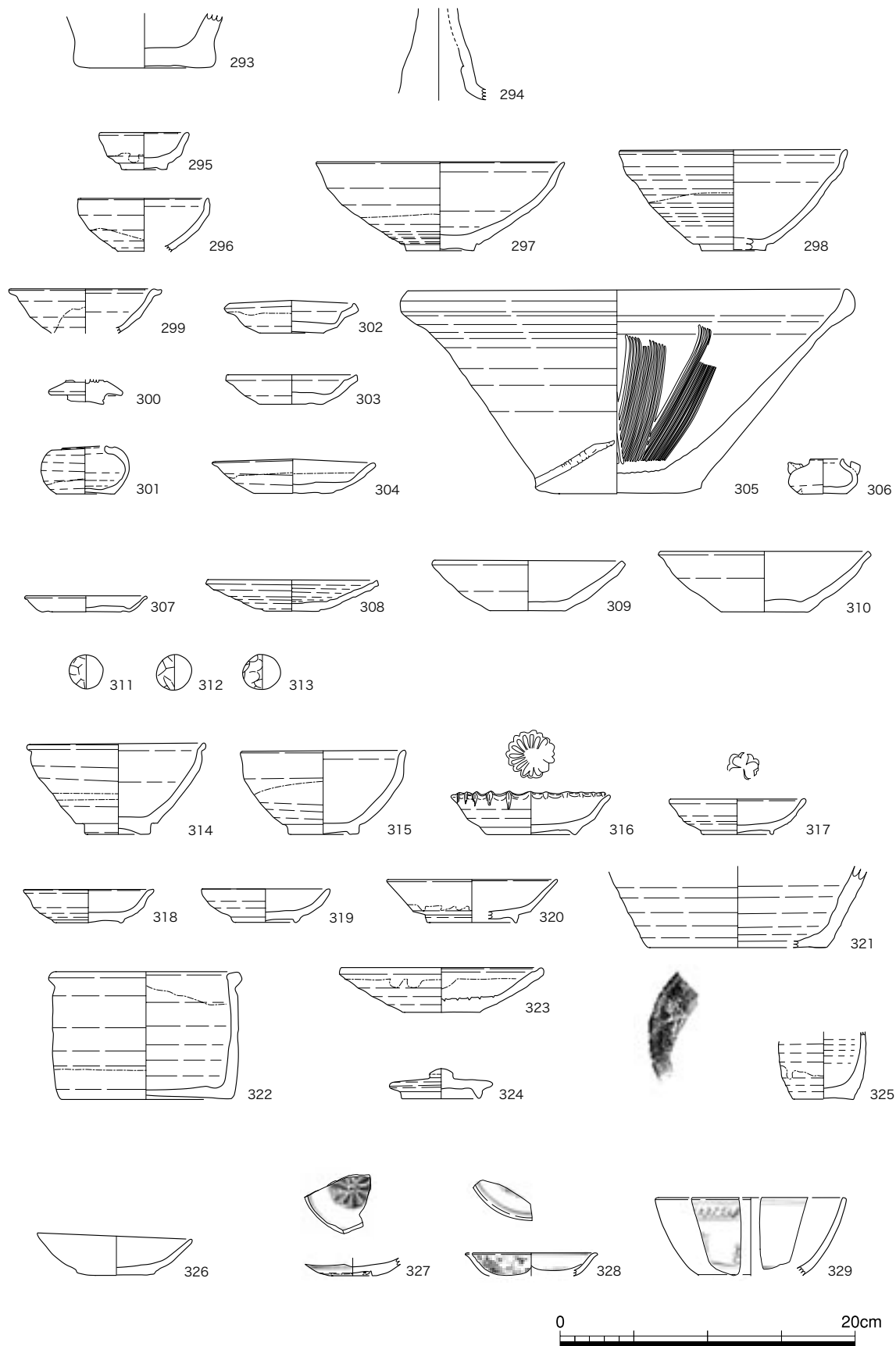
252~264 B区 SD04

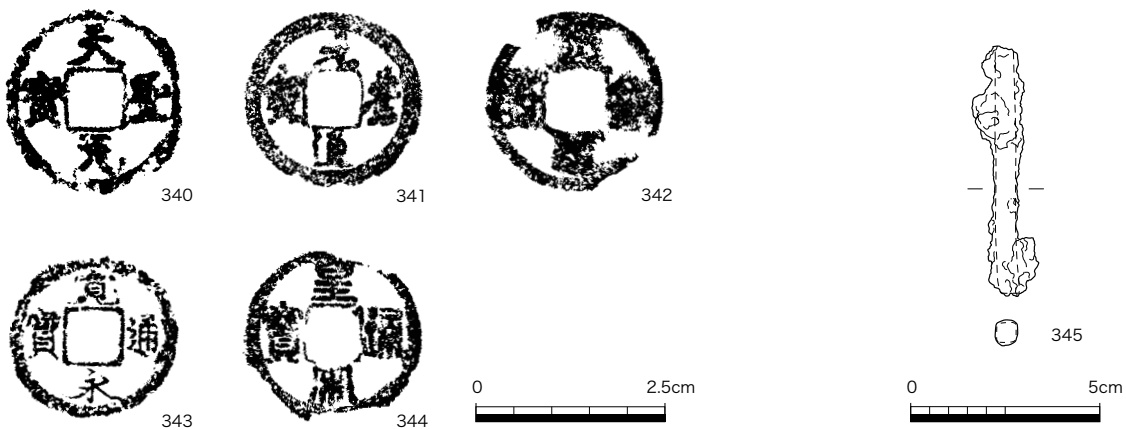
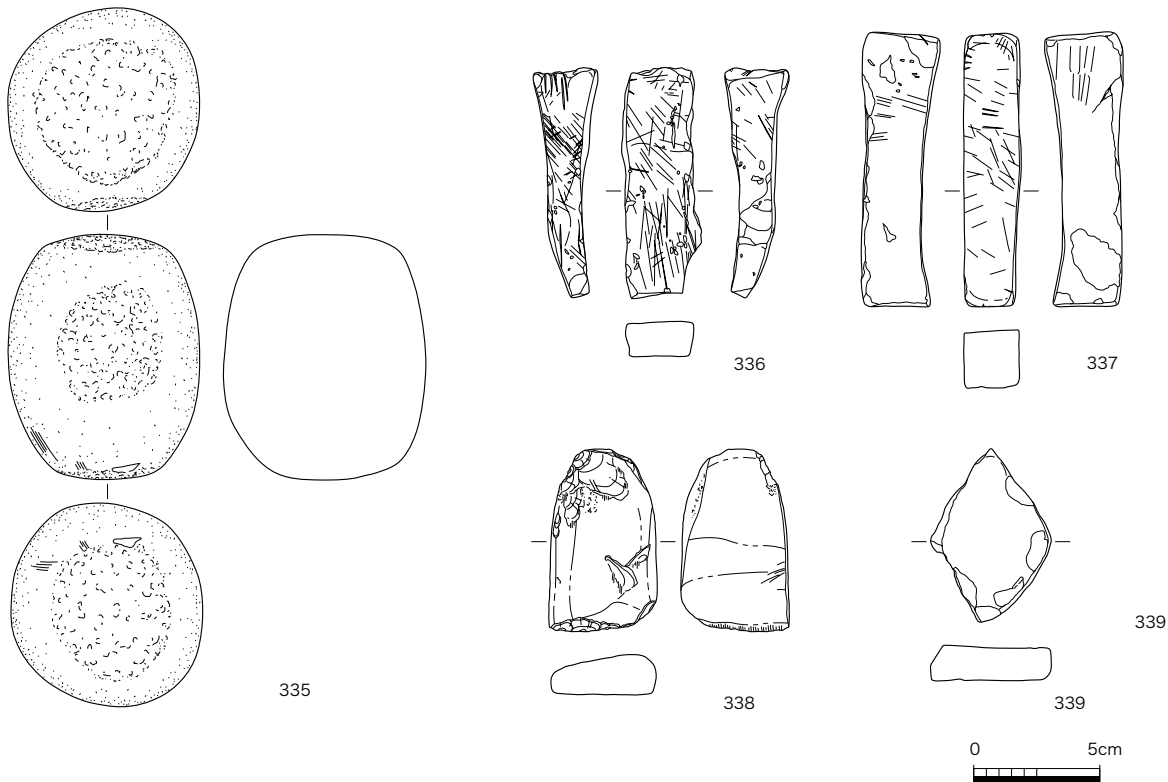
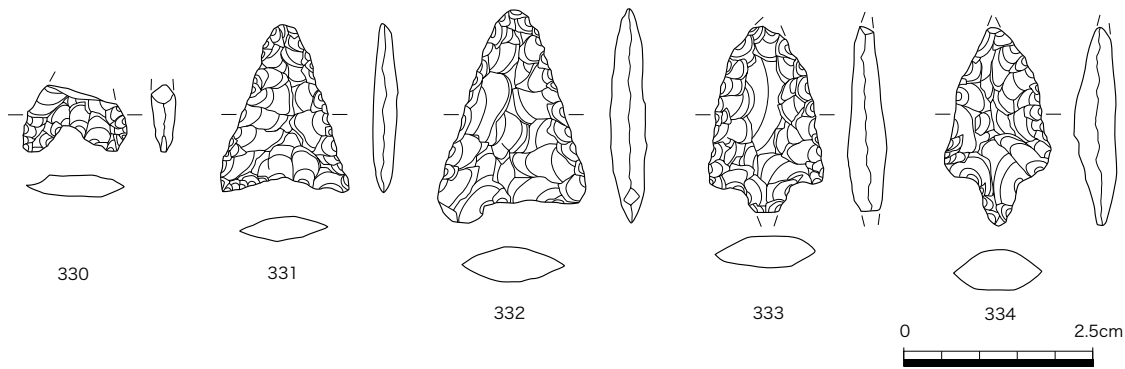
265~267 B区 SD05

268 A区 SD04



269~276 A区 SD11・B区 SD10





遠景

写真図版1（遺構）



01B 区（南西から）
後方にみえるのは八王子の集落



01A 区（北東から）
後方の水田はかつて脇田・前田とよばれていた

全景

写真図版2(遺構)



01B区 全景（南から）



01A区 全景（東から）

全景

写真図版3(遺構)



01A 区 2 面 (北東から)



01A 区 1 面 (北東から)



01A 区 3 面
(北から)

古代

写真図版4(遺構)



01A区 SB01
(北東から)



01B区 SB01
(西から)



01B区 SB02
(北西から)

中世・戦国

写真図版5(遺構)



01A 区 SK476
(北西から)



01B 区 SK441
(南から)

戦国

写真図版6(遺構)

01A区 SD07
(北東から)01A区 SK174
(北西から)01A区 SK175 他
(南西から)

近世

写真図版7(遺構)



01A区 SX05 (東から)



01B区 SK351 (南から)



01A区 SD11 (南西から)

古代

< PRE

TOP

<< RET

NEXT >



331～336を除き
01B区 SB02



160を除き 01A 区 SK476

中世



SK441



76 ~ 105



100



82



98



93



102



99

SD07

◀ PRE

⤴ TOP

◀ RET

NEXT ▶



173



173



176



176



179



179



181



181



203



203



中世・戦国

< PRE

TOP

<< RET

NEXT >



113



113



315



315



109



167



191



158



114



107



128



128



238



259



263



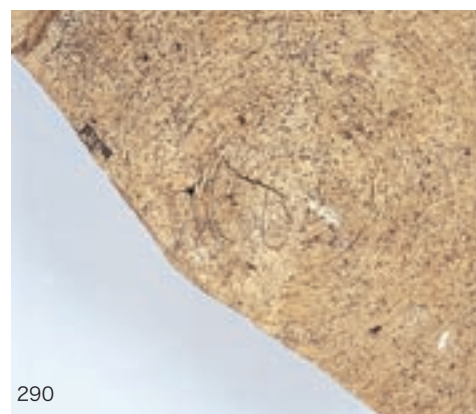
258



266



265



290



290



290

報告書抄録

ふ り が な	たこやまやしきいせき							
書 名	凧山屋敷遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第 116 集							
編 著 者 名	宇佐見守、藤岡幹根、永井宏幸							
編 集 機 関	財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒 498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方 802-24 TEL 0567 (67) 4161							
発 行 年 月 日	西暦 2003 年 8 月 31 日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯 。 ’ ”	東 経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たこやまやしきいせき 凧山屋敷遺跡	せ と し 瀬戸市 たこやまちょう 凧山町	23204	不明	35度 13分 25秒	137度 8 分 3 秒	20020117 ～ 20020330	1, 600 m ²	道路建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
凧山屋敷遺跡	集 落	古 代	竪穴住居	3 棟	縄文土器、石鏃 土師器、須恵器 製塩土器、灰釉陶器		製塩土器	
		中 世	竪穴状遺構	2 基	古瀬戸製品、山茶碗 土師器、中国産青磁 銭貨、砥石		鳥形土製品	
		戦 国	大型土坑 掘立柱建物 溝 4 条 土坑など	1 基 4 棟	大窯製品、常滑産甕 土師器、中国産磁器		大量の窯道具	
		近 世	井戸 水回り施設 溝、土坑など	2 基 1 基	瀬戸美濃産陶磁器 土師器		春岱銘の陶器	
		近 代	道路状遺構 溝 3 条など	1 本	陶磁器			

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集

風 山 屋 敷 遺 跡

2003年 8 月 31日

編集発行 財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社クイックス